

靈界物語 第三九卷 舍身活躍 寅の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三九卷』愛善世界社

2001(平成13)年08月30日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

## 目次

序歌 じよか

總説 そうせつ

第一篇 伊祖いその神風かみかぜ

第一章 大黒主おほくろぬし〔一〇六六〕

第二章 評定ひょうじやう〔一〇六七〕

第三章 出師すゐし〔一〇六八〕

第二篇 黄金清照わうこんせいせう

第四章 河鹿越かじかごえ〔一〇六九〕

第五章 人の心ひとこころ〔一〇七〇〕

第六章 妖霧えうむ〔一〇七一〕

第七章 都率天とそつてん〔一〇七二〕

第八章 母と娘ははむすめ〔一〇七三〕

第三篇 宿世の山道すぐせやまみち

第九章 九死一生きうしいつしやう〔一〇七四〕

第一〇章 八の字はちじ〔一〇七五〕

第一章 鼻摘はなつまみ〔一〇七六〕  
第二章 種明志たねあかし〔一〇七七〕

第四篇 浮木うききの岩窟がんくつ

第一章 浮木うききの森もり〔一〇七八〕  
第一章 清春山きよはるやま〔一〇七九〕  
第一章 焼糞やけくそ〔一〇八〇〕  
第一章 親子おやこ対面たいめん〔一〇八一〕  
第一章 第六章 親子おやこ対面たいめん〔一〇八一〕

第五篇 馬蹄ばていの反影はんえい

第一章 第七章 テームス岬たうげ〔一〇八二〕  
第一章 第八章 關所守せきしよもり〔一〇八三〕

第十九章 玉山嵐たまやまあらし〔一〇八四〕

附録 大祓祝詞解おほはらひのりとかい

〔  
〔  
〔  
〔  
〔  
〔  
〔  
〔  
〔  
〔

序歌 じよか

八岐大蛇や醜狐 やまたをろち しこぎつね

曲鬼探女の蔓れる まがおに さぐめ はびこ

暗黒無道の世の中は あんこくぶだう よなか

仁義道德影も無く じんぎだうとくかげ な

常世の闇の如く也 とこよ やみのごと なり

人の心は日に荒び ひと こころ ひ すさ

世道は月に頹廢し せだう つき たいはい

親子疎んじ睨み合ひ おやこうと ちら あ

兄弟互に相鬪ぎ けいていたがひ あひせめ

親戚争ひ相離れ しんせきあらそ あひはな

朋友信を忘却し ほういうしん ぼうきやく

各自に悪罵嘲笑し たがひ あくばてうせう

上下は常に反目し しやうか つね はんもく

意志の疎隔は恐ろしく いし そかく おそ

紛擾絶ゆる暇も無く ふんぜう た ひま な

資本家労働者相對し しほんか らうどうしや あひたい

農商工は振起せず のうしやうこう しんき

不景氣風は吹き捲り ふけいきかぜ ふ まく

官民互に卑みて くわんみんたがひ いやし

政令全く行へず せいれいまったく おこな

主僕疎遠に墮りて しゅぼくそゑん おちい

國家社會は刻々に こくかしゃくわい こくこく

危機に瀕しつ諸々の

譎詐の曲業時を得て

暴戾盛に行はる

忠誠の人士は足曳の

山に隠るひ野に潛み

頭をもたぐる時を得ず

奸邪は天下に跳梁し

誠の神は世に出でず

亂れ切つたる娑婆世界

挽回すべき由も無し

醫學衛生完備して

惡疫益々蔓延し

交通機關は完備して

有無通ずるの途もなし

國家の富力増進し

而して饑餓は人々の

頭に刻々迫り來る

法警成るに従ひて

殺傷頻りに行はれ

生産倍々夥多にして

物價は時々に凋落し

輸入超過の慘状は

全くその度を失ひぬ

國庫漸く窮乏し

兌換借款滔々と

經濟界を危くし

國防成るに従ひて

國辱頻りに興るあり



高貴は俗に親しみて

卑賤は倍々僭上す

富豪階級は押なべて

皆文弱に流落し

淫酒の欲を漁りつつ

日に夜に社會を汚し行く

貧弱愈窮乏し

怨嗟の聲は彌高し

都會に住める人々は

安逸快樂に馴れ染まり

奢侈限り無く増長す

田舎は都會の風に染み

淳朴の氣は地を拂ふ

學者の偏狹陋劣さ

怪論迷説相ひさぎ

宗教宣布に従事する

僧侶は教義を曲解し

宗祖の教旨を滅して

品行月に墮落しつ

精神界を攪亂し

武人は錢を愛着し

士道全く廢り行く

商賈は謀計事と爲し

信用全く地に落ちぬ

青壯年は惡風に

眼を眩惑し世に習ひ

競うてハイカラのみ好む

良家の子女は學校に

通ひ乍らも蝶の如

紅白粉を塗立てて

淫靡の風は吹き荒び

不良少年續出し

社會の秩序を混亂し

拾收すべからず成り果てぬ

賢母良妻家に泣き

蓄妾常に逸樂す

藝妓屋娼妓屋繁昌し

良家益々相寂し

國家の元老はただすらに

老後を急ぎ勢力を

争ひ乾兒を相募り

政客權を弄び

黨弊擁護に餘念なく

神聖無垢の議事堂に

禽獸叫び蛇を投げ

雲助輩の行動を

演出するこそ慷慨けれ

國家の選良は大切な

國議を輕視し侮辱して

喧々囂々市場の如し

國帑を猥に浪費して

民の負擔は日に重く

賦課は益々大となり

國家破産の緒を開く

眼を轉じて眺むれば

外侮頻りに相到り

國交益々非運なり

人の思想は悪化して

噴火山上有る如く

何時爆發も計られず

此をば思ひ彼想ひ

夜も碌々に眠られず

涙は腮邊に滂沱たり

古今未曾有の此慘状

救ひて松の神の代に

開かむための神の道

樹てさせ玉ひし尊さよ

あゝ惟神々々

御靈幸へましまして

五逆十惡の濁世を

誠の神の現はれて

治め玉はる時はいつ

松間の長き鶴の首

龜の齡の常久に

守らせたまへと祈りまつる

天地の神も放り坐し

風伯怒りを相發し

颱風屢到來し

雷電ひらめき激怒して

天津御空に鳴り渡る

水神忽ち嚇怒して

水難頻りに續發し

海神怒濤を捲き起し

地上の蒼生を洗ひ去り

大地の神は旱魃を  
もたらし地疫を拂ひまし

地震の神は地軸をば  
時々に動揺し玉ひつ

汚れし家を焼倒し  
火龍は紅蓮の舌を吐き

地上の汚穢を焼き盡す  
軍神怒りて天賊や

地妖を隈無く麤殺し  
清め玉ふぞ畏けれ

神の恵の幸ひて  
天來未知の大偉人

現はれ來り天地の  
諸の穢を潔齋し

誠の道にかなひしと  
神に選ばれ了ふせたる

民をば常永に救ひまし  
五六七の御代と成るなれば

爰に初めて天國は  
地上に芽出度顯現し

無上至樂の世と成らむ  
邪神を懲し善神を

救はせ玉ふ御經綸  
謂ふも畏き限り也

是ぞ全く皇神の  
吾等に賜ひし御遺訓ぞ

萬代倦まず皇神は  
神訓垂れさせ玉へども

よびと 世人の心いや曇り

たいぎ 大義を没し名分を

すめおほかみ 皇大神は世を歎き

よびと 世人を導き救はむと

くわうだうほんぎ 皇道本義を宣り玉ふ

かみ 神の御綱に曳かれつつ

こ 斯の御教を遵奉し

ひと 人は次第に善良の

つく 盡す眞人となりぬべし

しぜん 自然に天地は清まりて

じつげつ 日月雙び輝きて

くさき 草木は緑に禽鳥は

うった 謳ひて神の御恵に

あゝ 惟神々々

しんい 神意を解するものも無く

さと 覺らざるものばかりなり

かみ 神の教を立て玉ひ

あや 綾の聖地に現れまして

たふと 尊き世とは成りにけり

よ 寄り來る人は押並べて

もはん 模範を世界に示しなば

みたま 身魂と化りて世の爲に

かみ さすれば神は喜ばし

ごふうじふう 五風十雨の順序よく

ばん 萬民歡喜の雨に濡れ

かみ 神の御國に泰平を

よく 浴する御代となりぬ可し

かみよ 神代の遠き物語

『舍身活躍』 寅の巻

序文に代へて述べ立つる。

大正十一年十月廿日

總説

神素盞鳴尊が八岐大蛇を言向け和し、遂に肥の川上に於て、手撫槌、足撫槌の娘稲田姫命の危難を救ひたまひし神代の物語を續行するに就て、高加索山を中心として先づ五天竺の活動より口述する事と致しました。

オロチと言ふ意義は山の事である。凡て風雲は山より發生するものにして、オロチは風である。山には古來善神も鎮まり玉ひ、又邪神も盛んに潛伏して居た。故に太古の所謂八王八頭は山を根據として其地方々々を鎮め守られて居たのも、要するに山嶽に邪神棲息して天下を攪亂せしを以て、邪神の本據に向つて居所を定められたのである。又肥の川上といふ言義は日の側陽陰といふことで、朝日の

直刺す夕日の日照らす、山の意義であつて、出雲とは雲の發生する高山の意義で  
今日の伯耆の大山を指したものである。最後に神素盞鳴尊が自ら登山して邪神を  
滅亡せしめたまひて大蛇より村雲の寶劍を奪ひ、之を天照大神に獻り赤誠忠良の  
大精神を發揮し玉ひし物語であります。素盞鳴とはスバルタンの意であつて、ス  
は進展、バルは擴張とか神權發動とかの意であり、タンは尊とか君とか頭領とか  
の意味である。又天照大御神は、アテナの女神又はアポロの女神と謂ふこと  
になる。アポロは天原の意味にもなり、葦原は亞細亞の意味であり、葦原はア  
ツシリヤとなりアジアとなつたのである。太古の亞細亞は現今の小亞細亞であつ  
たが時世の變遷と共に、廣大なる亞細亞となつたのである。  
却説五天竺は境周九萬餘里、三垂は大海、北は雪山を背にし北廣く南狭く、形  
半月の如く野を劃して區分すること七千餘國、四時殊に暑熱激しく地は泉濕多く、  
北は乃ち山阜軫を隠し丘陵斥鹵なり。東は即ち川野沃潤にして田園山壟膏腴なり。  
南方は草木繁茂し西方は土地礪确なりと傳へられて居る。  
之に依つて天竺の大概の様子は窺知されることと思ふ。

天竺の名稱は隨分澤山あつて異議糾紛し、容易に一定せなかつた。太古は身毒と云ひ或は賢豆と曰ひ現代にては正音に従つて印度と云つて居る。印度國は地に隨つて國と稱へ殊に方俗を異にし遙に總名を擧げて其の最も美なりとする名を呼んで之を印度と謂ふのである。印度を唐にては月と謂つた。神代の名稱も亦月と稱へられたのは第一卷に示す通りである。月に多數の名號ありて印度と稱するは其の一稱である。阿毘曇心論の音義にも、

天竺を或は身毒と云ひ、或は賢豆と言ふは皆訛なり。正しくは印度と言ふ。印度は月と曰ふ。月に千名有り。斯れ一稱なり。一説に曰ふ、賢豆の本名は因陀羅婆陀那此を主處と曰ふなり。天帝護る所なるを以ての故に之を號する耳云々。

又印度の人民には四種の差別がある。まづ、第一を刹帝利と云ふ。是は代々王となるべき家柄で即ち五天竺七千餘國の國々の王となつて居るのである。



第二に婆羅門といふ。是を翻譯すれば淨行と云ふことで即ち淨き行と書く詞で、國柄相當に有り來つた學問をして代々家を傳へるものである。

第三を毘舍といふ、これは商人である。

第四を首陀と云ふ。是は農業を營むもので所謂百姓である。靈界物語第一卷に

婆羅門には三階級ある事を口述しておきましたが、それは太古の神代の事であり、印度四姓の第二位のバラモンの部族内に出來た階級である。釋迦の出現した時代にも、地方に由つて行はれて居たのである。

以上言つたのは、總括して印度全體の制度を説いたので、今より三千年以前には印度の人民は前述の如く、刹帝利、婆羅門、毘舍、首陀の四階級と成つて居たのであります。一寸茲に混線せない様に重ねて述べておきました。

大正十一年十月二十日 王仁識

第一篇 伊祖の神風

第一章 大黒主〔一〇六六〕

遠き神代の昔より 天地の神の大道を

説きさとしゆく諸々の 教は千ぐさ萬種

數限りなき其中に 天地を造り固めたる

元つ御祖の御教を 誠の神の現はれて

説きさとすなる三五教 天教山や地教山

貴の都のエルサルム 黄金山下を初めとし

靈鷲山や萬壽山 自轉倒島に渡りては

綾の聖地の四尾山 其外百の國々に

をしへつかさ まくば  
教司を閒配りて 安く樂しき神の世を

たてて五六七の御教に 世人を助け守らむと

もも 百の司を任せ玉ひ 千々に心を配ります

さんだいけう ごだいけう  
三大教や五大教 經と緯との水火合せ

かた たま あななひ  
固め玉ひし三五の 教を損ひ破らむと

やまた をろち しこぎつね  
八岐の大蛇や醜狐 曲鬼共の醜靈

あめ した じうりん  
天が下をば蹂躪し 此世を曇らせ汚さむと

しこめ さぐめ かすおほ  
醜女探女を數多く 四方に遣はし闇雲に

たけ ぞう たてけり 天足彦や胞場姫の

けが たま いでし 曲神共は村肝の

こころ きよ かむじかき しほながひこ  
心も清き神司 鹽長彦の體を藉り

あるひ おほくにひこ かみ そのほかも  
或は大國彦の神 其外百の神人と

よ あら けう けう  
世に現はれてウラル教 バラモン教を開設し

あななひけう たいかう かみ ひかり てら  
三五教に對抗し 神の光に照されて

メソポタミヤを遁走し 或はコーカス山館

見棄てて逃げ行くウラル姫 性懲りもなくどこ迄も

千變萬化の妖術を 使ひて正道を紊さむと

狂ひ廻りし醜神の 常住不斷の物語

いよいよここに述べ初むる あゝ惟神々々

御靈幸はへましませよ。

常世の國の常世城にあつて三葉葵の旗を押立て、自ら常世神王と稱して羽振を  
利かし居たる大國彦は、三五教の爲に其惡虐無道を警められ、部下の廣國別をし  
て常世城を守らしめ、ロツキー山に日出神と僞稱して大國姫をば伊奘册命と僞稱  
せしめ、黄泉比良坂の戦ひに、部下の軍卒は大敗北し、遂にはロツキー山の鬼と  
なり、茲にバラモン教を開設することとなつた。

大國彦命の長子大國別はバラモン教の教主となり遠く海を渡つて、埃及のイホ  
の都に現はれ、其教は四方に旭の豊榮昇るが如く輝き渡り、人心を惑亂して、正

道將に亡びむとせし時、三五教の夏山彦、祝姫、行平別外三光の神司の爲に、其勢力を失墜し、遂に葦原の中津國と稱するメソポタミヤの顯恩郷に本據を構へ、小亞細亞、波斯、印度等に神司を數多遣はして、バラモンの教を擴充しつつあつた。

神素盞鳴尊は天下の人心日に月に惡化し、世は益々暗黒ならむとするを憂ひ玉ひて、八人の珍の御子を犠牲的に顯恩城に忍び入らしめ、バラモン教を歸順せしめむとし玉ひたれ共、大國別命歸幽せしより、左守と仕へたる鬼雲彦は、忽ち野心を起し、自ら大棟梁と稱して、バラモン教の大教主となり、大國別の正統なる國別彦を放逐し、暴威を揮ひ居たりしが、天の太玉の神現はれ來りて、神力無邊の言靈を發射し歸順を迫りたれども、素より暴惡無道の鬼雲彦は、一時顯恩郷を脱け出し、再び時機を待つて、捲土重來、三五の道を顛覆せしめむと、鬼雲姫、鬼熊別、蜈蚣姫其他百の司と共に黒雲を起し、邪神の本體を現はしつつ、顯恩城を立出で、それよりフサの國、月の國を横斷し、磯輪垣の秀妻の國と名に負ひし安全地帯、自轉倒島の中心大江山に立籠り、徐に天下を席卷すべく劃策をめぐら

しつつかつた。

然るに又もや三五教の神司の言靈に辟易し、再び海を渡りてフサの國に向ひ、  
殘黨を集めて、バラモンの再興を謀りつつ、私かに月の國、ハルナの都にひそみ、  
逐次勢力をもり返し、今は容易に對抗す可らざる大勢力となり、月の國を胞衣と  
して、再び天下を掌握せむとし、最早三五教もウラル教も眼中になきものの如く  
であつた。

此ハルナの都は月の國の西海岸に位し、現今にてはボンベーと稱へられてゐる。  
鬼雲彦は大國彦命の名を奪ひて、自ら大國彦又は大黒主神と稱しつつ、本妻の  
鬼雲姫を退隱せしめ、妙齡の女石生能姫といふ美人を妻とし、數多の妾を蓄へて、  
バラモン教の大教主となり、ハルナの都に側近き兀山の中腹に大岩窟を穿ち、千  
代の住家となし、門口には嚴重なる番人をおき、外教徒の侵入を許さなかつた。  
ハルナの都には公然と大殿堂を建て、時々大教主として出場し數多の神司を支  
配しつつあつた。夜は身邊の安全を守る爲、兀山の岩窟に隠れて居た。此兀山は  
大雲山と名づけられた。

鬼雲彦の大黒主命は自ら刹帝利の本種と稱し、月の國の大元首たるべき者と揚言しつゝあつた。

月の國の七千餘ヶ國の國王は、風を望むで大黒主に歸順し、媚を呈する状態となつて來た。神素盞鳴大神の主管し玉ふコーカス山、ウブスナ山の神館に集まる神司も、此月の國のみは何故か餘り手を染めなかつたのである。それ故大黒主は無鳥郷の蝙蝠氣取になつて、驕心益々増長し、今や全力を擧げて、三五教の本據たる黄金山は云ふも更コーカス山、ウブスナ山の神館をも蹂躪せむと準備を整へつゝあつた。而して西藏と印度の境なる靈鷲山も其山續きなる萬壽山も、大黒主の部下に襲撃さるること屢々であつた。

神素盞鳴大神は自轉倒島を初め、フサの國、龍宮島、高砂島、筑紫島等は最早三五教の御教に大略信從したれ共、まだ月の國のみは思ふ所ありましてか、後廻しになしおかれたのである。それ故大黒主は思ふが儘に跋扈跳梁して、勢力を日に月に増殖し、遂に進んで三五教の本據を突かむとするに立至つたのである。

茲に齋苑の館の八尋殿に大神は數多の神司を集めて、大黒主調伏の相談會を開

始しさるる事こととなつた。日出ひ出で別わ神かみ（吾あ勝か命こと）、八や島しま主ぬし神かみ（熊くま野の樟す日び命こと）、東あ野つ別ま命わ（東あ助つ）、時と置き師お神かみ（空も助く）、玉たま治は別る、初は稚つ姫か、五い十そ子こ姫ひめ、玉たま國くに別わ（音お彦と）、幾いく代よ姫ひめ、照て國くに別わ（梅う彦め）、菊き子こ姫ひめ、治は國くに別わ（龜か彦め）、淺あ子さ姫こ、岩い子は姫こ、今い子ま姫こ、悅よ子こ姫ひめ、黄わ龍つり姫よ、蝮む蛇か姫で、コこーカス山ざんよりは梅う子め姫こ、東あ彦つ、高た彦か、北きた光てる神かみ、高た光か彦ひこ、玉たま光てる彦ひこ、國くに光てる彦ひこ、鷹た彦か、秋あ彦き等らを初はめ數あ多またの神か司つかさが集あまつて鬼お雲にく彦もの大お黒ほ主くろ神ぬしを言こと向む和やはすべく協け議ふぎをこらされた結果けつ、梅う彦めの照て國くに別わ、音お彦との玉たま國くに別わ、龜か彦めの治は國くに別わに黄わ龍つり姫よ、蝮む蛇か姫でが直ち接よくに、ハルナの大お黒ほ主くろの館やかたに立た向むふ事こととなつたのである。

（大正一一・一〇・二一 舊九・二 松村眞澄録）

## 第二章 評定〔一〇六七〕

バラモン教けうの教主けうしゆ大黒主おほくろぬしの暴状ばうじやうを懲こらし、言向和ことむけやはして天下てんかの害がいを除のき、八岐大



蛇ちや醜しこがみ神かみの身み魂たまを清きよむべく、ここにウブスナ山脈さんみやくの頂上ちやうじやうい齋苑その館やかたの八尋やひろ殿どのにて神かむ  
素盞すさのをのおほかみ鳴大神めいの命めいにより厳格げんかくなる相談會さうだんくわいが開ひらかれた。素盞すさのをのおほかみ鳴大神めいは高座かうざに現あらはれ一いち  
同どうに向むかつて歌うたを以もつて宣示せんじされた。其御歌そのおんうた、

☐ 天あめと地つちとの神かみ々がみの

水い火きを合あはしてなりませる

三あななひけう五み教をしへの御教みをしへは

島しまの八やそしま十ま島やそ八やそ十まの國くに

隈くまなく光ひかり渡わたれども

八やまたをろち岐しこがみ大蛇しこがみの醜しこがみ神かみは

未いまだ全まく服まつろはで

山やまの尾をの上へや河かはの瀬せに

潜ひそみて枉まがを朝あさ夕ゆふに

拓ひらき行ゆくこそうたてけれ

あななひけつ  
三五教の神司

きよ  
清けき明き眞心を

ちからかぎ  
力限りに振り起し

あめつちよも  
天地四方の神人を

すく  
救はむ爲めに現身の

み  
身を粉になして遠近と

あれの  
荒野を渡り海を越え

ゆき  
雪を踏みしめ暑さを耐へ

あめ  
雨にはそぼち荒風に

あふ  
煽られ乍ら進み行く

そのかむわざ  
其神業ぞ雄々しけれ。

とき  
時しもあれや顯恩の

さと  
郷に現はれ蟠かまる

バラモン教の大棟梁

鬼おに雲くも彦ひこは三五あななひの  
誠まことの道みちに怯おそぢ恐おそれ  
自おの轉ころ倒しま島たてに籠こもり  
惡あしき教をしへを四よ方もの國くに  
傳つたへむとする其その時ときに  
わが遣つかはせし神かむつかさ司さ  
正ただしき人ひとの言こと靈たまに  
恐おそれをなして逃にげ歸かへり  
再ふたびフサの國くにに入いり  
彼かな方なた此こ方なたと尙さま徃よひて  
今いましも印ツ度キの國くにの都みやこ  
ハルナに現あらはれ岩がん窟くつを  
穿うちて魔ま神がみを呼よび集つどへ  
其その勢きはは日ひに月つきに

侮り難くなりあなどにけりがた

八岐大蛇は悉くやまたをろち  
ことごと

これみやこの都あつまに集りて

我わが三五あななひの大道おほみちを

覆くつがへさむと圖はかりつつ

早はやくも齋苑いその館やかたまで

攻せめ來きたらむず勢いきほひに

四よ方もの曲神まががみいさ勇いさみ立たち

振ふるひ居をるこそ健氣けなげなれ

野立のだちの彦ひこや野立のだち姫ひめ

埴安彦はにやすひこや埴安姫はにやすひめの

神かみの命みこととあれまして

開ひらき給たまひし此道このみちは

天あめと地つちとの神かみがみ々の

堅磐かきはときは常磐うごに動きなき  
珍うづの御楯みたてとなりつれば  
如何いかに魔神まがみの騒さわるとも  
いかで倒たふる事ことやあらむ  
さはさりながら曲神まががみの  
伊いた猛けり狂くるふ世よの中なかは  
心こころを許ゆるすこと勿なかれ  
いざこれよりは神司かむつかさ  
神かみの光ひかりを身みに浴あびて  
大黒主おほくろぬしが潜ひそみたる  
ハルナの都みやこに立向たちむかひ  
仁慈じんじ無限むげんの大神おほかみの  
清きよき正ただしき大道おほみちに  
言向ことむけ和やはし來きたるべし

これに就いては諸々の  
神の司は真心の  
限りを盡して相圖り  
大黒主を懲戒の  
神の司を選めかし  
われはこれより奥殿に  
進みて天地の大神に  
嚴の言靈宣り上げて  
我神軍の成功を  
祈り奉らむいざさらば  
百の司よ神人よ  
謹み畏み此度の  
言向戦を各自に  
心の底より打ち明かし

えら 選みて神の御心に  
かみ 仕へまつれよ惟神  
つか 神の御前に瑞靈  
かみ 心を清めて宣りまつる  
こころ

と宣示し終つて奥殿に姿を隠し給ふた。

おもひかねのかみ 思兼神（議長）の格に控へたる日出別神は一同に向ひ、

かむながらいそ 惟神齋苑の館に集まりて

まがみ 魔神討伐の神議りせむ。

おほかみ 大神の珍の御言を畏みて

な 竝み居る司言議りせよ。

おほくろぬし バラモンの大黒主の神司

みやこ 八ルナの都に事謀ゆらし。

はかゆとも何なにかあらむや曲まが神かみの

醜しこの企たくみは神許かみゆるすまじ。

素す盞さ鳴の神かみの尊みことの御教みをしへは

月日つきひの如ごとく冴さえ渡わたるなり。

冴さえ渡わたる三五さんごの月つきの御教みをしへに

言向ことむけ和やはせ大黒主おほくろぬしを

東野別命あつまのわけのみことは立たつて之これに答こたへた。

言こと霊たまの齋い苑その館やかたの神司かむづかさ

東あつまの別わけは言問こととひまつる。

大黒主おほくろぬし曲まがの司つかさを言向ことむくる

神かみの司つかさは何人なにびととせむ。

聞きかまほし日出ひのでの別わけの御心みこころを



重おもき使つかひを定さだめかねつつ。

この使つかひあまり多おほくは要いるまじと

東野別あづまのわけは思おもひ居ゐるなり』

日出別命ひのでわけのみことはこれに答こたへて、

日出別ひのでわけあづまの空そらを分わけ昇のぼる

三五さんごの月つきの照てらすまにまに。

何人なにびともわれと思おもはむ人達ひとたちは

心こころのたけを宣のり傳つたへませ』

東野別あづまのわけはこれに答こたへて、

日出別神ひのでわけかみの仰あふせぞ尊たふとけれ

神言みことのままに選えらみ合あひせむ』

時とき置おかし師のかみ神は起たち上あり、

□ この使つか黄ひわうり龍りゅう姫ひめや蜈蚣むかで姫ひめ

先まづ遣つかはして瀬踏せぶみせしめよ。

二柱ふたはしら神のかみの命みことはバラモンの

教をしへにゆかり居ゐます身みなれば。

顯恩けんおんの郷さとを立たち出いで給たまひてゆ

久ひさしく會あはせ給たまはぬ身み故ゆゑに。

三五あなひの神かみの司つかさの行ゆくよりも

蜈蚣むかで姫ひめには心許こころゆるさむ。

蜈蚣むかで姫ひめ黄龍わうりゅう姫ひめは雄々ををしくも

大黒主おほくろぬしを言向ことむけ和やはさむ』

黄龍姫は、立つて歌ふ。

黄龍姫神の命は三五の

道に入りしと彼は知るらむ。

足乳根の母の命は今暫し

齋苑の館に仕へますべし。

年老いし身をもちながら敵城に

進まむ事の危く思へば

蜈蚣姫はこれに答へて、

天地の神に捧げし此命

いかで恐れむ水火の中も。

大黒主たとへ如何なる力あるも

わが言靈に言向けて見む。

黄龍姫弱き言靈吹き放ち

母の名までも汚すまじきぞ。

吾こそはハルナの都に立ち向ひ

鬼熊別の夫を諭さむ。

大黒主神の司を始めとし

吾背の君を救はむとぞ思ふ。

勇ましき此御使に仕へなば

吾は死すとも悔ざらましを

黄龍姫はこれに答へて、

健氣なる母の命の御言葉よ

神の尊さ今更ぞ知らるる。

吾母は如何に雄々しき神ならむ

冴え渡りたる今の言靈。

いざさらば母の命と諸共に

ハルナの都に向はむとぞ思ふ

蜈蚣姫はこれに答へて

健氣なる黄龍姫の言葉かな

吾は勇みて敵城に行かむ

素盞鳴尊の第二の娘幾代姫の夫となりし照國別（元の名は梅彦）は起ち上り、  
歌を以て所感を述べた。

神素盞鳴大神のいと嚴かな御宣言

其御心を細さに  
受け入れ給ひし神司

日出別や八島主  
東野別や時置師

尊き神が在しながら  
神の力を身に魂に

満ち足らはせし梅彦を  
他所に皆して黄龍姫

蜈蚣の姫を推薦し  
給ひし事の恨めしさ

吾は照國別の神  
尊き神名を賜はりて

勇氣は日頃に百倍し  
心は勇み腕はなり

はや堪へ難くなり  
並び給へる神司

吾を選ませ給ひなば  
大黒主の立て籠る

ハルナの都に立向ひ  
千變萬化の言靈を

縦横無盡に發射して  
魔神を一人も残さずに

言向和し神徳を  
月日の如く天地に

輝かさむは目のあたり  
三千世界の梅の花

一度に開く梅彦を  
これの使に選まずば

如何いかに尊たふとき黄龍わつり姫よひめ

蜈蚣むかでの姫ひめの兩りやう人にんが

何程なにほど祕術ひじゆつを盡つくすとも

いかで思おもひを達たつせむや

直日なほひに見直みなほし聞きき直なほし

宣のり直なほしつづつ梅彦うめひこを

加くはへて三人みたり月のつき國くに

ハルナみやこの都みやこへ大神おほかみの

使つかひとよさし給たまへかし

吾胸わがきようちう中ちゆうは早はや已すでに

大黒主おほくろぬしの神かむつかき司まつろ

服まつろへ和やはす心算しんさんの

數かず限かぎりなく確立かくりつし

命令めいれい一いつ下か忽たちまちに

此この神業しんげふを完成くわんせいし

八岐やまた大蛇をろちや醜神しこがみを

言向ことむけ和やはすかさもなくば

根底ねそこの國くにへ追おひ落おとす

神算しんさん鬼謀きぼうは胸むねにあり

只願ただねがはくは梅彦うめひこの

照國てるくに別わけを正使せいしとし

二人ふたりの女神めがみと諸共もろともに

進すすませ給たまへ惟神かむながら

神かみに誓ちかひて乞こひまつる

幾代いくよひめ姫ひめは起たち上あがり、

雄々しくも吾が背の君の宣らすこと

許させ給へ百の司等。

願はくは幾代の姫も諸共に

ハルナの都へ行かまほしさよ。

照國別神の命と名を負ひし

吾背の君の勇ましきかも。

日出別神の命に物申す

吾等夫婦を印度に遣はせ。

東野別神の教の司たち

吾等夫婦の乞ひを許せよ。

時置師神の命も梅彦や

吾願言を聞き召しませ

時置師神は又歌もて、



☞ 汝が君のその言の葉は清けれど  
見合せ給へ夫婦の出立。  
三五の神の使の夫婦連れ  
神世も聞かぬ例なりせば

幾代姫 ☞ 神國を思ふ誠のあふれてぞ  
吾言靈のいとも恥かし。  
いざさらば吾背の君を只一人  
使はせ給へ印度の御國へ

日出別は答へて、

☞ 照國別神の命は印度の國

いと雄々しくも進み行きますせ

日出別命の宣示によつて茲に照國別は愈印度の國へ出張することとなつた。

(大正一一・一〇・二一 舊九・二 北村隆光録)

### 第三章 出師(一〇六八)

照國別の梅彦は日出別の教主より月の國のハルナの都へ向ふ事を許され、意氣揚々として座につき、

有難し神の心に叶ひしか

月の國をば照國別と行く。

いざさらばこれより吾は幾代姫

やかたを清く後に守れよ』

幾代姫は歌ふ。

照國別の吾夫は 日出別の教主より

月の御國に潛みたる 大黒主の神司

其外百の醜神を 尊き神の御教に

言向和し救ふべく 齋苑の館を立出でて

出でます今日の雄々しさよ 妾は後に止まりて

神の教を守りつつ 力限りに世の人を

皇大神の大道に 導き救ひまつるべし

わが背の君よ一時も 早く館を立出でて

天地百の神人の 苦み悩む災を

拂はせ玉へ惟神 神の御前に願ぎまつる』

と歌ひ了るや、照國別は、

□ いざさらば曲津の運も月の國

頭あたまハルナの都みやこに進すすまむ。

大黒主齋苑おほくろぬしの館やかたの神軍しんぐんに

驚おどろくならむ今日けふの出立いでたち。

八尋殿やひろどの並びならびいませる司つかさたちよ

吾われはハルナの都みやこに立たたむ

時置師神ときおかしのかみは立たつて歌うたふ。

□ 照國別神てるくにわけかみの命みことはとく行ゆかせ

われは館やかたに止とどまり守まもらむ

これより黄龍姫、蜈蚣姫は、日出別命の承諾を得、數多の司に讚嘆され乍ら、  
母娘は普通の旅人に身を變じ、フサの國を横斷し、フサの海より舟に乗りて、ハ  
ルナの都へ進み行くこととなつた。又梅彦は直ちに宣傳使の服装を整へ、照公、  
國公、梅公の従者と共に河鹿峠をこえ、フサの國を東南さして進み、月の國へ進  
むこととなつた。

此時玉國別の音彦は立上つて歌ひ出した。

三五教に仕へたる

玉國別の宣傳使

音に聞えし音彦は

ペルシヤの國を宣傳し

海に泛びて自轉倒の

島に渡りて遠近と

神の教を宣べ乍ら

大江の山に立こもる

バラモン教の大棟梁

鬼雲彦や鬼熊別の

魔神に向つて言靈の

戦を開き曲神を

追ひ散らしたる強者ぞ

梅彦いかに勇あるも

音彦おとひこ司つかさに及およばむや

日ひ出での別わけの大だい教けう主しゆ

照てる國くに別わけを遣つかはして

大おほ黒くろ主ぬしの曲まが神かみを

言こと向むけ和やはし玉たまはむと

計はかり玉たまふはいぶかしも

いかに神しん德とく充じう實じつし

天てん地ちをゆるがす言こと靈たまを

身みに受うけゐるとは云いひ乍なら

敵てきにも鋭すまじき刃やいばあり

いかでかこれの大たい敵てきを

一ひとり人ひとりや二ふたり人ふたりの力ちからにて

言こと向むけ和やはし了おうせむや

此この音おと彦ひこの心しん中ちゆうは

實じつに不安ふあんの雲くも掩おほひ

前ぜん途とを案あんじやられけり

あゝ惟かむながらかむ々ながら

神かみの心こころに見みな直ほして

玉たま國くに別わけを今いま一ひとり人

遣つかはし給たまへ眞ま心こころを

こめてぞ祈いのり奉たてまつる

朝あさ日ひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

假たとへ令だい大だい地ちは沈しづむとも

三あな五な教ひけうの御み教をしへを

決けつして汚けがす事ことあらし

月つき日ひの如ごとく明あきけく

道みちの光ひかりを現あらはして

神の御前に復言  
申しまつらむ惟神  
早く許させ玉へかし

と歌を以て希望を述べた。  
日出別神は、  
歌を以てこれに答ふ。

玉國別神の司は言靈の

清くいませば悩むことなし。

さり乍ら數限りなき八十の國

只一柱にてせむ術もなけむ。

玉國別神の司よ心して

曲津の荒ぶ月へ出でませ。

月照彦神命をあがめつつ

夜を日についで進みませ君

玉國別は欣然として立上り、  
又も歌にて答ふ。

千早ふる神の光の現はれて

玉國別の玉を照らさむ。

月照彦神命の御光に

暗路を安く渡らむと思ふ。

イソイソと齋苑の館を立出でて

進む吾こそ樂し嬉しき。

東野別司の前に物申す

守らせ玉へ妻の身の上

東野別はこれに答へて、

五十子姫清く雄々しくましまさば



音おとづれなくも安やすく行ゆきませ。

素す盞さん鳴のの神かみ尊のみことの愛まなむすめ娘

瑞みづの御みたま靈たまとあれし君きみはも。

此この君きみのこれの館やかたにゐます限かぎり

安やすく樂たのしく道みちは榮さかえむ。

村むら肝きもの心こころ残のこさず印ツキ度の國くに

ハルナみやこの都みやこにとく進すすみませ

音彦おとひこは又また歌うたふ。

有あり難がたし心こころにかかると雲くももなく

道みち傳つたへ行ゆかむ印ツキ度の御みくに國へ。

時とき置おかし師のかみ神のみこと命ひるよるよ晝ひる夜よるを

守まもらせ玉たまへこれの館やかたを。

いざさらば竝なみる司つかさを後あとにして

神かみの随まにまに々別わかれて行ゆかむ。

五十いそ子こ姫ひめ玉たま國くに別わかが勇いさましく

復かへりごと言ことする日ひをこそまてよ』

五十いそ子こ姫ひめは歌うたふ。

勇いさましき吾わが背せの君きみの御み姿すがたを

隠かくるままでに眺ながめ守まもらな。

村むら肝きもの心こころをのこ残こし玉たまはずに

神かみのままにまにすす進すすみませ君きみ』

玉たま國くに別わかはいち同どうにむか向むかひあ會あ釋やくしなが乍ならせん宣でん傳か歌うたをうた歌うたひつつつ、三さん人にんのず随あ行かうととも共ともに、これ又また又また

河か鹿しか嶋たつげをふ踏ふみこ越こえ、フフサの國くにのげん原や野を渉わたりて、印いん度どをさ指さしてすす進すすみゆ行ゆかむとする。

治國別の龜彦は立上つて歌もて自分の希望を述べた。

神素盞鳴大神の 隠れ玉ひし齋苑館

教司と現れませる 日出別に物申す

ウラルの道を奉じたる 醜の司の吾なれど

フサの海にて巡り會ひ 汝が命の薰陶を

受けて誠の人となり 名さへめでたき宣傳使

喜び勇んで四方の國 自轉倒島まで打渡り

醜の魔神を言向けて 再びこれの齋苑館

皇大神に従ひて 功績を立てしわが身魂

見向きもやらず梅彦や 音彦二人を拔擢し

大黒主をいましめの 任務を依さし玉ひたり

あゝ恨めしし恨めしし われも神の子神の宮

いかでか彼に劣らむや 直日に見直し聞直し

宣直のりなほしまし龜彦かめひこを 印度ツキの御國みくにへ遣つかはして

八岐大蛇やまたをろちのかかりたる 醜しこの司つかさを悉ことごとく

三五教あななひけつの大道おほみちに 救すくひ助たすくる神使かみつかひ

任まけさせ玉たまへ逸いちはや早く 神かみの御前みまへに伺うかがひて

わが言靈ことたまの神力しんりきを 照てらさせ玉たまへ惟かむながら神

菊子きくこの姫ひめと諸もろとも共に 謹つつしみ敬うやまひ祈ねぎ奉まつる』

と歌うたひ了をはつた。 日出別命ひのでわけのみことは、これに答こたへて、

勇いさましき治國はるくにわけ別の言ことあげを

心涼こころすずしく頼たのもしく思おもふ。

いざさらば汝なれが命みことは印度ツキの國くに

すみずみ迄までも巡めぐり救すくへよ。

言靈ことたまの幸さちは心國こころくにの神司かむつかさ

勝鬨あげて早歸りませ  
勝鬨かちどぎあげて早歸はやかへりませ  
□

と歌もて印度の國への出陣を許した。  
治國別は勇み立ち、  
と歌うたもて印度ツキの國くにへの出陣しゅつぢんを許ゆるした。  
治國はるくに別わけは勇いさみ立たち、

かけ巻も綾に畏き皇神の  
かけ巻まくも綾あやに畏かしこき皇神すめがみの

御言のままに進みて行かむ。  
御言みことのままに進すすみて行ゆかむ。

日出別神の命よ今しばし  
日出別神ひのでわけがみの命みことよ今いましばし

わが復言待たせ玉はれ。  
わが復言かへりこと待またせ玉たまはれ。

東野別司の前に物申す  
東野別司あづまのわけつかさの前まへに物申ものまをす

百の司を惠ませ玉へよ。  
百ももの司つかさを惠めぐませ玉たまへよ。

われは今印度の國へと進みゆく  
われは今いま印度ツキの國くにへと進すすみゆく

守らせ玉へ菊子の姫を。  
守まもらせ玉たまへ菊子きくこの姫ひめを。

残しおく妻の命もつつしみて  
残のこしおく妻つまの命みこともつつしみて

神の教を宣べ傳へせよ  
神かみの教をしへを宣のべ傳つたへせよ  
□

東野別は之に答へて、

みづみづし益良武夫の龜彦は

名を萬世に傳へますらむ。

千代八千代萬代までも龜彦が

治國別の名をや照らさむ。

治國別神の命のいさをしを

仰ぎて待たむ唐土の空

菊子姫は又歌ふ。

けなげなる尊き便りを菊子姫

待つ間の永き眞鶴の首。

一足の歩みも心配らせつ

進すすみ行ゆきませ吾わが背せの君きみは。  
山やまを越こえ荒あらの野のをわたり雨あめにぬれ  
進すすみ行ゆく君きみ見みれば雄を々をしも

初はつ稚わか姫ひめは立たち上あがり、金きん扇せんを開ひらいて、自みづから歌うたひ自みづから舞まひ、五ご人にんの神かむつ司かさが陣しゆつぢんを祝しゆくした。  
た。

久ひさ方かたの天あま津つ御み空そらの限かぎりなく 照てり渡わたるなる三あな五なの

月つきの教をしへに四よ方もの國くに 青あを人ひと草ぐさや鳥とり獸けもの

草くさの片か葉きはに至いたるまで 惠めぐみの露つゆに霑うるほひて

尊たふとき神かみの御み光かりを 仰あふぎ樂たのしむ葦あし原はらの

八や洲しまの國くにの其その中なかに 如い何かなる神かみの仕し組ぐみにや

取とり殘のこされし印つ度きの國くに 七しち千せん餘あまりの國くに々くにに

王きみと現あれます刹せつ帝てい利り 八や岐また大を蛇ろちの醜しこ靈たまに

惑はされつつ日に月によからぬ事のみ行ひつ

世の常暗となりて行く時しもあれやバラモンの

道に仕ふる神司大黒主が現はれて

ハラナの都を根拠としバラモン族を庇護しつつ

刹帝利族を押込めて暴威を揮ふぞうたてけれ

それに付いては毘舍首陀の三種階級の民族も

バラモン族の暴虐に苦み悶へ國原は

怨嗟の聲にみちみちぬあゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて神素盞鳴大神は

時を計らひ瑞御靈發揮し玉ひて印度の國

ハラナの都へ三五の神の司を遣はして

世人を救ひ玉はむと御計り在りし尊さよ

日出別の教主より此大業を命ぜられ

黄龍姫や蜈蚣姫尊き司を初めとし



心も明き照國別

神の命や玉國別

治國別の三柱を

おのもおのもにこと任けて

神の御爲世の爲に

遣はし玉ふぞ有難き

われも初稚姫神

年端も行かぬ身なれ共

神素盞鳴大神の

遣はし玉ひし八乙女が

清き御業に神倣ひ

大黒主の館まで

忍び参りて三五の

誠の道に曲神を

言向和させ玉へかし

日出別や東野別

神の司の御前に

謹み敬ひ祈ぎまつる

父とあれまます時置師

神の司は初稚が

願を必ず許すべし

神の御言の幸はひて

われを遣はし玉ひなば

如何なる悩みも堪へ忍び

わが大神の御心を

うまらにつばらに説きさとし

時節を待つて大黒主を

誠の道に歸順させ

神の御前に復言  
許させ玉へ惟神

申し奉らむいざ早く  
神の御前に祈ぎまつる

と歌つて、自分も單獨にて、大黒主の館に忍び込み、曲神を歸順せしむべく、出陣を許されむ事を請願した。日出別は歌を以てこれに答ふ。

勇ましき初稚姫の言靈よ

聞く度毎に涙こぼるる。

さり乍ら初稚姫は獨り御子

いかでか印度に遣はすを得む

初稚姫はこれに答へて、

いぶかしき日出別の言靈よ

神かみに捧ささげし吾わが身みならずや。  
時とき置おかし師ちち父みことの命はつわかも初はつわか稚かが  
誠まことの言ことば葉はを愛めで許ゆるしませ』

時とき置おかし師のかみ神のかみは歌うたもて答こたふ。

天地あめつちの御み靈たまにあれし吾わが娘むすめ

神かみのまにまに仕つかへまつれよ。

時とき置おかし師のかみ神のかみの司つかさは只ただ一人ひとり

いでゆく汝なれを雄を々をしくぞ思おもふ』

日出ひので別わけ命のみことは又また歌うたふ。

勇いさましき親おや子こ二人ふたりの心こころ根ねを

神かみは喜よろこび玉たまふなるらむ。

いざさらば初稚姫はつわかひめの神司かむつかさ

神かみのまにまに進すすみ行ゆきませ』

東野別あづまのわけは立上たちあがりて歌うたふ。

年とし若わかき初稚姫はつわかひめの御姿みすがたを

見みるにつけても涙なみだぐまれつ。

さり乍ながら尊たふとき神かみの守まもります

司つかさにませば心痛こころいためず。

いざ早はやく御言みことのままに出いでまして

神かみの御前みまへに復言かへりごとせよ』

初稚姫はつわかひめは嬉うれしげに又また歌うたふ。

ひのでわけあづまのわけ  
日出別東野別や垂乳根の

父の言葉は妾を生かせり。

有難き神の恵を受け乍ら

印度の御國へ吾が進みゆかむ

かく歌ひて、一同に別れを告げ、飄然として只一人供人をもつれず、萬里の山河を越えて、印度の國へ進み行く。

神界の御經綸にて最初より印度の國のハルナの都に現はれたる大黒主を言向和す爲出張を命ぜらるべき神司は、略決定されてゐたのである。併し乍ら神素盞鳴大神は吾娘の夫が三柱迄も加はり居る事とて、明さまに言ひ出でかね玉ひ、日出別神に命じて、相談會を開かせ、隨意に此使に奉仕する事の手續をとられたのであつた。又初稚姫は神素盞鳴大神が八人の乙女を一柱も残さず、敵の牙城に使はし玉ひし尊き清き大御心に感激し、如何にもして、八人乙女の盡し玉ひたる如き神務に従事せばやと、時の至るを待ちつつあつたのである。時置師神の空助も、

初稚姫の健氣なる心に感じ、吾子乍らも天晴れなる者よと、ひそかに感涙に咽んでみた。

斯くの如くにして、愈印度の國の大黒主に對する言靈戰の準備は全く整うたのである。あゝ惟神靈幸倍坐世。

（大正一一・一〇・二一 舊九・二 松村眞澄録）

## 第二篇 黄金清照

## 第四章 河鹿越（一〇六九）

滿目蕭條として何處となくおちついた秋の空、四方の山邊は佐保姫の錦織りな

す金色の山野を黄金姫、清照姫の二人は巡禮姿甲斐々々しく、河鹿峠の峻坂を、二本の杖にて叩き乍らエチエチ登り行く。

黄金姫と云ふは神素盞鳴尊より新に名を賜はりたる蜈蚣姫のことである。又清照姫といふのは黄龙姫のことである。二人は岩に腰打かけ、息を休め、所々に圭角を現はした、まだらに禿げた山の谷間を流るる激流を打眺め、斑鳩のここかしこ飛びまはる姿を眺めて旅情を慰めて居た。

清照姫「お母アさま、何と佳い景色で御座いますな。此處は言依別命様が馬に乗りて烈風に吹かれ、従者の玉彦、楠彦、嚴彦と共に此谷間に轉落し、人事不省となつて御座る間に、五十萬年未來の天國を探検せられたといふ有名な處で御座います。春夏になると河鹿の名所で、随分いい聲が谷水の流れを壓して、此山上まで聞えて來るさうです。急いで急がぬ旅ですから、ここでゆつくりと息を休めて参りませうか」

黄金姫「何を言うてもバラモン教やらウラル教の間者が、齋苑の館近傍へ澤山に出没してるといふことだから、餘り油断はなりません。ゆつくりとして居ては、

豫定の所までに日が暮れると大變だから、ボツボツと行きませう。何程足が遅くても根に任せて行けば早いもの、何程急いで歩いてても、休息が長いと却て道がはかどらぬもの、サア行きませう」

と先に立つ。清照姫も母の言に否む由なく、杖を力に峻坂を登りつ下りつ、谷を幾つとなく涉りてフサの國の都を指して急ぎ行く。

一方は嶮しき禿山、一方は淙々たる激流ほとばしる谷川を眺めて、山の腰に鉢巻をしたやうに通じてゐる細い路の傍の岩に腰打掛け四五人の男が此風景を眺めて雑談に耽つてゐる。此五人は鬼熊別の部下の者で、ハム（半六）イール（伊造）

ヨセフ（芳二）レーブ（麗二）タール（太郎）の五人であつた。

ハム「吾々は今年で足かけ三年、斯うして此附近を捜しまはつてゐるのだが、何を言つても廣い世界、蜈蚣姫の所在が分る筈はないぢやないか。人相書を何程持つてゐても、十年前の姿と今とは餘程違つてゐるに相違ない。又一度でも、今迄に會つて居ればどこかに覚えがあるのだけれど、少しく顔が四角いの、目が大きい、背が通常だのと此位のことでは到底見當がつかない。兔も角婆アさんと見



たら、小口から引とらまへて面の検査を、これからはすることにしようかい。蜈蚣様を發見しさへすれば、それこそ大したものだから………」

イール「蜈蚣様は三五教へ沈没したといふぢやないか。一層のこと三五教の靈場々々へ化け込んで考へて見たら、それが一番早道かも知れぬぞ」

ハム「何程早道だつて、さう敵の中へ易々と這入れるものか。三五教には天眼通とかいつて、すぐに吾々の行動を前知する法があるから、迂闊り近寄れない。こ

こは齋苑館の近くだから、三五教の宣傳使が比較的澤山通る。時節を待つてをれば、蜈蚣様がお通りになるかも知れないからな。まづ慌てず急がず、かうして

手當を貰つて日を暮してさへ居れば安全ぢやないか」

イール「それだと云つて、足掛け三年も何の手掛りも得ず、手當ばかり貰つて居るのは、何とはなしに氣の毒のやうな氣になつて來る。つひには無能呼ばはりをされて免職の憂目に會ふかも知れないぞ。さうなつたら俺達ばかりの難儀ぢやない。妻子眷族迄が忽ち路頭に迷はねばならぬ破目に陥るから、第一それが恐ろしいぢやないか。大黒主の大教主に次いで鬼熊別様が、あの勢ひであり乍ら、肝

賢けんの奥おく様さまや娘むすめが行ゆきはが知しれず、と云いうてあゝ云いふ氣きの固かたいお方かただから、大黒主おほくろぬしの樣やうに大たい切せつな奥おく樣さまを放ほうり出だして、綺きれ麗いな女をんなを本ほん妻さいにしたり、妾てかけを澤たく山さん置おいて、ひそかに戯たはむれるといふやうな不ふ始しまつなことはなさらぬのだから、實じつ際さい聞きいても氣きの毒どくなものだ。吾われ々われは信しん者じやで居あ乍なら、結けつ構こうな手て當あてを鬼おに熊くま別わけ樣さまから頂いたいて居あるのだから、早はやくお尋たづね致いたして、夫ふう婦ふう和わ合がして御ご神しん業げふに參さん加かなさるやうにして上あげねばな  
るまいぞ」

ハム「鬼熊別樣は信仰の強い神樣だから、何事も一切を惟神にお任せ遊ばし、妻子のこともなどはチツとも氣にかけてゐられない。只神樣にお任せしておけば良いのだと日夜品行を慎むで、信仰三昧に入り、吾々に誠の手本をお見せ下さる救世主のやうな方だが、此頃は大將の大黒主様の嫌疑がかかつて大變な御迷惑、ハルナの城へは御出仕も缺勤勝だといふことだ」  
イール「大きな聲では言はれぬが、俺達は大黒主のやうな放埒不羈の方を教主と仰ぐよりも、鬼熊別様の吾主人を教主と仰ぐ方が餘程心持が良いワ。お二人の人氣といふものは大變な相違ぢや。なぜあれ程に人氣の悪い大黒主が羽振を利かし

てゐるのだらうかなア」

ハム「何と云つても、勢力に壓倒さるる世の中だから、仕方がない。誠一つの教を傳ふるバラモン教の本城でさへも、勢力といふ奴には如何しても勝つことが出来ない見える。鬼熊別の奥様やお一人のお娘の小糸姫様が三五教へ降服されたといふことが、大黒主の大將の耳に入り、それから大黒主が鬼熊別に對して猜疑の眼を光らし、妻子の行方を捜し出して、それをバラモン教に心の底から歸順せしめなければならぬ。さうでなければ二心に定つてゐると、氣の毒にも無理難題を仰せられるのだから、俺達の大將様も本當に御迷惑千萬な事だ。云ふに云はれぬ御苦みだらう」

レーブ「オイあすこに何だか人影が見えるぢやないか。ソロソロ此方へ近寄つて来るやうだ。暫く沈黙して此林の中に隠れる事としようかい。彼奴は三五教の奴かも知れぬぞ」

タール「あのスタイルから見ると、巡禮のやうだが、どうやら女らしい」  
ハム「若しもあれが女であつたら、イヤ婆アであつたら、誰でも構はぬからフン

縛つて印度の國まで連れ歸り、吾々が安閑として手當を頂いて遊んでゐるのぢやないといふことを見せようぢやないか。さうなとせなくては申譯がないからな」

イール「はるばると偽物を連れ歸つたところで、肝腎の鬼熊別様が一目御覽になつたらすぐに分るぢやないか。「貴様は餘程バカな奴だ」とお目玉を頂戴するだけのことだ、そんな偽者を伴れて歸つた所で、骨折損の疲勞れまうけだ、分らぬ代物は相手にならぬ方が安全でいいぞ」

ハム「素より吾々は身分の賤しき者で、蜈蚣姫様や小絲姫様のお顔を知らないのだから婆アや娘を見つけたら、これに違ないと思ひましたと云つて伴れ歸りさへすれば、假令違つた所で温厚篤實な鬼熊別様は、ソラさうだらう、見違へるも無理はない。こんな簡単な人相書だから……そして大變に年が老つて人相も變つてらだらうからと仰有つて、見直し聞直し、反對にお褒めの言葉を頂いて、又此役を永らく任じて貰ふやうになるかも知れないぞ。兔も角熱心振をあらはさねば吾々の役がすむまい。イヤ責任が果せないからなア」

レーブ「オイオイ其處へ近付いて來たぞ。サア隠れた隠れた」

と云ひ乍ら、道端の灌木の茂みに姿を隠して了つた。

親子二人の巡禮は、五人が此處に潛むとは知らず、風景の佳き谷川を眺め乍ら、

ツト立止まり、

清照姫「お母アさま、河鹿峠は天下の絶景だと聞きましたが、本當に勇壯な谷川

の流、錦の様な山の色、秋は殊更美しく、丸でお母アさまの名の様な黄金色で、

天國を旅行してゐるやうな氣になりましたなア。齋苑の御館も随分結構な所です

が、此風景に比ぶれば側へもよれませぬよ」

黄金姫「本當に美しい景色だ。春は花が咲き、鳥は歌ひ青芽はふき、そこら中が

何とはなしにみづみづしうて、一層眺めが宜しからうが、秋の眺めも亦格別なも

のだ。併し乍らかうして秋の錦を見てゐる内に、又もや冷い凧が吹いて、何の木

も此木も常磐木を除く外は、羽衣を脱いだ枯木のやうになつて了ふのだから、人

生といふものは實に果敢ないものだ。私も追々と年が老つて、どうやら羽衣を脱

いだ木の様に、何ともなしに心淋しくなりました。お前はまだ鶯の花の蕾、早く

良い夫を持たせて私も早う安心したいものだが、まだ神様の御許しがないと見え

ます。今度の使命を果して、早くよい夫を持たせ、楽しい家庭を作り、私も亦夫に巡り合せて、夫婦同じ道で暮りたいものだ。何んとした私も因果な者だらう。現在夫はありながら、信仰が違ふために、今は夫の所在は分つて居つても名乗つて行く譯にもゆかず、若い時は何とも思はなかつたが、斯う年が老ると、夫のことが思ひ出さるる」

と聲を曇らせ、涙ぐんで語る。清照姫は、

「お母アさま、御心配なされますな。私はまだまだ年が若い身の上、さう慌てて夫を持つにも及びますまい。併し乍ら廣大無邊の神様の御恵に依つて、キツと御両親様が御面會遊ばし、同じ三五の道にお仕へ遊ばすやうになりませう」

斯く話す折しも、ガサガサガサと木を揺つて、現はれ出でた五人の男、細き山腹の路に立はだかり、

ハム「お前は今聞いて居れば、何でも神の道を開きに歩いてゐる者らしいが、一體何處の者だ。そして姓名は何といふか」

と居丈高に肱をはつて、頭押さへに問ひかける。

黄金姫「私は……お前も最前性の悪い、ここで隠れて聞いただるが、此世を黄金世界に立直す黄金姫といふ者だ。何だかエライ権幕で私の姓名を尋ねるに付いては仔細があらう」

ハム「あらいでか、貴様は黄金姫と吐すからは、聖地エルサレムの奴だらう、黄金山の下にあつて三五教を開いて居つた、埴安姫だな。オイ皆の者、最前もいふ通り、俺達も御大將に土産がないから、此奴を一つふん縛つて、はるばるとフサの海迄かつぎ出し、御館へ伴れ歸ることにしようぢやないか」

一同「ヨシ、併しモ少し様子を探つてからにしたら如何だ。もしもレコだつたら大變だぞ」

と稍躊躇して居る。黄金姫は、

「ホ、ホ、お前は山賊ぢやないか。大方此邊に岩窟があるのだらう。同じ人間に生れ乍ら、往來の旅人をおどかして渡世をするとは實に憐れな者だ。私は三五教の信者だが、一つ話をしてあげるから、トツクリとそこで聞きなさい」

ハム「オイ皆の奴、此奴ア中々手ごわい奴だ、レコではないと云ふことは今の言

葉で判然した。サアかかれ、一イ二ウ三ツ』

と號令をする。清照姫は笠を被つたまま、

「コレ耄碌サン、女ばかりと侮つて、いらぬチヨツカイを出すと、キツイ目に會はされますよ。此物騒な山坂を僅かに二人の女で通る位だから、腕に覺がなくては叶はぬこと、美事相手になるなら、なつて見たがよからう』

ハム「コリヤ失敬千萬な、俺達を泥棒とは何だ。汝こそ太え奴だ、泥棒の親方だらう。何程親分でも駄目だぞ。こちらは屈強盛りの男が五人、そちらは老耄婆に小娘、そんな負惜みを吐すより、神妙に俺達の言ふやうにしたらどうだ。騒ぎさへせねば別にひつ括りもせず、よい所へ連れて行つてやる、返答はどうだ』

と睨めつける。黄金姫は泰然自若として、  
「オツホ、蚊トンボのやうな腕を振まはして何寢言をいつてるのだ。斑鳩が笑つてゐるぞや。サア清照姫、こんな胡麻の蠅みたやうな奴に相手になつてる暇がない、度し難き代物だ。それよりも早く、靈に飢ゑ渴いた神の御子を一人でも救ひつつ目的地へ参りませう』



と娘を促し、通り過ぎようとするのを、ハムは、

『サアかかれッ』

と命令をする。両方から兩人目がけて、武者振りつくのを『エー面倒』とハム、イールの兩人を黄金姫は苦もなく谷底へ投げ込んで了った。ヨセフは清照姫の細腕に首筋をグツと握られ、これ又眼下の青淵へ目がけて、空中を三四回、回轉し乍らザンブとばかりに落込んだ。

之を眺めたレーブ、タールの兩人は一目散にかけ出し、三人が投げ込まれた谷川に辿りつき、三人を救はむと焦れ共、板を立てたる如き大岩壁、近よることも出来ず、十町ばかり下手へ逃げ行き、漸くにして蔓などにつかまつて谷川に下り、流れを傳うて、三人が落込んだ青淵を尋ねて上つて行く。

黄金姫、清照姫は委細構はず、宣傳歌を歌ひ乍ら、倉皇として峠を東南へ下り行く。

(大正一一・一〇・二二 舊九・三 松村眞澄録)

第五章 人の心（一〇七〇）

レーブ、タールの兩人は三人の同役が二人の女に脆くも谷底に、とつて放られ  
たるに肝を潰し、十町ばかり逃げのび、そこより漸くにして谷川に下り三人を救  
ふべく岩を飛び越え淺瀬を渡り、漸くにして五六丁ばかり上りつめた。

レーブ「オイ、タール、ひどい奴が現はれたものぢやないか。ハムの大將、女子  
供と侮つて、思はぬ不覺をとりよつて……あの熊……俺や女の天狗かと思つたよ」

タール「随分肝玉の太い巡禮ぢやないか。あの口のきき様と云ひ、武術の鍛錬し  
てる事と云ひ、こりや一通りの女ぢやあるまいぞ。天狗ぢやあるまいけど聞けば  
三五教の信者と云つて居つたから、是から女に出會つても軽々しく相手にはなれ  
ないぞ。然し三人の奴はうまく助かつて居るだらうかな。俺はそれ計りが案じら  
れて仕方がないわ」

レーブ「落ちた處で直様、谷川へ顛落して頭を打つと云ふ事もあるまい。これだ  
け谷を塞ぐ位木が茂つてるのだから、何れ途中で木にかかつて居る者もあらうし、

三人が三人迄谷川に落ちて死んでゐるやうな事もあるまい。然しハムの大將、ありや屹度神罰が當つたに違ひないぞ。不斷からの心掛が悪いからな。もしまだ蟲の息でもあつたら助けちやならないぞ。イール、ヨセフの二人を前に助けて彼奴ア、後まはしにして放つといてやらうかい」

「さうだなあ、それでも宜いわ。然しあの女は随分素敵な者だつたな。あんなナイスを女房にもつたら男子としては中々の光榮だぜ」

「そんな陽氣な事を云うてる場合ぢやあるまい。サア早く三人の所在を探して何とかせなくてはなるまい。愚圖々々して、こんな谷底で日を暮したら、それこそ大變だ。獅子、狼や大蛇の餌食にしられて了ふぞ。サア行かう」

と先に立つて、いろいろと工夫し乍ら谷川を傳ひ上り行く。

二人は漸くにして三人の投げ込まれた谷底へ辿りつき、四邊を見渡せば不思議にも岩と岩との間の眞砂の上に半分ばかりグサと體を埋めて横たはつて居る。

「何と不思議な投げられやうぢやないか。これだけ澤山な岩石があるのに三人が三人とも都合よく眞錦の様な眞砂の中にグツと投げ込まれ、安閑と眠つて

居やがる、投げられるものも中々氣が利いて居るが投げたものも中々氣が利いて居るなあ」

タール「オイ、そんな事ア、後でゆつくり話す事にして早く水でも與へて呼び生かさぬ事にやサツパリ駄目だぞ。然し約束の通りハムだけは助けぬ事にしようかな。一層の事、今の内に川に投げ込んで此儘水葬してやつたら面倒が残らなくて宜いぞ」

レーブ「まづ俺はヨセフを介抱するからお前はイールの方を介抱してやれ。魂返して遠く肉體を離れた靈魂を元の肉體へ「ヨセフ」と云ふ段取だ。タールお前は一旦出た魂を元の體へ易々と「イール」様にするのだぞ。ハムは谷川へ流して置けば、うまく、くたばり大きな魚が出て来て頭から「ハム」だらう。アハ、ハ、ハ、ハ、と云ひ乍ら、二人はヨセフ、イールを捉へて人工呼吸を施してゐる。一時ばかり経つて漸くフウフウと息を吹き出しウーンと云ひかけた。

レーブ「サア、しめた。もう二人は大丈夫だ。ハムの奴、態ア見やがれ。此奴ア

後あとまはし處どころか、日頃ひごろの行おこなひが悪わるく憎にくまれてゐるものだから、斯かう云いふ時ときには誰たれも助たすけ手てがない。神かみさまだつて素そ知らぬ顔かほしてゐるからな。人にんげん間げんと云いふものは憎にくまれぬ様やうにせなくてはいかぬぞ。人ひとは一人ひとりで立たつ事ことは出来できぬものだ。持もちつ持もたれつ、お互たがひに助たすけ合あうて渡わたる世よの中なかだ。渡わたる浮うき世よに鬼おにはないと云いふが、此このハムは俺おれ達たち同どう僚れうにでも憎にくまれて居ゐるから、此こ奴いつア本ほん當たうの人ひと鬼おにだ。鬼おにが冥めい土どに行いつて鬼おにに苛さい責いなまれるのも面おも白しろからう。ウフ、フ、フ、

ハムはウンウンウンと呻うなり出だした。

レレーブブ「ヤア、此こ奴いつは放ほつといても勝かつて手てに生いき返かへるぞ。憎にくまれ子こは世よに霸は張ばる…と云いつて悪あく運うんの強つよい奴やつぢやな。今いまの中うちに放ほり込こめ放ほり込こめ。さうせにや俺おれ達たちの頭あたまの上あがる時じ節せつがないワ」

タタールル「そんな者ものにかかつて居をつたら、此こ處こ迄まで折せ角かく人じん工こう呼こ吸きしたものが中ちう途とに駄だ目めになつて了しまふワイ」

レレーブブ「それもさうだ。俺おれ達たち二人ふたりは今いま此こ手てを止やめる譯わけにも行ゆかず、さうだと云いつて放ほつて置おけばハムの奴やつ、だんだん生いき返かへるなり、も一人ひとり、連つれが欲ほしうなつた。



り、

アツハ、人間の心と云ふものは分らぬものだ。レーブ、タールの二人の奴、俺が死んだと思ひやがつて、口を極めて嘲弄し、助けよまいとして相談してゐやがつたが、天罰と云ふものは恐ろしいものだ。何は兔もあれ、イール、ヨセフの兩人を助けてやらねばなるまい。』  
と云ひ乍ら谷水を掬ひ口に含ませ、一生懸命に介抱して居る。けれども兩人は容易に息を吹き返しさうにもない。

斯かる處へ谷の木笏を響かして宣傳歌が聞えて來た。

神が表に現はれて  
善神邪神を立て別ける

此世を造りし神直日  
心も廣き大直日

直日に見直し聞き直し  
天ヶ下には鬼もなく

醜女探女もなき迄に  
言向和し治め行く

神素盞鳴大神の  
守らせ給ふ三五の

神かみの教をしへの宣傳せんてん使し 大黒主おほくろぬしに憑かかりたる

八岐大蛇やまたをろちを言こと向むけて 誠まことの道みちに救すくひ上げ

世界せかいに名な高たかき印度ツキの國くに 光ひかり輝かがやく天津日あまつひの

高天原たかあまはらの樂園らくゑんと 立たて直なほすべく出いでて行ゆく

われは照國てるくに別宣わけせんし使し 鬼雲彦おにくもひこや其外そのほかの

猛たけき魔神まがみも言靈ことたまの 伊吹いぶきに拂はらひ清きよめなば

如何いかに強者つはもの多くとも 朝日あさひに露つゆの消きゆる如ごと

惡魔あくまは忽たちまち退散たいさんし 心こころの空そらを塞ふさぎたる

村雲むらくもここに吹ふき散ちりて 名詮めいせん自稱じしやうの月つきの國くに

月照彦つきてるひこの御守みまもりと 治をさまり行ゆくは目まのあたり

あゝ惟かむながら神々かむながら々々 神かみの御靈みたまを輝かがやかし

三五教あななひけうの神力しんりきを 天地あめつち四方よもに擴充くわくじゆうし

天津御國あまつみくにへ復かへり言こと 白まをさむ事ことの樂たのしさよ

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも



假令大地は沈むとも

大黒主は強くとも

七千餘國に蟠まる

魔神の数は多くとも

誠一つの三五の

教に苦もなく言向けて

救ひ助くる天の道

進めよ進めいざ進め

照公梅公國公よ

神はわれ等と俱にあり

假令惡魔の現はれて

暴威を揮ひ八千尋の

深き谷間に落すとも

神の守りのある限り

如何でか魔神を恐れむや

死すべき時の來りなば

疊の上に居るとても

必ず死るものぞかし

皇大神の御心に

叶ひまつりし其上は

一日も長く世の爲めに

召し使はむと思召し

水火の中を潜るとも

必ず救はせ給ふべし

あゝ惟神々々

御靈幸ひましませよ。

河鹿峠の此景色

蒔繪の如く美はしく

錦織りなす佐保姫の

袖ふりはへて吾顔を

撫でさせ給ふ風の袖

今吹く風は神の風

悪魔を拂ふ神の水

勢ひ強き曲神を

吹き拂ひ行く嵐風

あゝ面白し面白し

心の駒に鞭韃ちて

一日も早くフサの國

月の國をば横斷し

枉の砦を悉く

言向和して月の國

一大都會と聞えたる

ハルナの都に立ち向ひ

大黒主を初めとし

鬼熊別の醜司

言向和さむ楽しさよ

あゝ惟神々々

御靈幸ひましませよ

此聲、耳に入ると共に谷底に二人の介抱して居たハムは、忽ち顔色を失ひ、

「ヤア、これや大變だ。最前の女の身内の奴が應援に來よつたのだ。愚圖々々し

ては居られない。二人の生命も大變だが俺の生命が肝腎だ」

と云ひ乍ら、又もや谷川を岩を飛び越え淺瀬を渡り猿の如く渡つて行く。山腹の

谷道から照公はフツと此姿を眺め、

「モシ、宣傳使様、此谷底に妙な奴が今走つて居ます。あれ御覽なさい」

と指す。照國別は、

「何、人が此谷底に」

と云ひ乍ら、よくよく見下せば顔から血を垂らし乍ら猿の如く一人の男が駆け出

すのが、ありありと見える。

照公「モシ、此谷底に何か大慘劇が演ぜられて居るのぢやありませんまいか。合點

の行かぬあの男の様子、一つ谷底へ下りて調べて見ようぢやありませんか」

照國別「ウン、調べて見ようかな」

國公「オイ、照公、此斷岩絶壁を如何して下りる積りだ。三間や五間の處なら空

中滑走してでも着陸を無事にする事が出来ようが、斯う深い谷底では如何ともする事が出来ぬぢやないか」

照公「ウン、さうだなあ。然し彼處まであの男も行つたのだから、何處かに道があるだらう。先づ宣傳使様にお任せして、調べよと仰有るなら調べるなり、もう止せと云はるれば止しにするのだ。俺達は宣傳使様の命令通りにして居れば落度はないからな」

梅公「モシ宣傳使様、あまり深い谷底でハツキリは分りませぬが、如何らや二人の人が殺されてる様です。大方今逃げた奴が殺して逃げたのでせう」

と息を喘まして谷底を指す。照國別は谷底を眺めて、  
「如何にも怪しい。何とかして様子を探つて見ようかな」

（大正一一・一〇・二二 舊九・三 北村隆光録）

谷路の傍のコンモリとした森に古ぼけた一つの祠がある。其後にヒソビソ話を  
してゐる二人の男があつた。

「オイ、レーブ、今日位怖い目に會うた事はないぢやないか、イヤ怪體な日はあ  
るまい。バラかパンチーか芍薬かと云ふやうな美しいクヰン様が婆アと二人連れ  
で河鹿峠を天降り遊ばしたので、俺は一目其お姿を拜むなり、魂が宙に飛び、假  
令敵でも構はぬ、一ぺんあの綺麗な手で、三人の奴のやうにさわつて貰ひたかつ  
たが、併し乍らあんな目に會つても約らないし、一體あれは何神さまだらう。俺  
はそれからこつちといふものは、あの女神の姿が目にはちらついて、何うにも斯う  
にも仕方がないワ。怖いやうな何とも言へぬ氣分になつて來たよ」  
レーブ「貴様も餘程良いデレ助だな。そんなこつて大切な使命が勤まるか。もし  
貴様、あれが例のレコであつたら、如何する積だ」  
「タール」そんな事は先にならな分らぬワイ。兔も角粹の利かぬ奴計りがゴロつい  
てるものだから、施すべき手段がない。併し三人の奴は假令命はなくなつても光  
榮だと思つて、成佛するだらう。あんな高い所からウンと一思ひに天國へ行ける

のならば、おれもあの女神に放つて貰うて、天國へ行つた方が何程結構だか知れない。實際此世の中に居つたつて面白くも何ともないからなア」

レーブ「それ程死にたいのなら、なぜハムが追ひかけた時に殺して貰はなんだのだ。ヤツパリ貴様は命が惜いのだらう」

タール「馬鹿言ふな。貴様が逃げるものだから朋友の義務を重んじて、附合に逃げてやつたのだ。何程天國がよいと云つても、ハムのやうな奴に殺されてはたまらぬからな。たつた一ぺんより死ぬ事の出来ぬ命を、アテーナの女神の様なクヱンの様の御手に掛つて死ぬのなら死んでも冥するが、ゲチゲチのやうに世間から厭がられてる鬼面のハムの手にかかるとア、何程死に好の俺だつて眞平御免蒙りたいワイ。アア一度女神の御顔が拜みたくなつて來たワイ」

レーブ「婆アサンの御顔は如何だ。萬々一あのクヱンさまがお前の女房になつてやると仰有つたら、婆アサンもキツとお添物に出て來るに違ないが、其時にや貴様如何する積だ」

タール「婆アサンだつて女だよ、あんな娘を生んだ位だから、若い時は非常なナ

イスに違ちがひない、昔むかしのナイスだと思おもへば餘あまり氣分きぶんも悪わるいこたアない事ことはないワイ。  
ウツフ、、

レーブ「コリヤ靜しづかにせい。ハムの奴やつ、聲こゑを聞ききつけてやつて來きやがつたら、それこそ大變たいへんだぞ。俺おれの命いのちを今度こんどは取とるに違ちがひない、餘あまり兩人りやうにんが云いひすぎたからなア、大變たいへんに怒おこつてけつかるに違ちがひないから、マア暫しばらく沈黙ちんもくの幕まくをおろして、潛航艇せんかうていのやうに祠ほこらの床下ゆかしたにでも伏艇ふくていして居をらうぢやないか」

かかる所ところへ足音あしおと高くスースーと息いきをはずませやつて來きたのはハムである。ハムは祠ほこらの前まへの置石おきいしに腰こしを打うちかけて獨言ひとりごとをいつてゐる。

ハム「アア、何なんといふ今日は怪體けつたいな日ひだらう。天女てんによのやうなナイスがやつて來きやがつて、無限むげんの力ちからをあらはし、おれたち三人さんにんを猫ねこが蛙かへるを銜くはへたやうに、ポイと谷底たにそこへ投げなこみ、サツサと行いつて了しまひやつた。空中くうちゆうを七八回しちはちくわいも廻轉くわいてんしたと思おもへば、眞綿まわたのやうな砂すなの上うへへドスンと落おとされ、暫しばらくは氣きが遠とほくなつてゐたが、漸やうやくにして氣きがつき起おき上あがらうとすれ共ども、腰こしの骨ほねが如何どうなりよつたか、チーツとも動うごけないので自然療治しぜんれうぢを待まつてゐると、そこへレーブ、タールの無情漢奴むじやうかんめがやつて來き

て、俺を水葬するの、二人を助けてやるのと、吐いてゐやがる。怪しからぬ事を吐す奴と腹が立つて堪らず、腰の痛みも打忘れて起き上るや否や、二人の奴ア、雲を霞と逃げて了ひよつた。モウ大分に行きよつただらう。イール、ヨセフの兩人をまだ温みがあるので生き返らしてやらうと思ひ、いろいろ介抱してると、何とも知れぬ腹を抉るやうな聲で、宣傳歌を歌うて来る奴がある。此奴ア、キツと最前の母娘の者の身内に違ない、グズグズしてると大變と漸う此處までやつて来たが又もや腰が痛み一歩も歩けぬやうになつて了つた。ヤレ嬉しやと氣がゆるんだが口計り達者で身體がサツパリ動かぬ。ア、如何したら良からうかな。もしや最前の宣傳使がやつて来よつたら、又候谷底へ放られて今度こそ命の終末だ、アー、バラモン教の大神様、私はお道の爲にやつた事でムいますから、假令少々不調法がムいましても廣き心に見直して此足腰を早く立てて下さいませ、お願い致します』

と涙聲になつて祈り出した。レーブ、タールの二人は祠の床下から此獨言をスツカリ聞いて了ひ、互に舌を出してニタツと笑ひ、何か肯き合つてゐる。



俄にはかに河鹿川かじかがはの谷底たにそこから濛々もうもうとして灰色はひいろの霧きりが立昇たちのおり、あたりを包つつんで了しまった。  
最早もはや一足先ひとあしも見みえなくなつた。二人ふたりはこれ幸さいはひと祠ほこらの床下ゆかしたから這はひ出だした。

ハムは苦痛くつう益々ますます烈はげしくなつたと見みえ、ウンウンと唸うなり出だし、終つひには、

「ア、苦くるしい苦くるしい」

と身みをもがく様子やうすが、霧きりを通とほしてボンヤリと見みえて來きた。ハムは二人ふたりのこここに居ゐることは夢ゆめにも知しらなかつた。只ただ宣傳使せんでんしの一行いっかうが追おひかけて來きはせまいかと、それのみが恐おそろしくて震ふるふてゐたのである。

レーブは婆アばあの作り聲つくごゑになつて、

「此祠このほこらの前まへに卑怯ひげふ未練みれんにも、八尺やさかの男をとこが吠ほえ面づらをかわき、何なにをグヅグヅといつてゐるのだ。わしは河鹿峠かじかたうげでお前まへを谷底たにそこへ放ほり込こんだ黄金姫わうごんひめだよ。もう今頃いまごろは十萬じふまん億土おくどの旅たびをしてゐるかと思おもうたに、またこんな所ところへ迷まようて來きたのか、ヨモヤ幽靈いうれいではあるまい。蛇くちなはの生殺なまころしにしておいても、ハムも可哀かあい想さうだから、スツパリと殺ころしてやらねばなるまい。ここに尖とがつた岩いはがある。コレ清照姫きよてるひめ、お前まへと二人ふたりで彼奴あいつの徳利とくりを叩たたきわつてやりませうか。酒さけの代かりに赤あかい血ちが出でるだらうから、それを

酒の代りに呑んでみたら随分甘からう、大分永らく人間の血を吸はなかつたが、大變良い獲物ぢや、かうして黄金姫と化けてゐるのも随分辛いものぢや。ア、神さまは結構な飲食を與へて下さる、臀部あたりは随分ポツテリと肉がついて居るから、スキ焼にして食べれば大變に味が良いのだけれど、何を云うても道中の事だから、此刀で片々々ゑぐつて生で食うの方が味がよからうぞや。オツホ、

タールは若い女子の聲で、

「お母アさま、本當にお腹が空いて、此鬼娘も困つて居りました。これも全く鬼雲彦さまの大黒主が與へて下さつたのでせう。今日で三年も蜈蚣姫さま、小絲姫さまの所在を尋ねると云つて、手當ばかりをボツタくり、チツとも目ざましい仕事を致さぬので罰が當り、鬼雲彦さまがキツと吾々母娘に久しぶりで與へて下さつたのでせう。どうもグリグリした厭らしい目玉だから、あの目から先にゑぐり出してやりませうか、ホッホ、。なんと甘さうな匂ひが致しますこと、鬼も時々こんな事が無ければやり切れませぬワ。イツヒ、」

靄に包まれて聲のみより聞えぬので、ハムは以前の母娘はヤツパリ鬼であつた

か、コリヤたまらぬ……と逃げ出さうとすれ共、腰は痛み、足は萎え、ビクとも動かれない。とうとうハムは泣聲を出して、

「モシモシ鬼の母娘様、どうぞ今日計りは惜い命をお助け下さいませ。私は鬼雲彦さまの家来でムいます。私のやうな者をおあがりになつては、却てあなたの罪になり鬼雲彦さまからお咎めの程も恐ろしうムいませう。味方が味方を食ふといふ事はある得可らざる所、どうぞ今日の所は御無禮をお赦し下さいまして、命計りはお助けを願ひます」

「タール」ホツホ、のあのハムの白々しい言葉、コレ鬼婆アさま、何事も耳をふたして食つてやりませうか。鬼雲彦さまだつて、こんな所までお目が届く道理もなし、頭からスツカリ食つて雪隠で饅頭食つたやうな顔さへして居ればメツタに分りはしませぬ。幸ひ山中の事とて誰一人見て居る鬼もなし、こんな機會はありませぬ。あゝモウたまらぬたまらぬ、何ともいへぬ甘さうな人の匂ひだ。ナア鬼婆アさま、グツグツしてゐると三五教の宣傳使が來たら大變です」

ハムはあわてて、

「モシモシ鬼婆アさまに鬼娘さま、そりや餘りお胴欲ぢや。味方が味方を殺すといふ事がどこにありますか。私をバラモン教同士のよしみで助けて下さいな」  
「タール」ホツホ、鬼婆アさまあれをお聞きなさいませ。あんな勝手な事を言ひます、味方の中にも敵があるといふぢやありませんか。此ハムといふ奴、味方の中の敵ですから、何の容捨もいりません、分つた所で御褒美こそ頂け、鬼雲彦さまからお叱言を頂く氣遣はありませぬ。此奴の同類にレーブ、タールと云ふ奴があつて、最前婆アさまと私と二人して谷底へ放り込んでやつたイル、ヨセフ等三人の命を助けにはるばる谷底へ尋ね行き、同じ味方であり乍ら此ハムだけは悪人だから助けてやらぬ方がよからう、憎まれ子世にはばると云つて、どうにもかうにも仕方のない奴だと、現に此奴の部下でさへも言つてゐた位だから、喰つた所でメツタに罰は當りませぬ、のうレーブよ……オツトドツコイ鬼婆アさま」  
「レーブ」コリヤ心得てものを云はぬかい、ハム公の奴、悟つたら折角の狂言が水の泡になるぢやないか」  
「タール」「ナー二悟つたつて構ふものか、ハムは足腰が立たぬのだから、鬼婆でな

くても鬼娘おにむすめでなくても、あの一升徳利いっしょうどくりを力チわつて、生血なまちを絞しぼり出し、臀肉けつにくでも食くうてやれば良いのだ。サアサア、早いはやがお得とくだ、グツグツしてると、三五教あななひけうの宣傳使せんでんしにでも見みつかつたら大變たいへんだぞ」

ハム「モシモシ鬼婆おにばアさま、鬼娘おにむすめさま、そんなレーブやタールに化ばけたつて駄目だめです。私わたしはそんな事ことに騙だまされるやうな善人ぜんじんではムいませぬ、悪人あくじんでもムいませぬワイ。どうぞ今日けふ丈だけは氣きよう見みのがして下くださいな、これ丈脛腰だけすねこしの立たたぬやうな者ものを自由じゆうにするのなら、三みつ子こでも致いたしますぞや。弱味よわみにつけ込んでそんな事ことをなさると、鬼婆おにばアさま沽券こけんが下さがります、モツト負惜まけをしみの強つよい代物しろものの、レーブ、タールが今いま此先このさき逃げましたから、彼奴あいつは私わたしと違ちがつて肉付にくづきもよし血ちも澤山たくさんムいます。どうぞ今日けふは彼奴あいつをきこしめし、私わたしは親おやの命日めいじちだから許ゆるして下ください。冥土めいどに御座ござる父母ちちははがどれ丈だけ歎なげく事ことが知しれませぬ。アンアンアン オンオンオン」

と狼おほかみのやうに泣なき出だした。

レーブ「其そのレーブ、タールといふ奴やつは、貴様きさまより善人ぜんじんか悪人あくじんか、それを聞きかして呉くれ」

ハム「ハイハイ聞かせます共、私は只職務忠實に部下を厳しく使ひますものだから、悪人にしられて居るのです。そして地位が高いものですから、猜疑心を起して、何とかかんとか悪評を立てられてるので、決して世間に言うてるやうな悪人ぢやムいませぬ。あなたも鬼さまなら、よく私の腹の底が分りませう。善人面をして歩いてる奴に口クな奴ア、今の時節にやムいませぬ。レーブ、タールの如きは、實に現代思潮の悪方面を遺憾なく具備した奴ですから、まだ遠くも行きますまい。此先あたりにマゴついてるに違ないから、彼奴を一カブリカブつてやつて下さい、然すりや鬼さまのお役目もつとまり、此世の中から悪の断片が取除かれるといふもの、私のやうな腰拔の萎びた善人は駄目ですよ。どうぞなる事ならば、レーブ、タールを追つかけて下さい」

レーブ「此の鬼婆アは悪人は骨がこわいから嫌だ、お前のやうな善人が喰ひたくて搜してゐたのだよ。人間を取つて食はうと思へば世界に濱の眞砂ほどあるが、食て味のよい善人がないから、かうして母子の鬼がひもじい腹を抱へてそこら中をウロついてゐるのだ。善人と聞けばどうしても喰はずに居られぬ。コレ鬼娘今

日は何といふ吉日だらう」

タール「本當に鬼婆アさまの仰有る通り、こんな嬉しい事はムいませぬワ。善人の少い世の中にハムのやうな善人が見つかったのは、掃溜を捜してダイヤモンドを拾つたやうなものだ。これを喰はいで何を喰ひませう」

ハム「モシモシ私の言ひ違でムいます。ハムは天下一品の大悪人でムいます。本當の善人といつたら、タール、レーブの兩人でムいます。最前お前さまが、ハム、イール、ヨセフの三人を谷底へ投げ込みなされた時、三人の者はすでに縋切れむとする所、危険を冒してあの谷川を渡り、御親切に三人を助けてやらうとした大善人でムいますから、キツと血の味もよく、たべ具合が宜しいに違はありませぬ。善人が味がよければ彼等兩人に限りません。私のやうな者をおあがりになつても砂をかむやうなものですから、どうぞこんなガラクタに目をくれず、天下一品の彼等善人を早く追つかけなさいませ。グツグツしてるとどつかへ沈没して了ひます」

レーブ「此鬼婆アは時々蟲が變つて刹那々に氣の持方が違つて来る。最前は善人が喰ひたいと思うたが、餘り齒ごたへがないから、一つ天下一品の悪人たる

お前まへが喰くつてみたいのだ。サア覺悟かくごをしたがよからう、お念佛ねんぶつでも申まをさいのう。  
オツホ、ウツフ、足腰あしこしも立たたずに口計くちばかり達者たつしやなハムも氣きの毒どくなものだ。  
此この通り霧きりが四方しほうを立ちこめ、日輪にちりんさまの御光おひかりも無なくなれば、鬼おにの得意とくい時代じだいだ。此この  
世よの名残なごりにモ一度いちど日輪にちりん様の御光おひかりを見せてやりたいは山々やまやまなれど、そしては此方こちら  
の働はたらきが出来できぬ。サア、タール、オツトドツコイ鬼娘おにむすめ、一層いつそうの事こと喰くつてやらうか  
い」

かく云いふ内うち、サツと吹來ふきくる山嵐やまあらしに灰色はひいろの霧きりはガラリと晴はれて、三人さんにんの姿すがたはハツ  
キリと分わかつて來きた。

レーブ「アツハ、とうとう化ばけが現あらはれた。オイ、ハム、貴様きさまも隨分ずぶんよい  
腰拔こしぬけだなア。サア二人ふたりの後あとを追おひかけて見みよ。腰拔こしぬけの分際ぶんざいとしてメツタに追おつか  
ける譯わけには行ゆくまい」  
ハム「何なんだ、いらぬ心配しんぱいをさせやがつて、覺おぼえてけつかれ、今いまに仇かたきを打うつてやる  
から」

と安心あんしんと腹立はらだちが一いっしよ緒よになつてハムは腰こしの痛いたみも足あしの惱なやみも忘わすれ、スツクと立上たちあがつ



た。二人は肝を潰し、「此奴アたまらぬ」と細谷道をバラバラと命限りに何處となく驅出し逃げて行く。

(大正一一・一〇・二二 舊九・三 松村眞澄録)

## 第七章 都率天(一〇七二)

紫色の丈の短い芝草一面に大地に生え茂り、岩もなければ高い木もない茫茫たる大原野に、赤白黄などの小さき花が星のやうに咲き満ちてゐる。空は紺碧の雲漂ひ、太陽の影も、太陰の姿も見えねども、何とはなしに爽快な氣分の漂ふ、露の玉光る野原をヒヨロリヒヨロリと通つてゐる二人の男、四邊の光景の現界とはどこともなく違つてゐるに不審を起し、茫然として足を止め、

イール「オイ、ヨセフ、何時の間にかこんな所へ吾々兩人はやつて來たのだらうか、河鹿峠の細谷路で母娘二人の女巡禮に出會ひ、谷底へ取つて放られたと思つたが、

あとは夢現、如何してこんな所へ如何いふ手続きをしてやつて来たのか合點がい  
かぬ。貴様何か記憶に残つてはゐはせぬかな」

ヨセフ「俺の記憶に残つてゐるのは外でもない、夢ばかりだ。河鹿峠で母娘の巡  
禮に會うたと思つたのは、あれこそ本當の夢だ、ここが本當の現實世界だ、現界  
は夢の浮世といふのだから、現界にあつた事は皆夢だよ。愈々吾々の魂の故郷現實  
世界へ歸つて来た、こんな結構な所へ出て来て極樂の餘り風をソヨソヨとうけ乍  
ら、誰に憚る所もなく氣儘に旅行してるのは愉快ぢやないか。現界のやうに此處  
は誰の領分だ、何某の土地だとせせつこましい區劃をうけてるよりも、何の制縛  
もないこんな花園に逍遙するのは、到底現界人の夢にだも知らざる所だ。ア、有  
難い、假令夢にしても此夢は千年も萬年も去らせ度くないワ」

イール「オイあれを見よ、向ふの空を、何だか妙な雲が出たぢやないか。一分間  
先にはホンの毬のやうな斑點が西北の空にパツと現はれたと思ふ間もなく、追々  
あの通り膨脹し、五色の雲が鮮かになつて来て、俺達の顔までに五色の光彩が輝  
き初めたぢやないか」

五色の雲は見る間に満天に擴がり、美はしき衣裳を着けたる二人の女神、一人は年若い一人は若く、五色の盛裳をこらして、雲に乗つて此方に向つて降り來る様子であつた。二人の立つてゐる紫野の原野はいつとはなしに天へ浮上つた如く感ぜられ、雲が下つたか地が上つたか、區畫のつかないやうな鹽梅で、いつのまにか二人の女神は二人の前に立現はれた。よくよく見れば河鹿峠で谷底へ投げすてて行つた、二人の母娘である。イール、ヨセフは不意の對面に打驚き、頭を下

げ、  
イール「これはこれは黄金姫さま誠に御無禮を致しました。どうぞお許し下さいませ」

ヨセフ「あなたは清照姫さま、こんな尊き神さまとは知らずに御無禮を致しました。どうぞ許して下さいませ」

黄金姫「其斷りを言はれては困ります。私こそ女のくせに、あられもない荒男を谷川へ放り込んだり、イヤもう御無禮ばかり致しました」

清照姫「私も若い女の身を以て、荒男を放り込むなどと亂暴なことを致しました

が、どうぞ許して下さい」

イール「ハイ有難う御座います。併し乍らここは何といふ所で御座いますか、一向合點が参りませぬが」

黄金姫「ここは未來の夢想國ですよ。あなたが此處へ來たのは、娑婆に於て神さまの爲に大活動をなし、神の恵に依つてかやうな天國淨土へ救はれたのです。お互にこんな結構なことはありませんませぬ、お喜び申します」

イール「吾々兩人は現界に於て、ロクなことは一つもやらず、何一つ神さまの爲にお役に立つた事はありません。それに斯やうな所へ救はれるとは合點が行きませぬ、ヨモヤ人達では御座いますまいかな」

黄金姫「まだお前さまは、今日の所では、これといふ手柄は一つもしてゐない。どちらかと云へば悪い事の方が多いので、公平な神さまのお審きに會へば、こんな所へ來る身分ぢやない、吾々だつて其通りです。併し乍ら神さまは過去現在未來をお見透しだから、お前さまがこれから現界にをつて、善の行ひをなし、現界を去つてから後に來るべき世界を一寸のぞかして貰うてゐるのですよ」

ヨセフ「まだこれから善をなす爲に、斯やうな所へよせて頂くとは、合點が往きませぬ。天晴れ世の中に功を立てた上のことなれば、いざ知らず、吾々のやうな汚れた靈が斯やうな所へ來るとは、如何しても合點がいきませぬ、コリヤ夢ではありますまいかな」

黄金姫「夢所か現實です。それでもお前さまが、これから先へ善くない事をしようものなら、キツとこんな結構な所へは來られない、これと反對の所へ行かねばなりません。サアこれから私が、都率天の世界を案内して上げよう」

兩人「ハイ有難う」

とさしうつむく。自分の立つてみた地上は、フワリフワリと何處ともなく浮上るやうになつて來た。そして四人の一行は立つた儘、青雲の空を目がけて昇り行く。見れば、忽ち眼前に現はれた朱欄碧瓦の美はしき殿堂、まはりは紅色の玉垣をめぐらし、金銀の砂が一面に敷きつめられ、ダイヤモンドの砂が所々に交つて、銀河の如く輝いてゐる。二人は夢かとはばかり顔見合せ、呆氣にとられて居た。

清照姫「コレ兩人さま、ここは都率天の月照彦さまのお宮で御座います。これか

らは何も云ふことは出来ませぬぞえ、吾々二人の後についてお出でなさい。神さまが何と仰有つても、お返事をしてはなりません。神さまと人間とは階級が違いますから、神さまの思召を聞くばかりで一口も御返事することはなりません。物が言ひたくば此門をくぐる迄に言うておきなさい。此門をくぐるや否や、假令如何なる者に會つても只俯むいてお辭儀さへして居れば良いのだから

イール「ハイ畏まりました。何と申うても本當にはしられませぬワ。本當に私は斯様な所へ、未來とやらに救はれるでせうか」

黄金姫「只神さまの仰せを承はり、其通り遵奉して居りさへすれば、未來は斯様な結構な所へお参りが出来ます。何事も言つちやなりませんぞえ」

イール「ハイこれ限り申しませぬ。オイ、ヨセフお前も今の内にお尋ねしておくがいいぞ。此門内へ這入れれば最早言論機關を使用することは出来ないから」

ヨセフは畏まり、靜に首を傾けたきり、一言も發しない。黄金姫、清照姫は無言の儘、門番に目禮し、靜に奥へ奥へと進み入る。

嚙喰たる音樂の響き何處ともなく聞え來り、芳香四邊に薰じ、門内の内庭には

白蓮華の花咲きほこり、牡丹白梅薔薇等の垣は其艶を競ひ、現界で見たこともないやうな美しき羽の小鳥は、爽かな聲を出して、天國の春を歌うてゐる。黄金の玉杯を手にして黄金色の衣類を着けた美はしき女神、白装束に紅の袴にて、四人しづしづと出で迎へ玉杯より紫の色したる水を指にぬらして、一人々々、唇にひたす。其味と云ひ香りと云ひ、何とも譬へやうのなきものである。四柱の女神は四人を導いて奥深く進み入る。

奥殿深く進み入り、正面を眺むれば、金銀を以てちりばめたる須彌壇の上に、紫磨黄金の肌をあらはし、儼然として控へ玉ふ一柱の神があつた。やさしみのある内にどこともなく威嚴備はつて、面を向けるもまばゆいやうな心持がすると共に、何ともいへぬ懐かしみがした。此神は月照彦命であつた。四人をゆかしげに見やり、黄金の御手を伸べて、膝元に來たれと招かれる。左右に控へたる澤山の童子は手に種々の花を携へ、無言のまましとやかに須彌壇の前に舞ひ狂うてゐる。馥郁たる芳香に美妙の音楽はたえず鼻耳をつき、燦爛たる殿内の光は目を新しく照すのみである。

黄金姫は後振り返り、三人を手招きする。三人は無言のまま黄金姫の後に従ひ行けば紫の色漂ふ丸い穴が、殿堂の裏より、斜に低く穿たれ、紫の階段がついてゐる。黄金姫はつかつかと階段を降り行く。三人も其後に従つて際限もなく下り行けば、そこに雑草の茂る葦の生えた沼が横たはつて居る。

二人は何時の間にか此沼の中におち込んでゐた。餘り深からね共、直立して口のあたり迄水がついて来る。少しく風が吹いて浪高くなれば、鼻をおそひ、息苦しくなつて来る。黄金姫、清照姫は如何にと、四邊を見れ共、其姿だになく、今迄美はしかりし殿堂は煙の如く消え失せ、只葦の生ひ茂る沼の上を秋風が吹きわたる其淋しさ。

斯かる所へ何處ともなく、レーブ、タールの兩人あわただしく走り來り、沼のまはりに立つて、二人の名を呼び、

「早く此方來れ」

と差招く。イール、ヨセフの兩人は身を蹴き、二人の側に泳ぎ行かむとすれ共、如何したものが二人の足は沼底に漆喰の如く吸ひつけられ、身動きもならず、風



に煽あふられて、時々ときどき高たかき波なみ鼻び目めのあたりをおそひ来きたり、苦くるしさ限かぎりなし。二人ふたりは聲こゑも  
え上あげず、苦くるしみ悶もたえて居ゐると、何ど處こともなく、ハムはレーブ、タールの前まへに現あらは  
れて、三人さんにんはここに何なに事ごとか口こう論ろんを始はじめ出だした。イール、ヨセフの兩りやうにん人は沼ぬまの中なかに  
て懶ものうげに三人さんにんの争あらそひを眺ながめてゐる。ハムの後うしろには口くち耳みみまで裂さけた赤まつばだか裸あかおにの赤あかおに鬼おにがつ  
いてゐた。暫しばらくすると、レーブ、タールの兩りやうにん人は沼ぬまの堤つつみを一目いちもく散さんに東とう南なんさして走はし  
りゆく。ハムは二人ふたりの沼ぬまの中なかに苦くるしんでゐるのを見みて、助たすけやらむと、赤まつばだか裸あかおにとなり  
沼ぬまの中なかに飛とびこまむとすれ共ども、後うしろに立たつた赤あかおに鬼おにが、グーツと首くび筋すぢを掴つかんで離はなさな  
いので、ハムは一生いつしやうけんめい懸けん命めいに身みをもがいてゐる。イール、ヨセフの兩りやうにん人は、息いきもた  
えだえになつて、早はやく助たすけてくれよ……と叫さけばむとすれ共ども、如いか何かにしけむ、一ひと  
言ことも聲こゑが出でなかつた。何ど處こともなしに宣せん傳でん歌かの聲こゑが中ちゆう空くうに聞きえて居ゐる。此この聲こゑを聞き  
くと共ともにハムについてゐた鬼おにの姿すがたは煙けむりと消きえた。ハムはレーブ、タールの逃にげ去さ  
つた後あとを追おうて、地ぢ響びきさせ乍ながら歸かへり行ゆく。  
二人ふたりは此この宣せん傳でん歌かの聲こゑを聞きくと共ともに身しん體たい輕かるく浮うき上あり、いつの間まにやら沼ぬまの畔ほとりに  
ついてゐた。そして濡ぬれた着き物ものは何いつ時つの間まにか乾かわいてゐる。ハテ不ふ思し議ぎなことが

あるものだなア……と兩人は顔を見合せつつ、ハムの走つた後を追うて驅出すと、一本の大きな松の木が枝振よく立つてゐて、沼の上に枝を垂れてゐる。其松の木を見上ぐれば、えもいはれぬ恐ろしき大蛇が三間ばかりの首を伸ばして樹下を眺め、大口を開いて何者か呑まむとしてゐる。二人は初めて口を開き、

イール「オイ、ヨセフ、大變ぢやないか」

ヨセフ「如何にもイールの云ふ通り、此松の木には妙な奴が居るではないか。大方最前の三人は此大蛇に呑まれて了うたのだろ。コリヤ、グズグズしてはゐられまいぞ」

と言ひ乍ら、松の根元をよくよく見れば、土の中から首が生えてゐる。上には大蛇下には生首、ハテ厭らしやと、逃げ出さうとすれ共、如何したもののか、身體強直してビクともならぬやうになつてゐる。

二人は因果腰を定め、地中から生えた首をよく見れば、豈計らむや、バラモン教の大棟梁大黒主である。二人はビツクリして顔色をかへ乍らあわただしく、イール「ア、あなたは大黒主の神さまぢや御座いませぬか。如何してマアこん

な所へ首ばかり出してゐられます。あれ御覽なさいませ、此松の枝には大蛇が蟠つて、今や一口に呑まむとしてゐるぢや御座いませぬか、サア早くここを私と一緒に逃げませう」

大黒主「ヨウ其方はイール、ヨセフの兩人、こんな所へ來るものではない。今の内へ後へ引返したがよからうぞ」

ヨセフ「引返さうと申して、何處へ行つてよいやら、譯が分りませぬ。して又あなたの首から血がにじんで居りますが、コリヤマあ如何した譯ですか」

大黒主「私は天地の大神の罰をうけ、此松の木の下に於て、手足を縛られ、自分の作つた配下の鬼共に土中に埋められ、此通り首のみ地上に現はし、鷹や烏に頭をこつかれ、毒蟲に首を咬まれ、こんな苦しい目に會つてゐるのだ。お前も早く改心いたして、誠の道に立返つたがよからうぞ、私の如くなつて了へばモウ駄目だ。まだまだこれから澤山の苦勞をいたして罪を赦して貰へるか貰へぬか分らぬ所だ。早く三五教の神文を唱へて此急場をのがれよ」

イール「コレは又、異なることを承はります。あなたはバラモン教の大教主であ

り乍ら、何を以て三五教の神文を唱へと申されますか、少しも合點が参りませぬ  
大黒主は苦しげに、  
「現界に於ては今時めく勢なれども、未來の吾靈魂は此通り、松の下に於て無  
限の責苦をうけねばならぬことになつてゐるのだ。三五教は神より出でたる教、  
其他の教は皆枝神や人間の作つた教であるから、御神慮の程が分らない。否々  
神慮に違反した教を致して居るから、バラモン教の代表者たる此方が斯やうな責  
苦に會つてゐるのだ。とはいふものの、吾の肉體は副守護神の勢ひ中々猛烈にし  
て到底容易に改心は致さない。改心さへ致したらこんな苦惱は免るのだが、大  
黒主の肉體がどうしても改心してくれぬので、本尊の此方がこんな責苦にあふの  
だ。百年後の大黒主の行末は、即ち今の有様であるぞ。サア、早くここを立去れ  
斯かる所へ、又もや三五教の宣傳歌がかすかに聞え、宣傳使が三人の供人と共  
に沼の邊に現はれて來た。此聲を聞くと共に、大黒主の體は地上へガワとばかり  
に浮上つた。樹上の大蛇は大黒主を大口開けて、グツと一口に呑んだまま、黒雲  
を呼び起し、一目散に中天に姿をかくして了つた。」

二人の宣傳使の姿を見るより、フツと気が着きそこらあたりを見れば、河鹿峠の谷底に陥り、舞埃の砂の中に半身を埋めてみたことが分つた。谷の流れはゴウゴウと四邊に響いてゐる。氣をおちつけてよくよく見れば、照國別の宣傳使を始め、梅公、照公、國公の三人は二人の身體を介抱し、一生懸命に、魂呼びの神業を修してゐたことに気が着いた。

イール、ヨセフの兩人は宣傳使一行に向ひ黄金姫一行に無禮を加へて、此谷底に投げ込まれた一條より、鬼熊別に雇はれて、蜈蚣姫、小絲姫の所在を尋ね求めつつあることを詳に物語り、ここに翻然として悟り、宣傳使に従つて、谷を下り、山路に出で、トボトボと後に従ひ行く。二人は何となく、宣傳使の威光に打たれて、恐ろしくなり、あたり暗に包まれし頃、隙を窺うて逃げ失せて了つた。

照國別は道端の古き祠の前に、三人の供人と共に一夜を明かすこととした。

(大正一一・一〇・二二 舊九・三 松村眞澄録)

第八章 母と娘（一〇七三）

月つきてり渡わたる月つきの國くに

梵ぼん天王てんわうの守まもります

清きよき尊たふとき國くになれば

ババララモモンン國こくと稱となへけり

抑そもそも月つきの神かみ國くには

所ところを以もつて國くにとなし

其その數かず七しち千せん有いう餘よ國こく

刹せつ帝てい利り族ぞくを王わうとなし

巴ばラらモもンん族ぞくは淨じやう行ぎやうを

唯ゆめい一いつの勤つとめと勵はげみしが

古ふるき風ふう習しふも今いまははや

時ときの力ちからに抗かうしかね

刹せつ帝てい利り族ぞくは散さん々ざんな

憂うきめ目めに遭あひて屏へい息そくし

今いまは全まく巴ばラらモもンんの

ややかかららの掌しやう握あくする迄までに

國くにの秩ちつ序じよは紊みだれたり

七しち千せん餘よ國こくの其その内うちに

最もつとも廣ひろきハハルルナナ國こく

ハハルルナナの都みやこに現あらはれて

梵ぼん天てん王わうの末まつ裔えいと

僭せん稱しよつしたる曲まが津つか神かみ

鬼雲彦は葦原の	中津御國をあとにして
フサの國をば横斷し	自轉倒島に打ち渡り
暴威を揮ひみたりしが	神素盞鳴大神の
守り玉へる三五の	教司に退はれて
雲を霞と中空を	かけりて逃げゆく印度の國
ハルナの都に現はれて	梵天王の自在天
大國主を祀りつつ	靈主體従を標榜し
慘虐無道の教をば	開きあるこそ忌々しけれ
遠き神代の昔より	王の位を繼承し
此國々の王位をば	占めたる清き刹帝利
國の貴族を虐げて	バラモン族と聞えたる
大黒主はわが部下を	其國々に遣はしつ
現と幽との全權を	握らせおきて自らは
印度の國の大王と	なりすましたる時もあれ

ウブスナ山やまの齋苑館いそやかた 守り玉たまへる更生神かうせいしん

數多あまたの神人かみびと從へて 朝あさな夕ゆふなに天地あめつちに

塞ふさがる鬼雲おにくもやはらむと ここに神かみたちよび集つどへ

日出別ひでのわけの御言みこともて 黄金姫わうごんひめや清照姫きよてるひめ

神かみの命みことを初はじめとし 照國別てるくにわけや玉國別たまくにわけ

治國別はるくにわけの神司かむつかさ 初稚姫はつわかひめに言任ことまけて

印度いんどの國くにを三方さんぼうより 進すすませ玉たまふ御經綸ごけいりん

あゝ惟かむながら神々々かむながら 御靈幸みたまさちはひましまして

此物語このものがたりスクスクと 言靈車ことたまぐるまよく走りはし

萬里ばんりをめぐる月つきの國くに 殘のこる隈くまなく調査てうさせし

神代かみよの深ふかき物語ものがたり 述のべさせ玉たまへ惟神かむながら

神かみの御前みまへに願ねぎまつる。

黄金姫わうごんひめ、清照姫きよてるひめは河鹿峠かじかたつげを巡禮姿じゆんれいすがたに身みをやつし、上のぼりつ下くだりつ、谷間たにまの絶景ぜっけいを



眺めて、憩ふ折しもハム、イール、外三人の鬼熊別が部下に出會し、遂に道ならぬ事とは知り乍ら、正當防衛上止むを得ずして、ハム、イール、ヨセフの三人を、千仞の谷間を目がけて投込み、外二人の雲を霞と逃げゆく姿を冷やかに見守り乍ら、あたりに心をくばりつつ、母娘二人はシトシトと崎嶇たる羊腸の坂路を進み行きつつ歌ふ。

□ バラモン教の副棟梁 鬼熊別の妻となり

埃及國に現はれて 教を傳ふる折柄に

天理にたがひし曲業を 知らずに勤めりたりしが

仁慈無限の三五の 神の光に照らされて

イホの都を逐電し 鬼雲彦に従ひて

顯恩郷に身を隠し 月日を重ねて漸くに

バラモン教の礎を 固めりたりし折もあれ

太玉命の宣傳使 現はれ玉ひて天地を

震撼せむず言靈を

發射し玉へば大棟梁

鬼雲彦を初めとし

彼等一族雲霞

副守の大蛇につれられて

安全地帯と聞えたる

自轉倒島の中心地

なる果物も大江山

嚴の岩屋に立こもり

三嶽の山や鬼ヶ城

部署を定めてバラモンの

教を四方に宣傳し

豐葦原の瑞穂國

百八十島の果てまでも

バラモン教に歸順させ

梵天王の御教や

御稜威を四方にてらさむと

思ひし事も水の泡

英子の姫に仕へたる

神の御國の強者に

追ひやらはれて果敢なくも

鬼雲彦は逃げて行く

わが背の君も後を追ひ

姿をかくし玉ひけり

女心のどこまでも

初心を徹さにやおかないと

鬼ヶ城をばふりすてて

安全地帯のかくれ場所

雲をとほして三國嶽  
岩窟に深く忍び入り

數多の部下を使役して  
捲土重來バラモンの

復興はかる折もあれ  
神の恵か白雲の

空わけ登る宣傳使  
悪事は忽ち露顯して

住むによしなき悲しさに  
心の駒ははやり立ち

善と悪との瀬戸の海  
小豆ヶ島の岩窟に

身をかくしつツバラモンの  
教を開く傍に

小絲の姫の所在をば  
焦れ尋ぬる眞最中

心曲れる友彦と  
思はずここに邂逅して

わが子の消息略悟り  
棚なし舟を操りて

三五教の高姫と  
力を合せ海原を

渡りて進む一つ島  
地恩の郷にまゐり

黄龍姫の愛娘  
嬉しくここに面會し

三五教の神人に  
導かれつつスワの湖

玉依姫の隠れます

尊き靈地に參拜し

麻邇の寶珠の神業に

仕へまつりし嬉しさよ

四尾の山の山麓に

大宮柱太知りて

しづまり玉ふ大神の

宮居に朝夕仕へつつ

言依別の御言もて

再び來たるフサの國

ウブスナ山の靈場に

身魂を研きゐたりしが

いよいよここに月の國

ハルナの都に現はれし

大黒主の曲業を

ため直しつつ天地の

神の恵に浴せしめ

醜の司を初めとし

七千餘國の國人を

安きに救ひ助けむと

神の御言を畏みて

進み行くこそ嬉しけれ

河鹿峠の山路を

迎る折しも吾夫の

守らせ玉ふバラモン

配下に仕ふる魔神たち

虎狼の心もて

われら母娘を迫害し

暴威ばうゐをふるひきた来るより  
 天則てんそく違反ゐはんと知りし乍ながら  
 やむに止やまれず手てのすさび  
 いでく来る奴やつをひつ掴つかみ  
 何なんの容赦ようしやも荒川あらかはの  
 谷間たにまに向むかつて投なげやれば  
 残のこる魔神まがみは逸いち早く  
 雲くもを霞かすみと逃にげ失うせぬ  
 さはさり乍ながら彼等かれらとて  
 天地てんちの神かみの御水み火いより  
 生うまれ出いでたる神かみの御子みこ  
 悔くい改あらためて速すみやかに  
 身魂みたまを清きよめ美うるはしき  
 高天原たかあまはらの都率とそつてん天  
 尊たふとき神かみの御前おんまへに  
 靈みたまを救すくひ玉たまひつつ  
 其醜業そのしこわぎを一日いちにちも  
 早はやく改あらためさせ玉たまへ  
 清照きよてる姫ひめと諸共もろともに  
 河鹿峠かじかたうげの山やまみちに  
 心こころの垢あかを拭ぬぐひつつ  
 三あなな五ひけう教まもを守まもります  
 皇大神すめおほかみの御前おんまへに  
 畏かしこみ畏かしこみねぎまつる  
 あゝかむながら惟神かむながら々々  
 御靈みたま幸さちはひましませよ  
 『

清照姫は坂を下りつつ母の後について歌ふ。

神が表に現はれて  
善神邪神を別け玉ふ

バラモン教の神司  
鬼雲彦に仕へたる

父の命の鬼熊別は  
無限絶對無始無終

雲力體の大元首  
梵天王と聞えたる

大國彦の神靈を  
自在天神とあがめつつ

常世の國をあとにして  
埃及國に打渡り

顯恩郷にあれまして  
教を開き玉ひしが

其勢力は日に月に  
八桑枝の如茂久榮に

榮え茂りて權力は  
竝ぶ者なき神司

數多の侍神を従へて  
ヤツと心を安んじつ

副棟梁に任せられて  
母命を相娶り

夫婦仲よく道の爲  
仕へ給ひし雄々しさよ

二人の仲に生れたる

小糸の姫は幼時より

榮耀榮華に育てられ

世の荒波も知らぬ身の

辨へもなく友彦に

心を奪はれ海山の

恩ある父母をふりすてて

心の暗に紛れつつ

戀しき男に手を引かれ

エデンの河を傳ひつつ

フサの海原乗越えて

波に漂ふシ口の島

松浦の郷に身を忍び

一年ここにゐたりしが

友彦司の行ひに

愛想をつかし夜に紛れ

館を後に舟人の

チャンキー（長吉）モンキー（茂吉）と諸共に

千波萬波を押分けて

はるばる進む龍宮島

五十子の姫や梅子姫

三五教を守ります

神の司に巡り會ひ

身魂共に救はれて

神の威徳もオスタリヤ

地恩の郷にかけ向ひ

高山彦や黒姫の

蔭の力に守られて

一時は時めくクヰンの身  
月日の如き勢を

四方に照らしてみたりしが  
神の守りの淺からず

戀しき母に巡り會ひ  
麻邇の寶珠の神業に

仕へてやうやう自轉倒の  
島に初めて立向ひ

錦の宮に暫くは  
眞心こめて仕へしが

言依別の教主より  
齋苑の館に母と子は

さし遣はされ朝夕に  
惠の露に浴しつ

清照姫と名を賜ひ  
母娘二人は潔く

三五教の宣傳に  
仕ふる折しも日出別

神の司の命令に  
戀しき父のますと聞く

月の都に進めよと  
仰せ玉ひし嬉しさよ

神に任せし此體  
いかなる惱みの來る共

いかで恐れむ神の道  
さやる曲津を悉く

尊き稜威の言靈に  
言向和しいち早く



神の御國を立直し 月照りわたる月の國  
 空もハルナの都とし 照らさむ爲の此首途  
 あゝ勇ましし勇ましし 如何に嶮しき山坂も  
 心の駒の勇むまに 千里の道も遠からず  
 進み行くこそ樂しけれ あゝ惟神々々  
 御靈幸はひましまして 吾等母子の神業を  
 守らせ玉へと村肝の 心も清く照りわたる  
 清照姫がねぎまつる あゝ惟神々々  
 御靈幸はひましませよ

と歌ひ乍ら、秋風に面をふかれ、蓑をあふられ、杖を力に河鹿峠を降り行く。

(大正一一・一〇・二七 舊九・八 松村眞澄録)

第三篇 宿世の山道

第九章 九死一生（一〇七四）

鬼熊別の部下に仕へたるガラダ國の刹帝利、親重代のハムの位を大黒主の部下にとり剥がれ、僅かに鬼熊別の部下となり、卑しき目付役に成り下り居たれども、彼の部下は數十人密かに彼の頭使に甘んじて忠實に仕へ、昔のハムの果てとして、相當に尊敬を國民より拂はれて居た。

今しも鬼熊別が命によつて蜈蚣姫、小絲姫の所在を索ねる一方、三五教の宣傳使を一人にても多く捕縛し歸らば、もとのガラダ國の王に復しやらむとの契約の下に四人の小頭株を引き率れ、此河鹿峠に待ちつつあつたのである。然し乍ら四人の男は此ハムの素姓を知らず、何となく横柄な奴、蟲の好かない奴と猜疑の眼を怒らし、何か失敗ある時は、これを嗅出し一々鬼熊別に内報し、目の上の瘤

なるハムを失墜せしめむと心密かに謀し合せつつあつた。

かかる處へ母娘の巡禮、進み來るに出會し、何の容赦も荒繩に、縛つてハルナの都まで、立ち歸らむと四人に下知を下した。四人は吾劣らじと母娘に向つて武者振りつき、苦もなく谷間に投げ捨てられ、ハムも亦脆くも谷底に捨てられて了つた。流石刹帝利の直系とて何處となく身魂堅固なりしかば、イール、ヨセフの如く容易に失神せず谷底の眞砂に埋められて痛さを堪へて自然の恢復を待つ折しも、レーブ、タールの兩人は谷を渡つて近寄り來り、散々にハムの悪口を竝べ立て、此際二人を助けハムを谷川へ投げ捨てやらむとの密談を聞くより憤怒のあまり病の苦痛を忘れて、

ハム『おのれ憎くき兩人』

と立ち上ればレーブ、タールはイール、ヨセフを捨て、谷川傳ひに生命辛々逃げて行く。ハムは無念の齒を喰ひしぱり、イール、ヨセフを介抱し居る折しも、頭上に聞ゆる宣傳歌『こりや堪らぬ』と韋駄天走りに岩を飛び越え淺瀬を涉り、漸く山道に攀上り片方の森を眺むれば、此處に一つの古き祠がある。一先づ此處に

息休め、レーブ、タール兩人が所在を探ね、懲らしめ呉れむと息まきつつ、社前の石に腰うち掛け息を休めむとする時しも、張り詰めたる勇氣は茲にガタリと弛み、再び腰痛み足うづき、身動きならぬ苦しさに、レーブ、タールの兩人が仕打ちを憤慨し怨み涙に暮れてゐる。忽ち祠の後より二人の巡禮の聲、ハムは又もや二度吃驚、

「ア、彼は普通の巡禮ではなく、人を取り喰ふ鬼婆鬼娘であつたか」  
と濃霧に包まれて怨みの的なるレーブ、タールの兩人が作り聲とは知らなかつた。レーブ、タールはハムの獨言を聞き足腰立たぬにつけ込んで侮りきつて擲掬つて居たが、忽ち吹き来る山風に濃霧は晴れ其真相が暴露すると共に、怒り心頭に徹し、怒髪天を衝いて立ち上り苦しき病の身を忘れ、逃げゆく二人の後追うて、  
「逃しはせじ、思ひ知れや」  
と言ひ乍ら握り拳を固めつつ、さしも嶮しき坂道をトントントンと地響きさせ阿修羅王の荒れし如く進み行くこそすさまじき。

ハムは痛さを忘れ、一足々々拍子を取り乍ら歌ひ出した。

時世時節と云ひ乍ら ガランダ國の刹帝利

親代々のハムの俺 鬼熊別の部下となり

時待つ尊き身と知らず 卑しきレーブやタール奴が

侮りきつたる其態度 小癩に觸る俺の胸

一度は懲らしめやらむと 思ひは胸に満ちぬれど

吾目的を遂ぐるまで 怒つちや損だと辛抱して

知らぬ顔にて過ぎて来た 河鹿峠の山道で

テツキリ會うた母娘連 此奴あテツキリ蜈蚣姫

小絲の姫と知つたれど さう言つたなら彼奴め等は

腐つた肉を犬の子が 争ふ如くに啞み合ひ

互に手柄の取りやりを おつ始めるに違ひない

一つも取らず二も取らず チヤツチヤ ムチヤクになるだろと

思案を定めて空惚け 婆と娘であつたなら

ハルナの都へ連れ歸り 鬼熊別の御前に

奉らうかとあやつりて

彼等四人を誑かし

首尾よう目的達しなば

途中に彼を追ひ散らし

愈此處で名乗り合ひ

忠臣義士となりすまし

一人甘い事してやらうと

思ふた事も水の泡

ウントコ ドツコイ アイタツタ

あんまり吾身の欲ばかり 企んだおかげで罰當り

蜈蚣の姫や小絲姫 二人の司に谷底へ

不敵の力で投げ込まれ くだばりきつた果敢なさよ

後悔胸に迫り来て 涙に暮るる折からに

悪運強い兩人が 虎口を逃れて谷底へ

尋ね来りて囁くを 死んだ眞似して聞き居れば

口を極めて罵りつ イール ヨセフは助けても

ハムは助けちゃ堪らない 人事不省を幸ひに

此谷川に水葬と 無禮な事を吐かす故

あまりの事に立腹し  
痛さを忘れて立ち上り

拳を固めて睨まへば  
卑怯未練な兩人は

親しき友の危難をば  
後に見捨てて逃げて行く

後に残りしハム公は  
二人の生命を助けむと

人工呼吸の眞最中  
三五教の宣傳歌

雷の如くに聞え来る  
頭は痛み胸塞ぎ

身の苦しさは限りなく  
二人の奴を見殺しに

レールターの後追うて  
祠の前に来て見れば

グタリと弛んだ心持  
再び腰は痛み出し

足は痺れて動けない  
二人の奴が床下に

忍び居るとは知らずして  
愚癡の繰言竝べたて

悔む折しも婆の聲  
續いて娘の聲聞ゆ

俺は鬼婆鬼娘  
喰つてやらうとの御挨拶

蜈蚣の姫や小絲姫  
二人と見たのは目のひがみ

人をとり喰ふ鬼母娘

しまつた事になつたわい

何程強いハムさまも

神變不思議の魔力ある

鬼に向つちや堪らない

何とか云つて此場合

逃れにやならぬと色々

言葉を構へて宣りつれば

鬼婆益々圖に乗つて

無體の事を喋り出す

俺も今こそ身を落し

捕手目付となりつれど

其源を尋ねれば

ガラダ國の刹帝利

國人達にハムさまと

尊敬せられた身の上ぢや

心弱くちや堪らない

假令脛腰立たずとも

卑怯な最後を遂げむより

玉と碎けて死なうかと

覺悟を極むる時も時

俄に吹き來る山嵐

四邊を包みし雲霧も

茲に漸く晴れ渡り

よくよく見れば此は如何に

レーブ タールの兩人奴

身體の不自由をつけ込んで

刹帝利族のハムさまを



侮りきつて馬鹿にして 居やがる態度の面憎さ  
忽ち怒髪天を衝き 腰の痛みも打忘れ  
此處まで追っかけ来りしが 又もや腰が痛み出し  
足が怪しくなつて来た あゝ惟神々々  
神の恵みを蒙りて 何卒ハムが足腰を  
いと速かに健やかに 治し給はれ惟神  
お願申し奉る アイタ、タツタ アイタツタ  
もう一步も行かれない 天地の神もバラモンの  
百の神々一柱 聞いて下さる神なきか  
愚癡を云ふのぢやなければども こんな時こそ神様に  
助けて欲しさに朝夕に バラモン教の御爲に  
盡して居るのぢやムらぬか 思へば思へば残念や  
もう一寸も進めない 大方俺は野たれ死  
不運な者は何處までも 不運で終はらにやならないか

虎狼とらほかみや獅子しし熊くまの 餌食えじきとなつてしまふのか

ガランダ國こくのハムみの身みも 斯こうなり行くゆとは白雲しらくもの

遠とほき異國いこくの山やまの道みち 空行そらゆく雲くもも心こころあらば

吾わが消息せうそくをガランダの 妻つまの御許みもとにおとづれよ

頼たのみの綱つなもつきはてし 悲慘ひさん至極しごくの今日けふの身みは

惡あくの鑑かがみと天地あめつちの 神かみの心こころに出いでますか

遠津とほつ御祖みおやの盡つくしてし 百ももの罪科つみとが身にうけて

此處ここで死しなねばならないか 思おもへば思おもへば殘念ざんねんぢや

これほど神かみに祈いのれども するしなければ是非ぜひもない

最も早はや決心けつしんした上うへは 死しをも恐おそれぬ吾體わがからだ

神かみの御手おんてに任まかします 屍かばねは野邊のべに曝さらすとも

不ふ老らう不ふ死しなる靈魂れいこんは 高天原たかあまはらの都率とそつてん天

尊たふとき神かみの御前おんまへに 救すくはせ給たまへ惟神かむながら

バラモン教けうの大御神おほみかみ 御前みまへに祈いのり奉たてまつる』

と涙の聲を絞り山道にドツと倒れ、観念の目を瞬いて知死期を待つ事となつた。  
此時何處ともなく微妙の音楽聞え來り、翩翩として白蓮華の花片、天より降り  
來ると見る間に、ハムの體は俄に清涼水を嚙下したるが如き氣分に漂ひ瞬く間に  
もとの健全體となり變つた。ハムは喜びのあまり、天地に感謝し、今までの言心  
行の一致せざりし罪を謝し、悠々として坂道を下り行く。あゝ惟神靈幸倍坐世。  
(大正一一・一〇・二七 舊九・八 北村隆光録)

第一〇章 八の字「一〇七五」

レープ、タールは、河鹿峠の谷底に投げ込まれたるイール、ヨセフの兩人を人  
工呼吸を以て助けむと丹精を凝らす折しも、人事不省に陥りしと思ひ居たるハム  
は俄に立ち上り、怒りの聲を放ちて二人を懲さむとせしより、「こりや堪まらぬ  
と行歩艱難の谷間を猿の如く傳ひて、漸く道傍の古き祠の下に身を潛め息を休め

て居た。そこへハムがやつて来て脛腰たたぬ様になり、啣ち嘆くを聞いて俄かに元氣づき、弱身につけ込む風の神ならねども、鬼婆鬼娘の聲色を使つて、ハムを恐喝しつづ得意がつて居る。折しもあれやサツト吹き来る山嵐に四邊を包みし濃霧は拭ふが如く晴れ渡り、互に見合す顔と顔、ハムは益々怒り、身の苦痛を打忘れて立ち上り、

「無禮者、懲して呉れむ、思ひ知れや」

と韋駄天走りに追駆け来る凄じさ。二人は心も心ならず一目散に木の葉散敷く山道を地響きさせて、トントントンと下り行く。

レーブは途々足拍子をととり乍ら唄ひ始めた。

「バラモン國に名も高き　　ハルナの都に現はれし

大黒主に仕へたる　　鬼熊別の部下となり

蜈蚣の姫や小絲姫　　君の御言を蒙りて

所在を探ぬる折柄に　　齋苑の館に程近き

河鹿峠に來て見れば 山の小路を傳ひ來る

母娘二人の巡禮姿 八ムの司は躍り立ち

今や吾々五人連れ 手柄現はす時來ぬと

手に唾して待ち居たり かくとは知らぬ母娘連れ

草鞋脚絆に身を固め 扮装も輕き蓑笠の

金剛杖にて地を叩き 降り來れる面白さ

母娘二人の巡禮は 谷間の景色を打眺め

千黄萬紅輝きし 錦の山を打眺め

感賞したる隙を見て 八ムの目配せ諸共に

木の葉の茂みをかき分けて 大手を擴げ衝つ立てば

母娘の巡禮は腹を立て 武者振りついた荒男

物をも云はず驚掴み 千尋の谷間に投げ棄てぬ

ヨセフ イールやハム三人 果敢なき姿を見るにつけ

張りきり居たる勇氣まで 何時の間にやら消滅し

臆病風おくびやつかぜに煽あふられて 命いのちあつての物種ものたねと

後あとをも見みずに逃にげて行ゆく 足あしを早はやめて七しち八はち丁ちやう

下しも手ての方かたに現あらはれて 激げき潭たん飛ひ沫まつの谷たに川かはに

藤ふぢ蔓づる傳つたひ下くだり立たち 又またもや川かはを遡さかのぼり

至いたりて見みれば此こは如い何かに 三み人たりは此こ處こに舞ま埃ごみの

中なかに棄すてられ身みも魂たまも 半はん死し半はん生しの其その刹せつ那な

救すくひやらむと兩りやう人にんが 谷たにの清しみづ水づを手てに掬すくひ

イール ヨセフに吞のませつつ 人じん工こう呼こ吸きふの介かい抱ほうに

暫しばし時ときをば移うつしける 死しんだと思おもうたハムの奴やつ

惡あく運うん強つよく生いきかへり 二ふた人たりを目め蒐がけて追おひ來きたる

こりや堪たまらぬと兩りやう人にんは 虎こ口こうを逃のがれし心こ地ちして

命いのちからがら逃にげて行ゆく 「ウントコ ドツコイ アイタツタ」

タールよ氣きをつけ石いしがある 此こ處こは大を蛇ろちの棲す處みかぞや

漸やうう谷たに川かは下くだり來きて 道みちの傍かたへへの古ふる祠ほこら

床下深く忍び込み 慄ひ居たりし折柄に  
 又もやハムがやつて来て 拳固をかためて追ひ来る  
 其勢ひに辟易し 二度吃驚の吾々は  
 體も宙に飛ぶ如く 此坂降る恐ろしさ  
 あゝ惟神々々 神が表に現はれて  
 善と悪とを立て別ける 此世を造りし神直日  
 心も廣き大直日 直日に見直し聞直し  
 宣り直しつづつ兩人が 身の過ちを許せかし  
 吾等の頭と仰ぎたる ハムに決死の勇あるも  
 神の力を現はして 言向和せ吾々が  
 身の災を拂ひませ あゝ惟神々々  
 御靈幸ひましませよ

と歌ひ乍ら細き谷道を下り行く。

タールは又歌ひ出す。

□ ガランダ國から現はれた

ガラクタ男のハム公が

チヨン猪口才な吾々を

追ひ驅けまはすは何の事

拔山蓋世の勇あるも

バラモン教にて鍛へたる

吾言靈の神力に

木の葉の風に散る如く

吹き散らさむかと思へども

やつぱり俺は弱い奴

□ コラ』と一聲云つたきり

頭の頂から足の尖

強き電氣に打たれし如く

ビリビリビリと震ひ出す

不思議な力を持った奴

強い奴にはドツと逃げ

弱い奴には攻めて行く

之が孫呉の兵法だ

抑軍の掛引は

三十六計ありと云へ

命を大事に逃げ出すが

一番利巧なやり方だ

何程神の道ぢやとて

命をとられちや堪らない



「ウントコ ドツコイ ドツコイシヨ」

レーブの足は遅いぞよ 愚圖々々してると追着いて

ハムの奴めが後から 俺の頭をポカポカと

鬼の蕨をふりあげて 打すが最後「ウントコシヨ」

ウンと一聲果敢なくも 此世の別れ死出の旅

こんなつまらぬ事はない こりやこりやもつと早う走れ

俺から先へ走らうか お前の様な足遅が

先へ行くのは物騒な せめて俺だけ一人なと

命を保たにやなるまいぞ 「ウントコ、ドツコイ辛氣やな」

耄祿爺の道連れは ほんに心が揉めるわい

それぞれ近寄る足音が ドンドンと聞えてる

「ウントコ ドツコイ こら違うた」 谷間を流るる水の音

さはさり乍ら吾々は 愚圖々々しては居られない

一方は谷川一方は 嶮しき山に囲まれし

喉首見た様な一筋道 木の葉の茂みがあるならば

一寸潜んで見たいけれど 生憎此處は禿山だ

此奴ア堪らぬ どうしようぞ 地獄の旅をする様な

怪態な心になつて来る 「アイタ、タツタ アイタツタ」

レ一ブ一寸待て俺や倒けた 擦り剥けよつた膝頭

タラタラ流れる赤い血が こんな處へ追ひついて

頭をポカポカやられたら おたまりこぼしは無い程に

こらこらレ一ブ一寸待て 友達甲斐のない男

友の難儀をふり棄てて 後白雲と走り行く

お前の薄情な其仕打 アーアー痛い足疼く

こんな事だと知つたなら 早く逃げたらよかつたに

二人の奴が助けたさ 恐ろし谷間に下り立つて

虻蜂とらずの惨い目に 遭うたるタールの苦しさよ

あゝ惟神々々 御靈幸ひましまして

レーブの足を留めるか  
ハムの脛腰拔かすなと

二つに一つの御願ひ  
何卒許して下さんせ

勝手の手とは知り乍ら  
九死一生の此場合

無理かは知らねど願ひます  
アーアー怖い恐ろしい

こんな處に倒れたら  
假令ハム奴が来なくても

虎狼が現はれて  
生命をとつて喰うだらう

思へば悲しき今の身の  
詮術もなき有様よ

絶望の淵に沈みたる  
タールの心を憐れみて

バラモン教の神様よ  
何卒お助け下さんせ

命からがら願ひます  
あゝ惟神々々

御靈幸ひましますよ  
』

と道傍に倒れ膝頭の關節を挫き、泣き聲となつて呻いてゐる。其處へ息せききつてやつて来たのはハムであつた。レーブは如何なりしと頭を上げて眺むれば、彼

は遠くも逃げ去つて三歳の童子の如く其姿の小さく見ゆる處まで禿山道を走つて居る。ハムの足音はドンドンと刻々に近寄り来る。

ハムは一生懸命坂道を降り来る。勢づいた降り道、俄に身の留めやうもなく細谷道に倒れたるタールの體をグサグサと踏越え、頭に躓き、勢あまつて二三間ばかり坂道の下に、投げつけられた様に打つ倒れ、これ又膝頭を擦り剥き「アイタ、アイタ」と云ひながら顔を顰め膝頭を撫でて居る。怒りに乗じて忘れて居た腰の痛みが又もや烈しくなつて来た。二人は坂道に八の字形に打倒れ、「アイタツタ、ウンウン」の言靈戰を惟神的に開始してゐる。岩も飛べよとばかり俄に吹き来る暴風に着物の裾を捲られ、ハム、タールの兩人は揃ひも揃うて太い黒い臀部を風に丸曝にしてゐる。無心の風は容赦なく吹き荒み、兩人の呻聲と相和してウーンと呻り立てて居る。風のまにまに聞こえる宣傳歌の聲にタール、ハムは耳をすませ、「こりや堪らぬ」と兩手を合せ一生懸命に祈つて居る。

(大正一一・一〇・二七 舊九・八 北村隆光録)

第一章 鼻摘〔一〇七六〕

バラモン國の天地を  
塞ぎて暗き妖雲を  
吹き拂ひつつ三五の  
神の教を敷ひるめ  
心も暗き大黒主を  
言向和し日月の  
光をてらす月の國  
照國別の宣傳使  
國公は路々宣傳歌  
從へ坂路下り來る  
歌ひ乍らに進むなり。

神が表に現はれて  
善と惡とを立別ける  
河鹿峠は其昔  
言依別の宣傳使

栗毛の馬に打乗りて

渡らせ玉ふ時もあれ

レコード破りの烈風に

吹きまくられて谷底に

陥り玉ひ天國を

探検したる舊蹟地

あゝ惟神々々

神の御靈の幸はひて

今吹來る烈風を

止めて吾等の一行を

月の都へ易々と

進ませ玉へ惟神

神の使の宣傳使

御供に仕ふる國公が

眞心こめて願ぎまつる

秋も漸く深くして

千黄萬紅綾錦

機を織りなす佐保姫の

姿もいとど美はしく

常世の春の「ドツコイシヨ」

秋の紅葉の如くなり

今吹く風は曲風か

但は尊き神風か

誠に危ない風の玉

ドンと計りにつき當り

もろくも空中滑走して

此谷底に陥らば

天國淨土の旅立が

出来るに定つてあるならば　チツとも恐れはせぬけれど

吾等の如き罪重き　身魂が如何して「ウントコシヨ

ドツコイ　ドツコイ　ドツコイシヨ」　ホンに危い坂路ぢや

根底の國に轉落し　八寒地獄に陥りて

萬劫末代苦みの　門を開くは知れた事

暫し此世に永らへて　神に對して功績を

少しは立てし後ならば　決して悔ゆる事はない

さはさり乍ら今の内　さやうな事があつたなら

どうして神の御前に　進み行く事出来やうか

あゝ惟神々々　此風とめて下さんせ

私は危うてたまらない　先に進みし黄金姫

清照姫は今頃は　何地を進み玉ふやら

定めて母娘お二人は　此難風になやまされ

尻をまくられスタスタと　赤い顔して居るだらう

今見るやうに思はれて  
そいつが第一氣にかかる

黄金姫は兔も角も  
清照姫のあの姿

案じすごさでおかれようか  
ホんに毒性な風ぢやなア

「ウントコドツコイ梅公よ」  
「ヤットコドツコイ照さまよ」

互に氣をつけ足元に  
風ばつかりぢやない程に

これ程キツイ坂路に  
尖つた石がムクムクと

頭を擡げてゐよるぞよ  
虎狼や獅子熊も

此烈風にあふられて  
谷間を這ひ出で行く路に

必ずしやがむで居るだらう  
ウツカリ相手に「ドツコイシヨ」

なつてはならぬぞ照梅よ  
モーシモーシ宣傳使

あなたも元は梅彦と  
世に謳はれし神司

四方八方の國々を  
おまはりなさつたお方なら

烈風豪雨に遭遇した  
其經驗はありませう

何卒話して下さんせ  
月の國にて臍の緒を



切つて此方こんな目に  
會うたる例しは荒男

強そに言つても腹の中  
胸はドキドキ早鐘を

つくよな思ひになりました  
これこれモーシ宣傳使

これ程私が頼むのに  
沈黙するとは胸欲な

何ほど沈黙したとても  
此烈風は易々と

容易に沈黙致すまい  
「ウントコドッコイ アイタゝゝ」

エーエー怪體の悪い事ぢや  
どうやら足許「ドッコイシヨ」

危うなつて來たわいな  
路の片方の古祠

此烈風に煽られて  
バラバラ バラバラ メチャメチャに

姿もとめず散り失せぬ  
神を祀つた祠さへ

これ程ムゴク散るものを  
梵天王の鎮まれる

國公さまの肉の宮  
これが散らずに居りませうか

ホんに思へば氣にかかる  
「ウントコドッコイ ドッコイシヨ」

アレアレ向うに人の影  
此奴も風にあふられて

斃くたばりよつてかメソメソと 泣ないたか泣なかぬかおれや知らぬ

八はちの字形じがたにふんのびて 黒くろいお尻しりをむき出し

ウンウン呻うめいてゐるやうだ 彼あ處こは何なんでも風玉かぜたまの

當あたる難所なんしよに違ちがひない 照國別てるくにわけの神司かむづかさ

一寸ちよつと一服いつぶくしませうか 鉢植はちうゑみたよな木きぢやけれど

ヤツパリ此奴こいつにや根ねがムる 此根このねをシツカリ捉つかまへて

四人よにんが互たがひに手てをつなぎ 科戸しなどの風かぜの災わざはひを

しばしのがれて休やすまうか あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはひましまして 照國別てるくにわけの宣傳使せんでんし

何卒なにとぞ一言國公ひとことくにこうに 休やすんで行ゆけよと「ドッコイシヨ」

言靈ことたま宣のらして下くださんせ 唾おしの旅行りよかうぢやあるまいし

沈黙ちんもくするにも程ほどがある 照國別てるくにわけの宣傳使せんでんし

レコード破やぶりの烈風れつぷうに 肝きもをつぶして胸むねをつめ

俄にはかに唾おしとなつたのか 「ウントコ ドッコイ ドッコイシヨ」

如何しても斯しても吾足は 膝がキヨクキヨク笑ひ出し

腰まで怪しくなつて来て 最早一步も進めない

「アイタ、タツタ アイタ、」 蜈蚣が足をかんだよな

キツイ痛みにはふりかへり 眺むる途端に尖り石

あつかましくも足の血を 甘そな顔して吸うてゐる

「ウントコ ドツコイ ドツコイシヨ」 同じ旅路をするならば

モウこれからは山路を よけて平らな大野原

草ふみ分けて進む方が 何程樂か分らない

急がばまはれと言ふ事を 子供の時から聞いてゐた

照國別も氣が利かぬ コレコレもうし宣傳使

何が不足でそんな顔 コレ程私が頼むのに

聞かぬふりしてスタスタと 坂路行くとは曲がない

こんな無慈悲な神司 照國別に導かれ

はるばる月の御國まで どうしてお供が出来やうか

わたくし  
私は前途が案じられ 悲しう苦しうなつて来た

かむながらかむながら  
あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

うた  
と歌ひ、烈風に煽られつつ下り行く。

さしもに烈しかりし山嵐はピタリとやんで、木々の騒ぎもおとなしく鎮まり返  
つた天地の光景、空は紺青に彩られ、地は一面の錦の野邊、天つ日の神は山の端  
にうすづき玉ひ、黄昏の氣、追々に迫り来る。どこともなしに響き来る鐘の聲、  
諸行無常と告げわたる。鳥は埒を求めて早くも棲處をさして歸るものの如く羽使  
ひ忙がしさうに西山の峰をさして、十羽二十羽三十羽と列を作つて翔り行く。照  
國別は初めて口を開き、

ア、國公さま、お前もこれで安心だらう。風も随分騒いだが、お前も中々負け  
ず劣らず騒いだねい。餘程怖かつたと見える、肝の小さい男だなア。人の心はす  
べて言行に現はれるものだ。モウ少し沈着の態度をとらないと、天下の宣傳使は  
到底駄目だらうよ

國公くにこう「滅相めつさうもない、私わたしはあの風かぜが自分等じぶんらの前途ぜんとを祝しゆくするかやうで、勇ましき氣き分ぶんが漂ただよひ愉快ゆくわいでたまらなかつたのです。死しんだか生いきたか知しれぬやうな閑寂かんじやくな秋あきの天地てんちを、亡者まつじやぜん然ぜんとトボトボと歩あるくのは餘あまり男をとこらしくありません。私わたしの騒さわいだのは所謂いはゆるちんちやく沈着ちんちやくの表徵へうちようです。靜中せいちゆうどう動どうありといふ筆法ひつぽふだから、それに付ついても照公てうこう、梅公うめこうの御兩人ごりやうにん眞青まつさをな顔かほをして、チウの聲こゑ一つヨウあげず、本當ほんたうに氣きの毒どくでたまらなかつたので、二人ふたりの恐怖心きようふしんを代表だいへうして一寸ちよつとあんな洒落しやれを言いつてみたのです。心こころから卑怯者ひけふものと思おもはれてはたまりませぬからなア。アツハ、ハ、ハ、ハ、と肩かたをゆすつて豪傑かうけつ笑わらひをしてみせる。

照國てうくに別わけは、

「マア何なんでもいい、元氣げんきでさへあれば大丈夫だいぢやうぶだ。決けつして悲觀ひくわんはせぬがよい。隨分ずぶん國公くにこうさまを初めはじめ二人ふたりは恐怖心きようふしんにかられてゐましたなア」

照公てうこう「ハイ仰あふせの通りとほ隨分ずぶん荒肝あらぎもをとられました」

梅公うめこう「私わたしも一寸ちよつと「おつ」な風かぜが吹ふきやがるなア……と思おもひながら、震ふるつてゐました。併しかし怖こはうて震ふるふのではあります。薄着うすぎの肌はだに吹ふきつける風かぜが寒さむいので、一ちよ

寸景物に震動してみたのです」

國公「アハ、何と負惜みの強い奴だなア。名が梅公丈あつて、ウメイ事を吐きやがる。モシモシ照國別さま、あこに二人、梅さまの様な豪傑が晝寢をしてゐるぢやありませんか。一つ起してやりませうか」

照國別「あれはどうやら怪我をしてゐるやうだ。オイ國公さま、お前に一任するから、鎮魂を施して助けてやりなさい。これが首途の功名手柄だ。そして照公、梅公の兩人は吾に従いて早く此山坂を下るのだ。此谷口に一寸した岩屋がある、そこで今宵を明かす事にする。國さま早く兩人を助けて、あとから来て下さい、吾々はお先へ失禮するから」

國公「モシ、そりやちと御了見が違はしませぬか、天下の宣傳使が道に倒れてゐる旅人を見すてて、冷淡至極にも私一人に介抱させようとは無慈悲にも程がある。ヘン馬鹿らしい、そんな事で宣傳使がつとまりますかい。ナア照公、梅公、さうぢやないか」

照公「ウンさうぢやない」

梅公「動中靜ありといふお前の役目だよ。それで日出別さまがお前もお供をして、道中【せい】（動中靜）と仰有つたのだ。ナア照公さま、大分に日も暗くなつて來たし、グツグツしてゐるとそこら中が暗くなつて來ちや、何程【くらく】（苦樂）不二でもやり切れないワ。何とマア蛙をブツけたやうによく斃ばつてゐる事わいのう」

國公「モシ、宣傳使様、一層のこと吾々四人が鎮魂を彼等に與へて、手早くここを切上げたら如何でせう」

照國別「宣傳使の言に二言はない。お前はあとに残つて旅人の介抱を命ずる。サア照、梅の兩人早く行かう」

と二人をつれて、ドシドシと坂路を下りゆく。あとに國公は呆然自失、爲す所を知らず、だんだんそこらが暗くなつて來る。二人の旅人は、半死半生の體で苦しむ聲が、ウンウンと聞えて來た。

國公はタールの側に立より、

「オイ旅人、ウンウンと何をきばつてゐるのだ。赤ん坊か何ぞのやうに寢乍らウ

ンコをたれる奴がどこにあるか」

と體を一寸撫でて見て、

「何とマア長い男だなア、ハハ―此奴あモウ駄目だ、九死一生だ。こんな男の命を助けて、娑婆で辛い苦勞をさすよりも一層の事一思ひにやつつけてやつた方が、俺も手間がいらす、當人もさぞ満足だらう。ウフ、フ、フ、」

「タール」モシモシ旅のお方、どうぞ私の命を助けて下さい」

「國公」ヤアお前はヤツパリ人間かなア」

「タール」殺生な、人間でなくて何としませう」

「國公」おれや又野狸が化けてゐやがるのかと早合點したから、殺してやると言つ

たのだ。人間さまと聞くからは助けにやおかれまい。（芝居口調）最前照國別殿

に別れて歸る暗まぎれ、山越す獅子に出會ひ、二つ玉にて撃とめ、近より見れば、

狸にはあらで旅の人、薬はないかと懷中を探りみれば、財布に入つたる此金、道

ならぬ事とは思へども、天の與へと押頂き、亡君の石塔料に使つてくれむ。コリ

「ヤ旅人の幽霊、金の所在をハツキリ申さぬか」



タール「モシモシ泥坊様、お金はここに幾らでも持つて居ります。命計りはお助け下さいませ。此通り膝頭を打くじき、身動きならぬ弱味をつけ込んで、金も命も取らうとは、餘り蟲がよすぎます」

國公「オイ旅人、泥坊ではないぞ。世界を助けまはる宣傳使……ではない、其お供だ。言はば宣傳使の卵だ。どうかして助けてやりたいは山々なれど、生憎此山は禿山で藥草はなし、谷水を吞ましてやりたいけれど、谷は深く、かう暗の帳がおりては、人を助ける所か、自分の命が危うなつて來た。どうぞ私を助けると思つて、そんな無理をいはずに早く去なしてくれ、此通り手を合はして、泥坊オツトドツコイ、こなさまが拜みます」

タール「アハ、何とマア面白いお方ですこと、私も最前の烈風に肝を潰した一刹那、一寸膝頭から血は出たけれど、俄に病氣が治り、こんな坂路位は屁でもないのだが、寝た序に日の暮にも近いから、此儘夜明かししようと思つてみたのだ。さうした所がお前さま等の一行が、面白相に歌を歌つて出て來るので、一寸なぶつてやらうと、半死半生人の眞似をしてみた。半鐘泥棒だよ。ウツフ、」

國公頭をかき乍ら、

「エーいまいましい、一杯くはされたか、今日に限って照國別さまが、なぜあんな無慈悲な事を吐かすのだろと、聊か憤慨してゐたが、流石照國別さまは偉いワ、ヤツパリおれの先生だ。チャツと此奴の狂言を見ぬかれた其天眼力は天晴なものだ。イヤもう感じ入りました」

タール「お前は三五教の宣傳使のお供をいたす三人の中でも一番よりぬきの、

【はね】代物だなア」

國公「コラ失禮な事をぬかすか。おれには親があるぞよ」

タール「アハ、、廣い世界に親のない者があらうか、たわけた事を言ふない」

國公「ヘン、ちとすまぬが、俺の親はチツと違ふのだ。國治立大神といふ親神が

あるのだ。それだから國公さまと言ふのだよ。オイ貴様の名は何といふか」

タール「俺の名かい。俺はタールさまだ」

國公「失禮な寝もつて挨拶をする奴があるかい、何でも酒くらひのやうなスタイルだと思つてゐたら、ヤツパリ名詮自稱タールとぬかす代物か、それでは親のな

いのも尤もだ。お前はバラモン教のケレ又だらう。タールといふやうな神さまはどこにあるか。大黒主の神を祖神にもつならば、黒といふ名が付き相なもののだのに、タールなどとは、チツと物ターランぢやないか、足がタールなつて、大方ここで平太ばつてゐやがるのだらう

タール「コリヤ國とやら、そんな劫託をほざくと罰があタールぞよ」

國公「エー此位ウソ氣味悪いのに化物然と洒落やがるない、チツと起きたら如何だい」

タール「ザワザワ騒いで立くらすのも一日なら、安樂に寝てくらすのも一日だ。

俺は俺の主義がある。道に平タール主義と申すのだよ」

國公「オイ俺もそこで一寸添寝をさしてくれないか。モウ斯うなつちや、一寸も歩けないぢやないか」

タール「ヨーシ、一緒に寝んねをさしてやる……ネンネンねんこの穴に蟹が這ひ込んだ。いたかゆかゆかゆ取つて呉れ。ヤツトの事で引ずり出したら、又這ひ込んだ。いたかゆかゆかゆとつて呉れ。……坊ヤのもりはどこへいた、

山をこえて里へいた、里の土産に何貰うた、ハルナの饅頭に笙の笛、ねんねんよ  
うねんねんよう、ねんねんコロリねんコロリ、年中コロリとねて居れば、こ  
れ程樂な事はない

國公「コリヤ洒落ない、おれや赤ん坊ぢやないぞ」

タール「お前は赤ん坊所かい、まだ卵ぢやないか、それだからコロリコロリと歌  
つたのぢやい、大人なら大人らしうお前に一つ注文がある。何と聞いてはくれま  
いかなア」

國公「齋苑の館に其人ありと聞えたる國治立命の名を賜はつた國公さまだ。何事  
なりと天地の間の事ならば叶へてつかはす。サア遠慮はいらぬ、ドシドシと申上  
げよ」

タール「ハ、ハ、ハ、何をぬかしやがるのだ。けたいな法螺吹だなア」  
國公「風でさへも大變に吹いたぢやないか。ホラ吹くの神様とはおれの事だ。何  
でも叶ふ事なら聞いてやる。併し乍ら今おれに金を一萬兩くれと云つても、ソリ  
ヤ一寸聞く事は出来ぬ。女房の代りになれといつても、それも叶はぬ。其外の事

ならば、一切萬事叶へてつかはす程に、其代りに一生火物斷ちを致せよ」  
タール「エー何でも良いワ。實の所は俺の仇が、ソレそこにウンウン唸つてゐやがるのだ。彼奴を殺さねば、俺が殺されるのだから、今の内に殺しておきたいのだが、折角横になつたのだから動くのが面倒臭いので、一時延ばしに延ばしてゐた所だ。オイそこな岩でも一つグツと抱へて、彼奴のドタマへドスンと當ててくれ。そしたらそれで此タールさまは至極安全、天下泰平、五穀成就だ」  
國公「アハ、何と氣樂な奴だなア、最前から所在が見えたけれど、モウ斯う暗くなつちや、足元も口クに見えないワ。夜が明けてから、ゆつくり俺が自ら神占をやつて、タールを殺すか、ハムを殺すか、どちらを殺さうかといふ事を伺つてみて、其上の事にしようかい。若しタールを殺せといふ【おみくじ】が出たら、氣の毒乍ら觀念してくれねば、なるまいぞ。アア今晚はかう言うて噪いでゐるが、明日の朝になつたらヒヨツとしたら俺の手にかかつて死ぬかと思へば、いささか以て氣の毒でも何でもないワイ。ウツフ、」  
タール「コラ馬鹿にすない。よい加減にからかつておけ」

國公くにこう「唐からが勝かつても印度いんどが勝かつても、そんな事ことにお構かまひがあるかい」

二人ふたりは何時いつの間まにか抱だついた儘まま、道みちの眞まん中なかでグツと寝ねて了しまつた。雷らいのやうな鼾いびき聲こゑが競争きやうまうて的に聞きえて來きた。ハムはニツコと笑わらつて起おき上あり四よつ這ばひになつて探さり寄より、二人ふたりの髪かみの毛けを固かたく結むすび合あはせ、息いきづか使つかひを考かんがへて、タールの鼻はなをむしれる程ほど捻ねぢた。タールは痛いたさに目めをさまし、

「イ、イツタイワイ、コラ國公くにこう、しやれた事ことをすな、人ひとの鼻はなを咬かみやがつて、何なんぞ蛸たこでも喰くらうてる夢ゆめを見みやがったのかな」

國公くにこうはウニヤ　ウニヤ　ウニヤと何事なにことか口くちの内うちにて言いひ乍ながら、又またもやグーグーと大鼾おほいびきをかく。

タール「ハハ、此こ奴夢いつゆめをみやがつて、おれの鼻はなを摘つまみやがったのだな、エ、仕方しかたがない、夢ゆめで爲した事ことを咎とがめる譯わけにも行いこまい。一いち樹じゆの蔭かげの雨宿あまやどり、一いち河がの流ながれを汲くむさへも深ふかい縁えにしと聞きくからは、よくよくの因縁いんねんだらう。見みず知しらずの旅人たびびと同士どうしが、雲天井くもてんじやうに石枕いしまくら、夫婦ふうふか何なんぞのやうに、抱だついて寝ねるのも、何なにかの因縁いんねんがなくてはなるまい。あゝモウ寝ねよう」

と獨言をいひ乍ら、早くもグーグーと鼻をかき出した。ハムは又もや手探りに國公の鼻をむしる程捻ぢた。

國公「イ、イターい、ハナハナハナ放せ放せ、放さぬか放さぬか」

ハムはあわてて手を放す。

國公「コラ、タール、俺を計略にかけやがつて、寝とる間に、鼻をねぢて殺さうとしよつたなア。待て待て鼻ねぢなら、俺も負はせぬぞ。アイタタ、メツタ矢鱈に人の髪の毛を引張りやがる。ヤイ、タール一寸髪の毛を放せ」

ハム「コリヤ國公、此タールを何と心得てゐるか、甘く計略にかけてやつたのだ。此髪の毛をグツと握り、鼻を捻ぢて殺してやるとの計略を知らないのか、餘程良頓馬だなア。ウツフ、フ、」

「何糞ツ」と國公は力一杯鼻と言はず、目といはず、爪立ててグツとかきむしつた。よく寝込んでゐたタールはビツクリして目をさまし、

「アイタ、コリヤ猿奴、おれの顔をかきやがつたな、オイ國公貴様も起きぬかい、猿が出やがつたぞ。ヤア俺の髪の毛を引張つてゐやがる」

國公「コラ、タール俺が知らぬかと思つて、頭の毛を引張つたり、鼻をやたらに捻ぢやがつて、おまけに俺を殺さうと企みやがつたなア、サアもう斯うなつた上は了見ならぬ」

と手を伸ばして、又タールの顔をかく。

タール「オイ國公、マア待て、此奴あチト可怪しいぞ」

ハム「オイ、タール、國さまの頭を無性矢鱈に引張りやがつて如何する積だ。コリヤ鞆丸を握りしめてやるか」

國公「ヤア、おれの代理をする奴が出来て來よつたぞ。いつの間にか副守護神奴が飛び出しやがつて、此方さまの意思に反した事を囀りやがるものだから、サツパリ事が面倒だ」

ハム「コリヤ國公、トボケない、そんな事を食ふタールぢやないぞ。タールの腕には肉があるぞ」

國公「コリヤ、タール、貴様の肉よりも俺の骨の方がチツと固いぞ。大人なぶりの骨なぶり、サア是からは鞆丸の掴み合だ。一イニウ三ツ、アイタツタ、コラ髪



の毛を放さぬかい」

ハム「アツハ、アツハ、阿呆奴が、オホ、臆病者奴、ウツフ、うろたへ者、エツへ、エタイの知れぬ化者にいらはれてゐる【うつ】け者、イツヒ、意地くね悪いハムさまの御出現、サアもう斯うなる上はタールを殺そか、國公をやつつけようか、明日の朝手製の神籤で伺つて見よう。もし、タールさま、お前を殺せと御みくじが出たら氣の毒乍ら、お前の命を取らねばならぬ。それを思へば、おれやモウ可哀相で、氣の毒でも何でもないワイ。ウツフ、」

國公「コリヤ俺の受賣をしやがる奴は、ダダ誰奴だい」

ハム「最前からここに寝てみたバラモン教のハムさまだ。これからタールをやつつけるのだから、國さま一つ加勢をしてくれないか」

國公「折角斯うして抱き付いて親しうなつたタールぢやもの、如何して之を殺すことが出来ようかい、おれやそんな事を聞くと、貴様が憎らしくなつて来て、腹が一寸も立たないワ。オツホ、」

斯かる所へ山の尾を登り来る満月の光、ハムは手早く兩人の髪をほどき、

「ヤア、タール、モウ許してやらう。以後はキツと慎んであの様な悪戯を致すでないぞ、そしてあのやうな水臭い事を思ふと、今度はモウ了見せぬからさう思へ。今日はこれきり忘れて遣はす」

タール「俺もお前がさう出れば、萬更憎いとは思はない、只今限り忘れタールから、マア安心致すがよからう。ナア國さま、餘り物をクニクニと苦にすると、病氣になつて、しまひにや國替をせなくてはなりませぬからなア」

國公「國替なぞと縁起の悪い事をいつてくれるない」

ハム「アツハ、ハ、ハ」

タール「イツヒ、ハ、ハ」

國公「ウツフ、ハ、ハ、サアもう夜があけた。行かうぢやないか」

と三人は兄弟の如く親しくなつて、無駄口を叩き乍ら坂路さして降り行く。

(大正一一・一〇・二七 舊九・八 松村眞澄録)

第一二章 種明志「一〇七七」

國公、ハム、タールの三人は夜明けと共に朝の空気を吸ひ乍ら、不思議な事より情意投合して兄弟の如くになり、道々無駄話をし乍ら、河鹿峠を下り行く。照國別の待つてゐるといふ岩窟に到り見れば、照國別一行の姿は見え、只二人の男が岩窟の小隅に小さくなつて震うて居た。ハムは無雑作に餘り廣からぬ岩窟に飛込み、よくよく調べ見ればイール、ヨセフの兩人であつた。

ハム「オイ、イール、ヨセフの亡者ぢやないか。何時の間にこんな所へふん迷うて來たのだ」

イール「ヤア、ハムさまか、ようマア無事で助かつてくれたなア。俺達二人も何が何だか、サツパリ合點がゆかぬのだ。實際現界か幽界か、如何考へてもハツキリせぬ。お前は何と思ふか」

ハム「確りせぬかい。ここは河鹿山麓の南口の岩窟の中だよ」

ヨセフ「さうするとヤツパリ生復つたのだなア。夜前ここ迄逃げて來て、スツ込

んで居ると、頭のわれるやうなキツイ聲で宣傳歌を歌つて、此岩窟の中へ這入らうとする三人の宣傳使があつた。こんな奴に這入られたら大變だと、二人が中から岩の戸に突張りをかい、力限りに押し居つたら、とうとう根負をして通り過ぎて了つた。それから今まで二人が岩戸を力限り押し居たのだが、どうやら宣傳使が遠く行つたやうな鹽梅だから、餘り息がこむるので、新しい空気を注入してゐた所だよ」

ハム「オイお前の救主が此處に二人も來てゐる、早く御禮を申さぬか、タールさまに國公さまだ」

ヨセフ「何、俺を助けてくれた救主は三五教の宣傳使一行四人だよ。タールの奴、男甲斐もない、母娘の巡禮に俺達がいなまれてゐるのを見捨て、逃げ出すといふ卑怯千萬な不親切漢だから、そんな事を言つても駄目だ。ヘン、大きに憚りさま、なあイール、貴様も知つてゐるだらう、三五教の照國別とか云ふ宣傳使に違ない。お前も其の記憶は確にあるだらう」

イール「確にさうだ。ここを通つた宣傳使もヤツパリ照國別さまに違ないが、餘

り神力しんりきが強いつよので、却かへつて俺おれの方がほうこはくなり、近ちかよりさへせねばよいと思おもうて此こ處ま迄で助たすけて貰もらうた宣せん傳でん使しにスツパ拔ぬきをくはして、潛ひそんで居をつたのだ。オイ、ハム、お前まへ如何どうして助たすかつたのだい」

ハム「俺おれは元もとから死しんでは居ゐなかつたのだ。きさま等ら二人ふたりが眞まさ砂ごの中なかに半はん身しんを埋うづめて目めをまはしてゐたのを俺おれはよく側そばに見みてゐた。併しかし如何どうしたものが足あし腰こしが立たたないの、三人さんにん一いつ緒しよに頭あたまを竝ならべて、時ときを待まつてゐた所ところ、レーブ、タールの兩人りやうにんが「うし」やがつて、俺おれの悪あく口こうを散さん々ざん吐ほざいた上うへ、此このハムさまを谷たに川がはへ水すい葬さうしようなどと善よからぬ事ことを吐ほきやがるものだから、おのれツと云いひさま、立たち上あがると、ここに居ゐるタールを初はじめレーブの奴やつ、雲くもを霞かすみと逃にげ失うせ、谷たに路みちにふん伸のびてゐやがつた。天てん罰ばつは恐おそろしいものだ。踏ふみ殺ころしてやらうと、思おもうたら又またも俺おれの腰こしが變へんになり、谷たに路みちに一いち蓮れん托たく生しやう的てきにふん伸のびてゐた所ところへ、照てる國くに別わけの宣せん傳でん使しが通とほりかかり、此この國くに公こうさまに介かい抱ほうを命めいじて、此この岩いは窟やま迄まで行ゆくと云いつて、スタスタと下くだられたが、貴きさ様さまが中なかから邪じや魔まをするものだから、とうとう行ゆかれて了しまつたのだよ。其その中なかの一ひとり人は此この國くに公こうさまだ。早はやく御おれい禮れいを申まをさぬか」

イール、ヨセフの兩人は嬉しさうな怖しさうな態度で、無暗に腰を屈め、頭を五六遍ペコペコ上げ下げし乍ら、

「モウ何にも申しませぬ、有難うムいます、どうぞ堪忍して下され」

國公「お前は妙な事を言ふ奴だ、命を助けてやつた宣傳使の玉子が如何してお前を苦めるものか、マア安心したがよからう」

イール「そんなら三五教の巡禮に御無禮した事を許してくれますか」

國公「三五教の巡禮とはどんな風をして居つたか、一寸耳よりだ。詳しく聞かしてくれ」

イール「婆アさまと娘と二人の巡禮だ。中々強い奴で、とうとうハムの大將迄谷底へとつて放られた位だから、手にも足にも合ふものぢやない」

國公はワザと口を尖らし、

「それは怪しからぬ、おれの母と女房とが一足先に、巡禮姿になつて此々を通つた筈だ。そんなら吾母と女房に對し、無禮を加へた奴だなア、さう聞く上は、モウ了見はならぬぞよ」

イー ル 『モシ國さま、私ばかりぢやムいませぬ。現に此處に居るハムの命令で、抵抗しました。ヨセフもタールもまだ外にレーブといふ奴、私は例外として都合、て五人、反動的行動を執つたのだから、どうぞハムから戒めてやつて下さい、私は何も彼も白状した褒美に命文は助けて下さい。其代り國様が鼻をかめと仰有つたら、鼻でも拭いて上げます。尻をふけと仰有つたら尻でも拭きます。アーンアーンアーン』

ハム 『アハ、ハ、ハ、ハ、惡の張本人は此ハムさまだ。コレ國さま、私から先へ成敗して下さい、部下の罪惡を一身に引受けるのは衆に將たるものの正に行ふべき道だ。サア早くお望み次第……』

とニコツと首をつき出し、早く首をとれと云はぬばかりにして居る。

國公 『ヨシヨシ首を取れば、取つてもやらう。併し乍ら今はの際に貴様等の素性を一々白状せよ。其上にて事と品によつたら許してやらぬ事もない』

ハムは惡びれたる色もなく、さも落着き拂つた態度で物語る。

天津御空を照りわたる

光も強き月の國

生れはデカタン高原の

南の端に青山を

四方にめぐらすガラダの  
チームス王の子と生れ

親の名をつぎ民草を  
安く治むる折もあれ

バラモン教の神司  
大黒主の手下なる

釘彦片彦兩人が  
何時の間にやら國內に

ひそみて國人悉く  
バラモン教に歸順させ

徒黨を組んで王城へ  
夜陰に乗じて迫りくる

其勢のすさまじさ  
妻子を初め家來共

雲を霞と逃げ散りて  
影も形も泣き寝入り

取残されたハム一人  
刃向ふ術もなきままに

命惜しさに降服し  
大黒主の御前に

引出されて已むを得ず  
先祖代々傳はりし

王の位を打棄てて  
フサの國へと追ひ出され



彼方あちら此方こちらをトボトボと　　さまよひ巡めぐり妻つまや子この  
 所在ありかを尋たづぬる折をりもあれ　　バラモン教けうの副棟梁ふくとつりやう  
 鬼熊別おにくまわけの神司かむつかさ　　タルの都みやこの手前てまへにて  
 思おもはず知しらず巡めぐり會あひ　　嚴きびしく素性すじやうを尋たづねられ  
 大黒主おほくろぬしの手下等てしたらに　　さいなまれたる物語ものがたり  
 申上まをしあぐれば鬼熊別おにくまわけの　　神かみの司つかさは涙なみだぐみ  
 妻さいし子を尋たづねてさまよふか　　お前まへは不憫ふびんな奴やつだのう  
 われも妻さいし子の行方ゆくへをば　　尋たづねて暮くらす身みの上うへぞ  
 お前まへの心こころは察さつし入いる　　大黒主おほくろぬしの大將たいしやうが  
 如何いかに言いふとも鬼熊別おにくまわけが　　甘うまく取とりなし助たすけむと  
 云いはれし時ときの嬉うれしさよ　　喜よろこび勇いさみ此このハムは  
 鬼熊別おにくまわけに從したがひて　　ハルナの都みやこに立向たちむかひ  
 拔擢はつてきされて部ぶ下かとなり　　蜈蚣むかでの姫ひめや小絲こいと姫ひめ  
 續つづいてハムが妻さいし子をば　　尋たづねむものと遠近をちこちを

朝あさな夕ゆふなにさまよひて  
ここまで来きたりし折をりもあれ

蜈蚣むかでの姫ひめによく似にたる  
母娘おやこの巡禮じゆんれいにめぐり會あひ

實じつを聞きかむと聲こゑ高たかに  
母娘おやこの巡禮じゆんれいに立向たちむかひ

つめかけ見みれば吾胸わがむねに  
グツとこたへた蜈蚣むかで姫ひめ

小絲こいとの姫ひめに違ちがひない  
秘密ひみつの洩もれむ恐おそろしさ

四人よにんの奴等やつらを追おひ散ちらし  
後あとに残のこりしハム一人ひとり

鬼熊おにくま別の命めい令れいを  
母娘おやこの方かたに傳つたへむと

思おもうた事ことも水みづの泡あわ  
取とつて放ほられた谷たにの底そこ

折角せつかく會あうた母おやと娘こに  
別わかれし事ことの殘念ざんねんさ

推量すゐりやうあれよ國くにさまよ  
私わたしは悪わるい者ものでない

素性すじやうをあかせば此この通とほり  
何卒なにとぞお許ゆるし願ねがひます

神かみが表おもてに現あらはれて  
心こころの善惡ぜんあく立別たてわける

此世このよを造つくりし大神おほかみの  
御靈みたま幸さちはふ國くにさまは

ハムの誠まことの心根こころねを  
詳くはしく悟さとり玉たまふらむ

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよみたまさち

と悠々と歌を以て答へた。

國公くにこう「さうするとハムさま、お前は鬼熊別さまの命令で、蜈蚣姫、小絲姫様の所  
在かを尋ねがてら、妻子さいしの行方ゆくへを探つてゐるのだな。ソリヤ感心だ。併し蜈蚣姫、  
小絲姫は決して三五教あななひけうの信者しんじゃでも宣傳使せんでんしでもない、併し母娘おやこ共に健全けんぜんにゐらせら  
れること丈だけは大丈夫だ。そして先さきにお前達まへたちを投げた母娘おやこの巡禮じゆんれいは、あれは黄金姫わうごんひめ、  
清照姫きよてるひめといふ立派りつぱな宣傳使せんでんしで、決してお前まへの言いふやうな方かたではないぞ」  
と意味いみありげに三人さんにんの前まへでワザとに言葉ことばを濁にごしてゐる。ハムは早くも國公くにこうの腹中ふくちゆう  
を悟りさと、ワザと空呆そらとぼけて、

「ア、さうでしたか、さう承うけたまはれば人相書にんさうがきに合あはない所ところが澤山たくさんあります。……才  
イ、タール外ほか二人ふたり、お前まへは如何どう思おもふか」

タール「俺おれは餘あまりの恐おそろしさで、婆ばアさまと娘位むすめくらゐの事ことは承知しようちしてゐるが、人相にんさうを  
檢あめるなんてそんな餘裕よゆうがあるものかい」

ハム「ヨセフ、ヨセフの兩人、貴様は如何思ふか」

ヨセフ「俺は言ふとすまぬが、鬼熊別さまの女房子に、あんな立派な方があらう

筈がないと思うてゐるのだ。あのお方の身魂は、すでにすでに都率天の月照彦の

神さまのお側で御用をしてゐる結構な神様の肉の宮だから……」

イール「俺もさう思ふ。何程蜈蚣姫様、小絲姫様が豪傑だと云つても、あんな力

が出る筈がない。又そんな力のある方なら、母娘の武勇は天下に鳴轟いてゐる筈

だからなア」

國公「そらさうだらう、あの母娘を蜈蚣姫小絲姫などと思ふのが、大變な的外れ

だ。それさへ分れば、最早あの母娘を追跡するのも無駄骨折だ。それよりもハム

さまの様に一つ素性を明かしたら如何だい」

イール「そんなら何も彼も棚卸しをしてお目にかかせう。私はデカタン高原の

サワラといふ小さい國の首陀の家に生れた者ですが、大黒主の部下なるテーグス

といふ宣傳使がやつて来て、片つ端から國人をバラモン教に引入れるので、ムカ

ついてたまらず、ウラル教の教理を眞向にふりかざし防ぎ戦うたけれど、遂に衆

寡敵せず、サワラの牢獄に投込まれ、百日百夜の責苦に會ひ、とうとう初心を翻してバラモン教に心の空から歸順して助けて貰つたのだ」

ハム「オイオイ、心の空からぢやなからう、底からぢやないか」

イール「ソラ底が底ぢや」

ハム「大方貴様は嘘使つてゐやがるのだろ」

イール「ソラそこに底もあり蓋もある、何と云つても長い者には巻かれ、強い者には従はねばならぬ現状だから、俺の肉體はバラモン教だ」

ハム「肉體はバラモン教で、精神はウラル教だな。何と都合の好い宣傳使だなア」

イール「ハムさま、お前だつてチヨボチヨボぢやないか」

ハム「人間の分際として人の心の奥底が如何して忖度出来るものか、如何なる法の力も武力も、壓制も思想上の強壓は到底出来ない。目に見えぬ世界の事だから、まして今の盲共の窺知すべき限りにあらずだ。そんな野暮な事を言ふものではないよ」

ヨセフ「つまり時の天下に従へといふ筆法だな」

イール「コリヤ、ヨセフ、貴様は信仰の土臺はどこにあるか」

ヨセフ「俺の本當の信仰は三五教だ。三五教は世界第一の優秀教だからなア」

イール「アハ、々、現金な奴だなア、三五教の國公さまの前だと思つて、甘く胡

麻をすりやがつたな。此胡麻摺坊主奴」

とピシヤリと横面を平手でなぐつた。

ヨセフ「コリヤ、三五教の信者に對して何と云ふ無禮な事を致すのだ。俺はモウ

斯うなつては包むに由なし、本當の事を教へてやらう。實の所は顯恩郷にましま

す太玉命の御家來に、其人ありと聞えたる三五教の宣傳使依彦さまとは俺の事だ

ぞ。バラモン教の内情を探るべく鬼熊別の部下となり、貴様等と一緒に交はつて

猫を被つてゐたのだ。本當に盲ばかりの寄合だと思つて、密にホクソ笑をして居

たのだ。ウフ、々、」

イール「コラ、ヨセフ、そんな嘘を云つても、辻つまが合はないぞ。三五教の宣

傳使が三五教の黄金姫に取つて放られるといふ、そんな矛盾がどこにあるか」

ヨセフ「そこは貴様等を詐る爲に、八百長で一寸放られて見たのだ」

イール「何と高價な八百長だのう。一つ違へば命がなくなる様な八百長は昔から聞いた事がない」

ヨセフ「さうだから三五教の宣傳使照國別さまがやつて来て命を助けてくれたぢやないか。要するに惟神の八百長だといふ事が今分つたのだ。アハ、ハ、ハ、」

イール「負惜みの強い事を吐すない。そんなら何故照國別さま一行を恐れてブルブル震ひ乍ら暗に紛れて逃げたり、岩戸を力一杯あけさせじと骨を折つたのだ」

ヨセフ「マアあつて過ぎた事を、さう細かく詮議するものぢやない。掃溜をほぜくるとしまひにや蚯蚓が出るぞ。ア、今日はマアよい天氣だな、一寸宣傳使様、

外へ出て御覽、連山黄金色に彩られ、まるで錦繪を見るやうですワ」

イール「コリヤ、ヨセフ、そんな所へ脱線しやがつて、急場をつくらはうと思つても駄目だぞ、ナア國公さま、本當に油斷のならぬ代物ばかりですな」

國公「どれもこれも打揃うて油斷のならぬ人物ばかりだ。併し今の世の中は世界中皆此通りだ。お前達は現世界の縮圖だから何れも立派な惡神の代表者だよ。ア

ハ、ハ、ハ、」

ハム「オイ、タールの奴、貴様も素性をここで明かさぬか、何だか物臭い代物だぞ」

タール「俺はお前達のような人種とは元來からして、種が違ふのだ。勿體なくも盤古神王様を尊敬遊ばすウラル彦ウラル姫様の御娘子、高宮姫様といふ別嬪さまの情夫だ」

ヨセフ「ヘン、甘い事を吐すない。ウラル教だと云へば、俺達が勝手を知らぬかと思つて、貴様のやうな「しやつ」面に、假令悪神の娘でも、あの有名だつた美人の高宮姫が惚れる道理があるかい。第一年が違ふぢやないか、高宮姫の十七八の花盛りには貴様はまだ此世へ生れて来て居らぬ筈だ」

タール「それは俺の親爺のことだ。俺の父は随分色男だつたよ。アーメニヤの都から、ウラル姫命の最愛の娘、高宮姫と手に手を取つて逐電し、或事情の爲に身をかくし、それから再びアーメニヤへ歸つて立派な女房を持つた其女房の名は香具耶姫と云つて、つまり俺の母親だ。父の名は香具耶彦といふ男だよ。コーカス山から北光神がやつて来て、言靈戦を開いたので、父子兄弟チリチリバラバラに



逃にげ失うせ、今いまでは親おやも分わからな、兄きやうだい弟だいも知しれないのだ。これこれが俺おれの詐いつはらざる素す性じやうだよ」

國くに公こうはタールの言葉ことばを聞きいて、雙もろて手を組くみ思し案あんにくれてゐたが、ツツと立たつてタールの首くびすぢ筋ぢを打うち眺ながめ、思おもはず知しらずアツと叫さけんだ。タールは此この叫さけび聲こゑに不ふ審しんを起おこし、

「モシ國くに公こうさま、何なんぞ私わたしに憑ひよう依いして居をりますかな」

國くに公こう「お前まへは若わかい時ときに春はる公こうとは言いはなんだか」

タール「ハイ、私わたしの名なは春はる公こうです。そして私わたしの兄あにはお前まへさまと同じおな名なのついた國くに公こうといひました。モウ生いきて居ゐるか死しんで居ゐるか、今いまにテてンと分わかりませぬ。何なに分ぶんエライ騒さわぎで、親おや子こが四し方ほうに逃にげ散ちつて了しまつたものだから……」

國くに公こう「免とも角かくこれからお前まへと兄きやうだい弟だいの様やうになつて仲なかよくしよう。オおイ皆みなの連れん中ちゆう、これから貴き様さま達たちは一切いっさいの障しやう壁へきを去さつて、俺おれと一いっ緒しょに三あな五な教ひけうの爲ために活くわ動どうしようぢやないか。キツと俺おれが照てる國くに別わけ様さまにお目めにかかつて、よよき様やうに取とり持もつてやるから」

一いち同どう「ハイ有あり難がたう、そんなら國くに公こうさま、宜よろしく頼たのみます」

國公くにこう「サア早く行かう、照國別様が途中で待ちあぐんでムるだらう」  
と言ひ乍ら、岩窟を後に四人を伴ひ、宣傳歌を歌ひ乍ら、崎嶇たる山路を足早に  
下り行く。

(大正一一・一〇・二八 舊九・九 松村眞澄録)

#### 第四篇 浮木の岩窟

#### 第一三章 浮木の森〔一〇七八〕

印度と波斯との國境

天地の神の御稜威をば

アフガニスタンの大原野 浮木ヶ原の森蔭に

佇む母娘の宣傳使 齋苑の館をたち出でて

ハルナの都に立ち向ふ その御姿ぞ雄々しけれ

秋野の木の葉色づきて 黄金姫や清照姫

神の命の御氣色 實に麗かに照妙の

さながら小春の如くなり。

母娘の宣傳使とは云はずと知れた黄金姫、清照姫である。清照姫は四方の風景

を眺め乍ら、

「お母さま、随分お足が疲れたでせう。河鹿峠で悪漢に出會つてから最早十日ば

かり山坂を無難に此處まで参りました。これも全く神様の御守護の厚き所以で御

座いませう」

黄金姫「私は何と云つても年をとつた丈世の中の辛酸を嘗め盡して居るから別に

何とも……これ位の旅行は苦にもならぬが、年若きそなたは随分苦痛を感じたで

あらう。早くお父さまに會はして上げ度いは胸一杯だが、肝腎要の信仰を異にし  
て居るのだから思想上から云へば矢張敵味方の仲、三五教の教には天ヶ下には他  
人もなければ鬼もない、何れも尊き神の御子ぢやと教へられてある、けれどもバ  
ラモンの教はさう廣く道理が判つてゐないのだから折角親子の對面をした所で其  
結果は如何なるやら判つたものぢやない。これを思へば嬉しいやら悲しいやらテ  
ンと心が落ち着きませぬ』

清照姫 『お母さま、決してそんな心配は要りませぬ。三五教の仁慈無限の言葉を  
以て如何なる鬼大蛇曲神も言向和さねばならぬ吾々の天職、況して血を分けた親  
子夫婦、如何に頑強な父上ぢやとて、吾等母娘が熱心に誠を以て説きつければ、  
屹度改心して下さるでせう』

黄金姫 『お前も一つ島のクエーンと迄なつた丈の腕前を持つて居るのだから大丈  
夫とは思へども、此思想上の問題ばかりはさう易々と動かせるものではない。何  
は免もあれ神様にお願ひ申して一時も早く夫の館に到着し、御神力を以て天地の  
眞理をお話し申上げ、惡逆無道のバラモン教を脱退……否々改良せなくてはなり

ませぬが、これこそ私にとつては非常に重大な任務だ。神素盞鳴大神様の御心は實に寛仁大度、いやもう有難うて、涙がこぼれます。鬼熊別の妻たり、娘たる吾等を見込んで此大任を仰せつけられた其襟度の廣い事、到底凡神の企て及ぶ所でない。ここ迄良く人を信じ玉ふ其御心に對しても、假令吾等母娘が如何なる運命に陥るとも此大神の御心は背く事は出来ませぬ。清照姫「左様で御座います。たとへ父上様がお怒り遊ばしてお母さまと私をお殺し遊ばしても、決してバラモン教へ歸順する事は出来ませぬ。お母さまも其御決心で御座いませうなあ。」黄金姫「それは勿論のことだ。仁慈無限の大神様の仰せには背かれぬ。どこ迄も誠一つを立てぬかねばなりません。」

斯く話す折しも、馬に跨がり數十人の部下を率ゐて、浮木ヶ原の寶の森を目覓けて進み來るバラモン教の宣傳使があつた。矢庭に馬を飛び下り同勢を引つれ、二人が休息せる前に堂々と進み來り眼を怒らして、

「此方はバラモン教の大黒主様の御家來大足別と云ふ宣傳使だ。レーブの注進に

依て汝等母娘を召捕らむ爲め部下を引率れここに立向うたり。サア尋常に手を廻せよ」

と大音聲に突立ち乍ら呶鳴つて居る。瞬く間に數十人の部下は母娘の周囲を満月の形に取り圍んで了つた。清照姫は笠を脱ぎ棄て花の如き顔をさらし乍ら、  
「妾は三五教の宣傳使、心も清く照り渡る清照姫であるぞよ。これなるは清照姫の母、黄金世界を建設する大任を帯び給ふ黄金姫だ。汝大足別とやら其氣張り様は何事だ。も少し肩を削り腰を屈めおだやかに掛合つては如何だ。頭抑へに女と侮つて抑へつけようと致すのはバラモン教の教理ではあるまい。少しは心得たがよからうぞ」

大足別「此者こそは纖弱き女の分際として強力無雙の曲者、レーブの注進によつて何も彼も手にとる如く判つてゐる。到底一筋縄では行かぬ母娘の巡禮と化けたる三五教の宣傳使、搦め捕つてハルナの都へ立歸り、大黒主の神様に御褒美の詞を頂戴せむ。者共かかれ」  
と下知すれば「オー」と應へて四方より母娘を目蒐けて十手を打振り打振り攻め

かくる。母娘は「心得たり」と金剛杖を水車の如くに空気を鳴動させ乍ら防ぎ戦ふ勢に、何れも辟易し、遠巻に巻き乍ら「あれよあれよ」と口々に叫ぶのみ。大足別は劫を煮やし、

「えー、言ひ甲斐なき味方の小童子共、御供にも足らぬ蠅蟲奴等、控へ居れ」

と唝鳴りつけ長劍をスラリと引ぬき、母娘に向つて斬りかくるを、二人は笠を以

て右に左に受けとめ、かい潜り隙を狙つて清照姫は敵の足を杖の先にて力限りに

打たたけば何條以て堪るべき、大足別はアツと叫んで其場に顛倒し目をぱちつか

せ呻きある。數多の手下共は此態を眺めて「素破一大事」と命を的に武者振りつ

く。此方は名うての勇者、一人も残らず息の根を止めて呉れむは易けれど神に仕

ふる身の上、假令蟲族一匹でも殺すと云ふ譯には行かないので、何れも金剛杖の

先にて猫が蛇にじやれる様な態度でチヨイチヨイと扱つて居る。かかる所へ四五

人の部下の注進によつて武装を整へたるバラモン教の軍勢、鋭利なる鎗を日光に

閃かし乍ら幾百千とも限りなく轡を並べて攻め來り、二人の母娘を十重二十重に

取圍み、四方八方より鎗にて突きかけ來る物凄さ、流石の母娘も衆寡敵せず、も

う此上は天則を破り寄せ來る武士を片端から打殺して呉れむと覺悟を極めし折柄に天地も揺ぐばかりの呻り聲、森の木蔭より忽然として現はれ來れる數十頭の狼は敵の集團に向つて目を怒らせ大口を開いて驀地に襲撃する。其早業にエール將軍は部下を纏めて雲を霞と逃げ散つたり。此時打倒れたる大足別の肉體も運び去られて敵の影だにも見えなくなつてゐた。

二人はハツと息をつき、森の木の間より湧き出づる清水を掬ひて咽を濕してゐた。

數十の狼は敵を四方に追ひ散らし、頭を下げ尾を垂らし乍ら謹慎の態度を装ひつつ母娘が前に現はれ、二列となつて『ウー』と一聲呻ると共に煙の如く消え失せて了つた。

森の彼方より何人とも知れぬ涼しき聲の宣傳歌が聞えて來た。

☞ 神が表に現はれて 善と惡とを立別ける  
三五教の神の道 吾等は神の子神の宮



とは云ひ乍ら人の身の  
いかでか神を審かむや

神は尚更世の人の  
善悪正邪が分らうか

身魂の因縁性來を  
立別けむとする醜司

彼方此方に現はれて  
誠の道を蹂躪し

世を常暗と汚し行く  
あゝ惟神々々

神の御靈の幸ひて  
三五教は云ふも更

バラモン教やウラル教  
教の道に仕へたる

神の司を悉く  
魂の御柱建て直し

五六七の御世を永久に  
たてさせ玉へ惟神

神に仕ふる國公が  
慎み敬ひ願ぎ奉る。

照國別に從ひて

齋苑の館を出でしより

夜を日に次いで河鹿山 西の峠に差しかかり

不思議な事よりバラモンの 道に仕ふる神司

イール、ヨセフの兩人が 命を救ひ助けつつ

照國別や梅照の 後に從ひ來る折

坂の此方に倒れたる 二人の男を救へよと

命令しながら出でて行く 後に残りし國公は

二人の男を救はむと 立寄り見れば此は如何に

ガラダ國のハム初め 香具耶の彦の子と生れし

タールの二人の物語 神の仕組と喜びて

互に心を打明かし 三五教に歸順させ

ここまで進み來りけり あゝ惟神々々

尊き神が現はれて 善神邪神を立別ける

互の身魂の因縁を 神のまにまに説き諭し

救はせ玉ひし有難さ 尊き神の御威光を

アフガニスタンの高原地  
浮木ヶ原の此森に

俄に聞ゆる鬨の聲  
唯事ならじと一行が

駒を早めてシトシトと  
ここ迄進み来て見れば

さも騒がしき鬨の聲  
今は松吹く風となり

四邊に人の影もなし  
あゝ惟神々々

神の息吹に退はれて  
荒振る神は逸早く

逃げ失せたるかいぶかしや  
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも  
假令大地は沈むとも

悪魔の猛びは強くとも  
三五教に仕へたる

誠を守るわれわれに  
刃向ふ敵はあるべきぞ

吾等は正しき神の御子  
尊き神の生れませる

珍の宮居ぞ何者か  
恐るる事のあるべきや

進めよ進め、いざ進め  
浮木の森の麓まで

あゝ惟神々々  
御靈幸ひましませよ

と歌ひ乍ら母娘の憩ふとは夢にも知らず駒を早めて進み來る。

國公は駒をとどめてツカツカと二人の前に現はれ、

「ヤア、貴方は」

黄金「シー」

國公「黄金姫様、もはやお隠しには及びませぬ。此處へ参りましたタール、ハム、

イール、ヨセフの四人は全く三五教に心の底より歸順致しました善人で御座いま

すから、何卒可愛がつてやつて下さいませ。重々の御無禮は私が代つてお詫び致

しますから何卒御許しを願ひます」

黄金姫「そなたは照國別のお供に仕へた國公さまぢやないか。照國別様は如何な

つたのだ。心もとなし、早く其お所在を知らしてお呉れ」

國公「實の所はタール、ハムの兩人、河鹿峠の山道に負傷を致し倒れて居たので、

照國別の宣傳使は此國公に介抱を命じおき、サツサと先に立つて行かれました。

それより群がる野馬を引捉へ吾々一行五人照國別様のお後を追かけて此處まで参

りましたが、まだお行衛が判らず、ヒヨツとしたら私達が先になつたかも知れま

せぬ」

黄金姫「一足先へ出た妾でさへも、まだここ迄到着した所だから、屹度後からおいでになるのだらう。清春山の岩窟にバラモン教の悪神共が立籠り國人を悩ますとの噂があるから、大方照國別の宣傳使はそこへ御出になつたのだらうよ」

國公「これから私は貴方様母娘のお供をしてハルナの都まで参りませう、何卒お許し下さるまいか」

黄金姫「ウン」

清照姫「國公さま、そんな勝手な事は出来ませぬ。吾々母娘は供をも許されず、神様の深き思召あつてお使に参る者、其方は照國別様のお供に仕ふるものだ。他人の供人を横取りにしたと云はれては神様に申譯たらず、又宣傳使の吾々として義務が立たない。サア早く國公さま、清春山の岩窟に引返し照國別様の危難をお救ひなされ、決して吾々母娘の後へついて来る事はなりませんぞえ」

國公「照國別の宣傳使は二人の男をお伴れ遊ばします以上は、國公一人居なくて大丈夫でせう。何を云つても貴方は女の二人連れ、魔神の猛び狂ふ此の荒野ケ

原をお渡りなさるのは、何とはなしに案じられてなりませぬ。照國別様が私を後に残して行かれたのは貴方のお供をせよとの謎であつたかとも考へられます。何卒タルの港までなりとお供をさせて下さいませ」

清照姫「折角の御親切なれどもこればかりは平にお断り致します」

黄金姫「國公さまの誠心は有難く受けます。然し乍ら前申した通り私のお供は許しませぬ。一時も早く清春山の岩窟へお越しなされ、照國別様は敵の計略にかかつて大變危い所でムいますぞ。今私の靈眼に映じました。時おくれれば一大事、僅かに十里ばかりの道程、早く引返しなされよ」

と云ひ乍ら母娘二人は國公一行を振棄てて荒野ヶ原をイソイソと足早に進み行く。國公はハム、イール、ヨセフ、タールの四人を従へ駒の頭を竝べて元來し道を一目散に清春山の岩窟さして進み行く。野路を渉る秋風は中空に笛を吹き乍ら遠慮會釋もなく森の梢を渡り行く。

(大正一一・一〇・二八 舊九・九 北村隆光録)

第一四章 清春山（一〇七九）

フサと月との國境に屹山せる半禿山の山奥に大岩窟を構へて、バラモン教を開設し、一方無暗に地方民の生産物を暴力を以て奉納せしめ、驕慢日に募り怨嗟の聲は地上に充ちてゐる。バラモン教の宣傳使は清春山の部下に限り、左手にコーランを持ち右手に劍を携へて無理往生に信仰を強要しつつあつた。

照國別は照公、梅公の兩人と共に、河鹿峠を難なく打越え清春山の山麓にさしかかる時しもあれや、俄に谷底に聞える女の叫び聲に一同立止まり暫し首を傾けてゐた。叫び聲は益々烈しくなつて來た。只事ならじと照國別一行は悲鳴を尋ねて谷底に近寄り見れば、大の男四五人、女を後手に縛り打擲してゐる。人を助くる宣傳使、これが見すておかれやうかと、宣傳歌を歌ひ乍ら其場に間近くかけつけた。五人の荒男は三人の姿を見るより、あわてふためき、女をそこに殘して、チリチリバラバラに思ひ思ひの方へ逃げて行く。照國別は女の側近く立寄り、吾々は三五教の宣傳使、此街道を通る折しも、俄に女の叫び聲、コリヤ何事か

惨劇が演ぜられてゐるのであらう、何は免もあれ助けねばなるまいとここ迄尋ねて来たもの、最早吾々が現はれた以上は大丈夫だから、御安心なされよ」と親切に勞はれば、女は目をしばたき、

「ハイ、有難うムいます、ようマア危急存亡の場合をお助け下さいました。これと云ふのも全く神様のお助けでムいませう。何を隠しませう、妾は三五教の信者、兄の行方を尋ねて巡禮する者、女の一人旅、ここ迄参りますとバラモン教の連中に取巻かれ、高手小手に縛められ、無體の要求に立腹の餘り、口を極めて罵つてやりました所、五人の男は大に怒り殺してくれむと四方八方より、刀の鞘にて體一面所かまはず、突いて突いて突きまはし、苦痛に堪へかね、卑怯にも悲鳴を上げた所でムいます。よくマアお助け下さいました」

照國別「それは危い事、マアマア安心なさい。オイ、照公、梅公、此婦人の縛を解け」

「ハイ」と答へて兩人は手早く縛をとぎにかかった。照公「何とマア惨酷な縛りやうだ。藤蔓で肉にくひ入る様に縛つてゐやがる」



と言ひ乍ら守刀をスラリと引ぬき、蔓を切り放し、女を漸くにして縛よりとき放つた。

女「おかげで安心致しました。あなたは三五教の宣傳使様、私はコーカス山に参り或動機より三五教の信者になつた者でムいます。私の兄は梅彦といつて盤古神王様の教を傳ふべく、龍宮の一つ島へ参つたきり、今に行方が判りませぬ。父母はそれを苦にして最早世を去り、後に残つた妾は只一人、家にゐる事も出来ず、噂に聞けば、三五教の宣傳使に梅彦といふ方があると承り、コーカス山に元は信者と化け込んで様子を探る折しも、いつとはなしに三五の教理が有難くなり、とうとう誠の信者となつて了ひました。承はれば兄の梅彦は自轉倒島とやらへ宣傳使となつて参つたと云ふこと、そして日出別の神様のお弟子になつた事まで承はり、齋苑の館の日出別様にお目にかかり、兄の所在を尋ねむと、アーメニヤを後にはるばる此處まで参る途中に、悪者に出會つてかかる憂目に會つた所でムいます。此近くには清春山といふ高山があつて、其山奥に大足別といふ悪神の大將が巢窟を構へて居ります。其部下共に捉へられ、大足別の女房になれよとの無體

の要求に腹を立てこんな憂目に會うてゐた所、よくマア助けて下さいました。たつた一人の兄妹を尋ねて參る憐れな女でゝいます。あなた様も三五教の宣傳使と承はりましたが、梅彦の所在は御存じではゝいませぬか」

照公「ヤア其梅彦とやら梅公とやら云ふ男は此處にザツと一對居られますよ」  
女「エ、それは本當でゝいますか」

照公「梅公といふのは此男、照國別の宣傳使は今迄梅彦さまと言つてゐました。ナアもし宣傳使様、あなたは何時やら、一人の妹があると仰有つたやうに覺えて居ります。ヨモヤ此お方ではありますまいか、三日月眉毛にクルリとした目の具合、よく似て居りますで」

梅公「ホンにホンに似たりや似たりや、瓜二つだ。何と云つても照國別様の妹に違ない」

照國別は默然として女の顔をマジマジと眺めてゐる。女も亦宣傳使の顔を穴のあく程首をかたげ乍ら見つめてゐた。暫くあつて女は思ひ切つた様に、  
「あなたは兄上ぢやゝいませぬか、お懐かしう存じます」

照國別「お前の幼名は何と云つたか」

「ハイ私の幼名は菖蒲と申しました」

照國別「そんなら擬ふ方なき吾妹、ようマア無事でめてくれた。併し乍ら海山の御恩深き御兩親は、此梅彦の事を苦にやんでお國替なさつたか、ア、残念やなア。如何して兩親に申譯が立たうか、餘り神様のお道に一生懸命になつて今迄兩親の事や妹の事を忘れてゐた。妹、どうぞ許してくれ」

菖蒲「勿體ない兄上様、許すも許さぬもムいませぬ、斯うなる上は最前申しました事は取消します。實の處は吾々の兩親は清春山の岩窟に捕はれて居るさうでムいます。要するに私を女房にくれよと、バラモン教の大足別が幾度となく使を遣はしましたなれども、教理が違ふので、兩親はやらぬと申しますなり、私も兄上に巡り會うた上でなければ、返答は出来ないと申してゐましたら、何時の間にやら、私の山に行つてゐる不在中に、兩親をかつさらへて、清春山の岩窟に立歸り、私に女房になるならば、兩親の命を助けてやらう、さなくば兩親を殺して了うとの惡虐無道の掛合、兩親も最早三五教の信者となつた以上は、何程苦しき責苦に

會うても、バラモン教には降伏せないと頑張つて居りましたから、さぞ今頃は惡神の爲に苦んでゐる事だせう。私は心も心ならず、何とかして兄上の所在を尋ね兄妹力を合せて兩親を救ひ出さむと、齋苑の館へ進む途中でムいました。とワツと許りに聲をあげて泣き倒れる其憐れさ。照國別は吐息をつき乍ら落涙に沈んでゐる。

照公「ヤア菖蒲様、あなたの今のお話で、何もかもハツキリ致しました。サアこれから宣傳使様のお供して、清春山の征伐に向ひませう」

照國別「神素盞鳴大神より大切な使命を受け乍ら、如何に兩親の危難を救ふとは云へ、使命も果さずに、そんな私上の事は致されまい、ハテ困つたことだなア。兩親を救はむとすれば、大神の使命が遅れる、神の命に従はむとすれば兩親の身の上はいかに成行くかも計られない。ハテ困つた事が出来たワイ」

梅公「モシ宣傳使様、何程御神命なればとて、途中に惡者のために虐まれてゐる者があれば、これを見のがして行く事は出来ずまい。却て世界を救ふ宣傳使の職務に反するものでムいませう。谷底の叫び聲を尋ねて、ここへ道寄りしたも同

じ事、そんな斟酌は決していりませう、サア早く清春山征伐に参りませう」

照國別「お前のいふのも一應尤もだ。そんならすまぬ事乍ら、兩親の危難を救ふ

事に致さう」

菖蒲「兄上様、有難うムいます。そんなら私が先導に立ちます。最早之から三里

ばかり奥まで行けばそこが敵の岩窟否御兩親の捉はれ場所、かういふ内にも心が

急ぎます。サア早く行つて下さい」

照國別「そんなら照さま、梅さま、御苦勞だが一緒に來てくれるか」

兩人「ハイあなたのお供だもの、どこへでも参ります」

照國別は二人の言葉に勢を得、一行四人山奥の岩窟さして、天津祝詞をひそか

に奏上し乍ら尋ね行く。菖蒲は道々歌ふ。

「神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

世の過は宣り直せ

此御教は三五の

尊き神の御託宣

とは云ひ乍ら兩親を

悪魔の司に奪はれて

どうして見直し聞き直し

宣り直す事が出来ようか

山より高き父の恩

海より深き母の恩

報い返さしておくべきか

神は吾等と共にあり

三五教の宣傳使

照國別とはわが兄と

分りし時の嬉しさよ

曲津の神は多くとも

悪魔の猛びは強くとも

いかでか恐れむ三五の

誠一つの神司

仁義の軍に如何にして

刃向ふ術のあるべきぞ

照國別を初めとし

照さま梅さま菖蒲まで

心を合せ力をば

一つになして進むなら

大足別の醜神が

何程手下は多くとも

旭に露の消ゆる如

亡び行かむは目のあたり

あゝ惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はひましまして

曲津の神に苦みしまがつ かみ くるし 父と母との生命をちち はは せいめい

救はせ玉へ惟神すく たま かむながら 神の御前に願ぎまつるかみ みまへ ね

旭は照るとも曇るともあさひ て くも 月は盈つとも虧くるともつき み つか

假令大地は沈むともたとへ だいち しづ 三五教に仕へたるあななひけう つか

女心の一すぢにをんなごころ ひと 岩をも射ぬく吾覺悟いは い わが かくご

言向和さでおくべきかことむけやは 照國別の神司てるくにわけ かむづかさ

神の力をうけ玉ひかみ ちから たま 今は立派な宣傳使いま りつぱ せんでんし

其風采も何とやらそのふうさい なん 高尚優美に變りましかうじやういっぴ かは

昔の面影どこへやらむかし おもかげ 英雄君子の御姿とえいゆうくんし みすがた

ならせ玉ひし尊さよたま たふと あゝ惟神々々かむながらかむながら

思ひの晴るる今や時おも は いま とき 花さく春の至る時はな はる いた とき

ア、勇ましや勇ましやいさ いさ 大足別は強くともおほだるわけ つよ

神の力に如かざらむかみ ちから し 青春山は高くともきよはるやま たか

此谷路はさかしとも このたにみち なぞや恐れむ三五の あななひ

誠一つの言靈に まことひとことたま 言向和しバラモンの ことむけやは

砦にひそむ醜神を とりいでしこがみ まつろへ和さでおくべきか やは

あゝ惟神々々 かむながらかむながら 御靈幸はひましませよ みたまさち

と歌ひ乍ら登り行く。 うたながのぼ 梅公は後より歌ふ。 うめこううしろ

三五教の宣傳使 あななひけうせんでんし 照國別に從ひて てるくにわけしたが

河鹿峠を打わたり かしかたうげうち いろいろ雑多と面白き ざつたおもしろ

景色をながめ来てみれば けしき 千尋の谷間に「ウントコシヨ ちひろたにま

ヤットコドツコイきつい坂」 さが グヅグヅしてゐちや危いぞ あぶな

キヤツと一聲「ウントコシヨ ひとこゑ けたたましくもドツコイシヨ」

女の叫び聲がする をんなさけこゑ 照國別に從ひて てるくにわけしたが

聲を尋ねて来てみれば こゑたづ 思ひもよらぬ菖蒲さま おもあやめ



兄妹名乗りをあげ乍ら

二人の親の御難儀を

救はむ爲と勇みたち

此山坂を上り行く

其いでたちの勇ましさ

「ウントコドツコイ、ハーハーハー」

本當にきつい坂路ぢや

コレコレまうし菖蒲さま

足元用心なされませ

ここには蛇や蜈蚣めが

澤山路に横たはり

手具脛引いて待つてゐる

此奴も矢張りバラモンの

大足別の醜魂

蛇や蜈蚣となりかはり

害を加へて「ドツコイシヨ」

困らしやらむと待つのだろ

蟲一匹と言うたとて

決して油断はなりませぬ

「ウントコドツコイドツコイシヨ」

これ程きつい山路を

越えて行かねばならぬよな

山奥深き岩窟に

潜んでゐる奴あ「ドツコイシヨ」

口クな奴ではあるまいに

本當に力があるならば

正々堂々と廣原に

館を構へてゐるだらう

獣も口に通へない 此谷路のドン奥に

鳥なき里の蝙蝠を 氣取つてみやがる馬鹿神は

どうで弱蟲腰抜の 張本人に違ひない

脾肉の歎にたへかぬる 梅公さまが只一人

あつたら「ドッコイドッコイシヨ」 バラモン教の奴原を

片つ端からなで切りに するのは手間暇いらね共

ヤツパリ一人は危いと 直日に見直し宣直し

四人一度に上り行く 力が餘りて仕様がな

千引の岩もて鶏の 玉子をわるより易からう

あゝ面白い面白い 青春山はまだ來ぬか

何をグツグツしてゐるぞ アタ邪魔臭い邪魔臭い

ヤツパリ俺が「てく」らねば 山はどうしても動かない

「ウントコドッコイドッコイシヨ」 向ふに見ゆる黒煙

どうやらあこが岩窟だ さぞ今頃は御兩親

われ等の到るを待ちかねて  
ムるであらう「ドツコイシヨ」

悪のみたまの年のあき  
いよいよこれから正念場

進めや進めいざ進め  
照國別や菖蒲さま

照公さまも潔く  
駒に鞭打ち進みませ

それぞれそこに高い石  
遠慮會釋も「ドツコイシヨ」

知らぬ顔して立つてゐる  
一時も早く岩窟に

進んで曲津の首をば  
片つ端から切りおとし

勝鬨あげて三五の  
教を照らし世の人の

悩みを救ひ助くべし  
あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして  
われ等一行四人づれ

神の御爲世の爲に  
雄々しき功績をたてぬいて

二人の親の生命を  
救ひて月の都まで

進ませ玉へ大神の  
御前に慎みねぎまつる

と歌うたひ乍ながら、勢いきほひよく秋風あきかぜに吹ふかれつつ谷間たにまを登のぼり行く。

（大正一一・一〇・二八 舊九・九 松村眞澄録）

第一五章 燒糞やけくそ（一〇八〇）

梵天王ほんてんわうの自在天じざいてん バラモン國こくに名なも高たかき

ハルナの都みやこに現あらはれし 大黒主おほくろぬしの片腕かたうでと

選えらまれぬたる神司かむづかさ 大足別おほだるわけはフサの國くに

印度ツキの御國みくにの國境くにさかひ 青春山きよはるやまの岩窟がんくつに

數多あまたの部下ぶかを呼よび集つどへ 暴威ばうゐを振ふるふ其内そのうちに

三五教あななひけうの神司かむづかさ 照國別てるくにわけの妹いもとなる

菖蒲あやめの方かたに目めをくれて 朝あさな夕ゆふなに諸人もろびとを

彼が館に遣はしつ 千言萬語を費して

口説けど説けど磐石の 揺がぬ固き決心に

流石の魔神も辟易し ここに全く手を變へて

レール（四郎）セーム（清六）や シヤム（三六）ハール（八郎）

ポーロ（保道）の五人を河鹿山 麓の道に遣はして

菖蒲の方がウブスナの 齋苑の館に行く道を

取押へむと待ちみたる 時しもあれや三五の

教を慕ふ梅彦が 妹と生れし花菖蒲

女の纖弱き一人旅 來かかる前に塞がりて

有無を云はせずフン縛り 青春山の谷間に

引つれ來りて各自に 大足別の望みをば

徹さむものと左右より 嚇しつすかしつ努むれど

信仰堅固の菖蒲子は 頭を左右に打ふりて

いつかな動かぬ權幕に 流石の曲津も持ちあぐみ

困りぬいたる折柄に  
遙に聞ゆる宣傳歌

五人は一度に肝冷し  
逃げ隠れむとする時に

現はれ來りし宣傳使  
照國別の眼力に

睨まれ恐れて雲霞  
逃げ行く後に菖蒲子が

涙ながらの物語  
よくよく聞けば兩親は

大足別に捕へられ  
朝な夕なの責苦をば

忍びみますと聞きしより  
照國別は驚いて

日頃尋ねし父母は  
バラモン教の岩窟に

囚はれ給ふか  
日頃尋ねし妹は

汝なりしや嬉しやと  
心も勇み身も勇み

照公梅公諸共に  
青春山の岩窟に

登り行くこそ雄々しけれ。

青春山の岩窟には大將の大足別が數百人の武卒を率ゐ、大黒主の命によつてデ

カタン高原に蟠居せるウラル教の集團を勦滅せむと出陣した後であつた。目の上  
の瘤と嫌がつてみた大足別の大將が出陣した後は、恐い者なしの連中、朝から晩  
まで酒をとり出し、會うた時に笠ぬげ式で、ビールやポトワインを穴倉よ  
り取り出し、朝から晩まで管の巻きつづけをやつてみた。

二十人ばかりの留守番は各八疊ばかりの間に胡坐をかき乍ら、遠慮なしに祕藏  
の酒をとり出しウラル教式に、

飲めよ騒げよ一寸先や暗よ

暗の後には月が出る

と唄ひ乍らへベレケに酔ひ潰れ、脱線振りを盛んに發揮してゐる。

レール「オイ、ポ一口、貴様は何時も御大將を笠に着て俺達を腮の先でコキ使ひ  
やがつたが、もう今日となつては駄目だ。これからレールさまが留守師團長だか  
ら其命令を遵奉するのだよ。萬々一レールの御命令に服従せないと、此間のタル

チン（太郎吉）の様に岩上から深谷川へ空中滑走の曲藝を演じて谷底に伏艇し、  
其まま三途の川へタダ走りにならねばならぬから、チツとは神妙にしたが宜から  
うぞ。貴様が何時も飲食物に「ケチ」をつけゴテゴテ吐すものだから、胃の腑の  
格納庫は空虚になり、碌に働きも出来やしない。コンパスのプロペラがチツとも  
云ふ事をきかないから、それで是非なく斯うしてヘタばつて酒を飲んで居るのだ。  
オイ、皆の奴、大將は印度の國の都まで行つて、それから大黒主の軍隊と合し、  
デカタン高原へ行くのだから、先づ一年位は歸つて來ない事は請合だ。あるだけ  
の酒を飲んでパンを喰ひ盡し、無くなつたら今度はアーメニヤに長驅進撃してウ  
ラル彦の館を襲ひ、ここも亦蠶の蟲が桑の葉を喰ふ様に喰ひつぶしさへすれば吾々  
の天下は太平だ。こんな甘い酒も飲まずに河鹿峠を瘦馬追ふ様に朝から晩まで八  
イハイと云つて居るのも氣が利かねい。こんな事が出て來ると思つて待つてゐた  
のだ。俺達は大將から腰拔野郎の、裏返り者と認識されてゐるのだから、肝腎の  
戦争にも連れて行きやがらなんだのだよ」  
ポ一口「それが却て此方とらの好都合だ。俺も今迄は大將の命令で威張つてゐた



ものの心の底をたたいたたらヤツパリお前達と同一だ

レール「さう聞けば牛の爪だ、先からよく分つてる。然し分らぬのは奥の岩窟に隠してある老夫婦ぢやないか。あんな柔順い老人を何故何時までもあんな暗室に突つ込んでおくのだらう。第一それが俺は氣に喰はないのだ、………ポ一口、貴様は凡ての様子を知つてゐる筈だ。キレイサツパリとここで白状して了へ

ポ一口「もう斯うなる上は何をか包まむやだ。大きな聲では云はれぬが此處の大將は天下無類のデレ助だ。バラモン教で居乍らウラル教の娘にゾツコン惚込んで

「女房に呉れえ」と掛合つた所、宗旨が違ふので今幽閉されている老夫婦が容易に首を縦にふらない。そこで大足別の大將が手を代へ品をかへ、澤山な贈物をして

老夫婦を説きつけたけれども、どうしても駄目だつた。そこで今度は焼糞になつて

つて亦も馬の背にのせ到頭此岩窟まで連れ歸り、朝から晩まで「姫を渡すか、渡せば助けてやる、嫌ぢや何ぞと吐すが最後、貴様の素首を引ぬいてやらう」と執

念深くも、御大自ら幽閉室の前に現はれて口説きたてるのだから堪らない。あ

な大將に見込まれたら、丸で蛇に狙はれた蛙の様なものだらう」

レール「其娘は何處に居るのだ。肝腎の代物が無いのに爺や婆を苛めて居つても

仕方がないぢやないか。大足別の大將も餘程譯の分らぬ「ケレ」又人足だのう」

ポーロ「オイ、コラ、そんな事を吐すと劍呑だぞ。此中にも矢張犬が潜んで居る

ぞ。俺達の行動を密告する代物が何喰はぬ顔して潜入してゐるのだから、あんま

りの事は言はぬがよからう。敵の中にも味方があれば、味方の中にも敵がある今

の世の中、チツト氣をつけぬかい」

レール「その犬と云ふのはチャンと俺の天眼通で看破してあるのだ。大方エルマ

の事だらう」

ポーロ「それさへ分つて居れば俺も安心だ。此奴は俺等の中に身を低うして交つ

てゐるが、實の處は大足別の從弟に當る奴だ。然しながら斯うなつた以上はエル

マを許しておく譯には行くまい。酒に酔うた紛れに、此奴をフン縛つて谷川へド

ブ漬け茄子とやつてこまさうかい」

エルマ「コリヤコリヤ、何を吐すのだ。間違ふにも程があるぞ。大將の從弟はポー

口ぢやないか」

レール「エルマとポ一口と間違つた所でたつた一人の事だ。もう斯う酒がまはつては何ちらが善か悪か分らない。一層の事二人ともドブンとやつて了へばいいぢやないか、一人の奴は時の災難ぢやと思つて諦めさへすれば宜いのだ。ウフ、フ、フ、」

ポ一口「コラコラ、味方同志が内亂を起しちやつまらないぞ。ここは吾々一同が腹帯をしめ結束を固くして居らねば、主人の留守を考へて三五教の奴が襲撃して來たら如何する。「兄弟牆に鬨ぐとも外其侮を防ぐ」と云ふ金言を心得ぬかい」

レール「金言も心得もあつたものかい。主人の留守の眞鍋焚き、毎日日無禮講を開いて各自心の塵芥を拂ひ出し水晶魂となりさへすればバラモン教の御神慮に叶ふのだ。酒さへ飲めば何でも彼でも腹の底まで打明すものだから酒ほど偉いものはない。ア、酒なる哉酒なる哉だ。「さけ」もさけも世の中に酒ほど愛嬌のものあるか、イヒ、フ、フ、。何とうまい酒だのう、こんな時に喧嘩をする様な野暮が何處にあるかい。酒さへ飲めば善もなければ悪もない。敵もなければ味方もな

い。喧嘩の仲裁する奴はヤツパリ酒だ。仲裁の權威を保有する酒を先に飲んで置  
き乍ら喧嘩をすると云ふ事があるものけえ、アーン」  
エルマ「さうともさうとも一切萬事酒で解決のつく世の中だ。（歌口調）「ア、  
世の中豊年ぢや、萬作ぢや、萬作々々萬作ぢや」（都々逸）「酒を飲む人心から  
可愛い、酔うて管巻きやなほ可愛い」とけつかるワイ、ウー、ゲツプ、ウーン、  
酒の奴、不謹慎千萬にも俺達の密談を聞かうと思つて喉元から一寸覗きやがつた。  
エー不従順な代物だなア」  
ポーロ「コラ、レール、ポーロ、ポーロと涙をこぼしもつて酒を喰ふ奴があるか  
い。酒を飲んだら飲んだらしう何故勇まぬのか。貴様は泣上戸だな」  
レール「あんまりの酒の洪水でレールが沈没し汽車が方向を取違へて脱線したの  
だ。乗客は忽ち顛覆の厄に會ひ阿鼻叫喚恰も地獄の如しだ。其慘状を見るに忍び  
ず、一掬同情の涙をそそいだのだ。貴様の様な奴が英雄の心事が分つて堪るか  
い。えーウーゲツプウーン、酒の奴、又しても法則を破つて秘密室を覗かうとしやが  
る。怪しからぬ奴だな。こらヤツコス、貴様、何だ、眞面目腐つた顔しやがつて

貴様こそ劍呑だ。これ丈け皆がうま酒に酔うて居るのに貴様だけ眞面目な顔をしやがって、何の事だい、大方貴様は大將が歸つて來たら俺達の行動を一々上申するつもりだらう。アーン」

ヤツコス「ヤイ、レール、そんな殺生な事を云つてくれない。俺は貴様等の知つてる通り極端な下戸ぢやないか。下戸が如何して酒が飲めるかい」

レール「酒好む人が奈良漬食はずして酒好かぬ人が粕汁を喰ふ……と云ふことがある。貴様、粕汁ならチツとばかり喰ふだらう。粕汁でもあまり馬鹿にならな  
いぞ。ドツサリ飲めば酔ふぞ。貴様も粕汁でも飲んで古今獨歩珍無類の管を巻いたら如何だ（歌口調）「酒を飲まぬ奴ア心から憎い、管も巻かぬ奴ア、なほ憎いと云ふ事があるぞ、ヤイ、ヤツコス奴一ツ飲んだら如何だい。酒が強うて飲めな  
けりや湯でもさして緩うしてやらうか」

ヤツコス「イヤ、もう澤山だ。決してお前等の行動を上申する様な不道德な事は  
せぬから安心して呉れえ」

レール「酒の席に酒飲まぬ奴が坐つてると何ともなしに氣がひけて、座が白けて

仕方がないワ。そして女のお給仕がないと云ふから殺風景な事此上なしだ。時に  
此處の大將が戀着してる「アヤメ」と云ふナイスは何處に居るだらうな。俺はそ  
のナイスの事が苦になつて忘れられぬわいのう。オ、、、、、（義太夫）思へば思  
へば いぢらしいやあ、父と母とは名も高きコーカス山のお宮詣での其砌、バラ  
モン教の曲津神……………

ポーロ、コリヤコリヤ、曲津神と云ふ事があるかい

レール、（義太夫）バラモン教の神司、大黒主に捕へられ荒風すさぶ山野を渡り  
やうやうに、象の背中に乗せられて、ここまで来たのがア、、、、運の盡き、暗き  
牢屋に投げ込まれ、朝な、夕なの御飯さへ、碌々味はふ事も得ず、苦しみ歎く  
あゝゝゝり様はア、、、、よその見る目も憐れなり、一時も早く吾娘、ここに尋ね  
て来るなれば、大足別の大將も、目を細うして涎こき、以ての外の御満足、とは  
云ひ乍ら情なや、三五教の司なら、可愛い娘を女房に、熨斗までつけて奉らむと  
思へども、惡逆無道の大黒主がオツトドッコイ、、、、仁慈無限の大黒主が、左守  
の神にも譬ふべき、青春山の岩窟に、勢ひ竝ぶものもなき、大足別と云ひ乍ら、

これが女房にようばうにやられようか、ほんに思おもへば前さきの世よで、如何いかなる事ことの罪つみせしか、憐あはれみ玉たまへや三五あななひの、皇大神すめおほかみと口説くどきたて、くどき立たつれエ、ばア、レールさま、……と云いふ様な老夫婦らうふうの心情しんじやうだ。オイ一つ脱線だつせんつづけに婆ばばでも女をんなに違ちがひないから牢屋らうやから引張ひっぱり出だしてお給仕きふじでもさしたらどうだ。あまり心持こころもち悪わるくはあ  
るめいぞ。アーン

一同いちどう「イヒ、」

と齒はを剥むき出だし腮あこをシヤクつて笑わらふ折をりしも、入口いりぐちの番ばんをして居あたキルク(喜久雄)は宙ちゆうをとんで馳はせ來きたり、

キルク「モシモシ　ポー口さま、たゝゝゝ大變たいへんだ大變たいへんだ。立派りっぱな美人びじんが來きまし  
たぜ」

ポー口「ナニ、美人びじんが來きた。そりや大變たいへんな面白おもしろい事ことだ。早く引張ひっぱつて來こい」

レール「それだから時節じせつは待またねばならぬものだ。別嬪べつびんと聞きいちや俺おれも堪たまらない  
わ。ヤツパリ目めが二ふたつあるだらうな、アーン」

キルク「別嬪べつびんが一人ひとりに、強つよい怖こはさうな宣傳使せんてんしが三人さんにんです」

「ヤア、そりや大變だ」  
と一同は俄に酒の酔も醒め、徳利を蹴飛ばし鉢を割り乍ら右往左往に狼狽へまはる。

(大正一一・一〇・二八 舊九・九 北村隆光録)

## 第一六章 親子對面(一〇八一)

セーム、シヤムの二人は三五教の宣傳使の尋ね來りしと聞くより、ポー口の命に依つて岩窟の入口に揉手し乍ら米つきバツタのやうに頭や腰をピヨコピヨコ屈め、

セーム「エーこれはこれは宣傳使様、よくこそ御入來下さいました。折角遠路の所、お越し下さつて、何とも早御禮の申上げやうもムいませぬ。生憎主人は御不在で、大教主様の御命令を奉じ、デカタン高原まで出陣なさいました。其不在中



は何人たり共、ここへ入れてはならぬとの厳しき命令、折角乍ら、どうぞお歸り下さいませ。なあシヤム、俺の言ふ事は決して嘘ぢやあるまい。セームが尙儂になる所まで頭をピヨコピヨコ、腰をペコペコさせて御願してゐるのだから、そこはどうぞ宣傳使の雅量を以てお歸り下さらば誠に有難うムいます。へ、へ、決して決して悪意で申すのではムいませぬ、又三五教の老夫婦は決して此岩窟の中に閉ぢ込めてはムいませぬから、折角お查べ下さいましても徒勞でムいます。トツトと御退却を、偏に願ひ奉ります」

照國別「イヤ今日はどうしても此儘では歸る事は出来ないのだ。アーメニヤから榎谷彦榎谷姫といふ二人の夫婦が捉へられて來てゐる筈だ」

セーム「滅相もないことを仰有いませ。こんな山奥にアーメニヤなんぞからお出でる物好がどこにムいませう、ソリヤ何かのお間違でせう」

菖蒲「何と言はれても、私は兩親に會はねばならぬ。お邪魔なさると却てお爲になりませぬぞえ」

セーム「ヤア此奴ア手ごはい談判だ、到底俺の一方では行きかねる。オイ、シヤ

ム、奥へ行つて此由をポー口さまに早く注進せぬかい。そして今の何々を何々し  
ておくのだぞ」

照國別「一刻の間も猶豫はならぬ、罷り通るから案内を致せ」

セーム「一寸待つて下さいませ。不在師團長のポー口の御意見を伺つた上にして

貫はねば岩窟侵入罪になりますから」

照國別「ハ、ハ、ハ、大變なうるたへ方だな。此様子ではキツと碌な事ではあるま

い。兩親の身の上が案じられる。サア早く菖蒲殿、奥へ進ませう」

セーム「あゝモシモシ一寸待つて下さい、御夫婦は至極御健全に御安泰に御座遊

ばします。決して虐待なんかしてはをりませぬ」

照國別「アハ、ハ、ハ、さうだらう。蚋一疋通はないやうな要心堅固な岩窟内へ御

保護を申上げてみると見えるワイ。イヤ御好意は後から御禮申す」

話變つて奥の一間では今迄酔ひつづれてゐた酒も俄にさめ、蒼白な顔をして岩

窟の戸をあけ、夫婦を引張り出すやら井鉢を抱へて逃げ廻るやら、大亂癡氣騒ぎ

の眞最中である。そこへシヤムが飛んで来て、息を喘ませながら、

「タ、大變々々、これこれポロの大將、レールさま、どうしたら宜からうか、しあん 思案を貸して下さい」

と頻りに地を兩手でパタパタと叩きもがく。

ポロ「何だ、あわただしい其騒ぎ方、どうしたといふのだ」

シヤム「何うも斯うもあつたものですか、息子が來たのですよ。ソレあの娘が、何うしても斯うしても、強つて入らうと致します」

ポロ「立つて入らうと這うて入らうと、そんな事は頓着ないが、息子娘とは何の事だ」

シヤム「あの奥に隠してあつた老夫婦の倅と娘がやつて來たのですよ。力、敵討だと云つて、數十萬の軍勢を引連れ、先頭に立つて立向ひました」

ポロ「此の細谷路を數十萬の軍勢がどうして來られるものか」

シヤム「何だか知りませぬが、随分澤山な白衣の軍卒が中空からやつて來ました。モシモシ大將、グツグツしてゐると岩窟退治が始まります。何とか用意をなされ

ませ」

ポ一口「エ、仕方がない、俺が一先づ表口に立向ひ、掛合つて見よう」

と言ひ乍ら、レールに何か囁きつつ、表口に駆け出し、叮嚀に腰を屈めて、

ポ一口「私は此岩窟を預つて居りまするポ一口と申す【はした】者、何卒お見知り

りおかれまして今後御鼻屑にお願いいたします。サアどうぞ、お見かけ通の茅屋な

れど、御遠慮なく、トツトとお入り下さいませ」

照國別「當岩窟内に榎谷彦榎谷姫の夫婦の方はお見えになつてをるか」

ポ一口「ハイお見えになつて居ります。それはそれは御機嫌麗しく、あなた方の

お出でを、欣喜雀躍の體でお待ちかねでムいます。サア早くお通りあつて、御對

面の程をお願致します」

照國別「何を言つても不案内なる岩窟、如何なる計略の罠に陥らむも計り難い、

御苦勞ながら、其夫婦の方をここ迄案内して来てくれ。吾々は此處にて御對面申

上ぐるから」

ポ一口「それも御尤も乍ら、此頃は御大將の大足別様が、ハルナの都より、大教

主のお召しにより、數萬の軍卒を引率して、デカタン高原へ出陣された御不在中

故、残りの人間は僅かに二十有餘人、朝から晩まで留守事に酒を呑み、他愛なく酔ひ潰れて居りますから、決して計略などは致して御座いませぬ。どうぞお入り下さいませ」

菖蒲「モシ兄上様、ウツカリ進んではなりませんぞ。コレコレこの番人とやら、早く妾が父母をここへお伴れ申して来るがよい。グツグツ致すと、お前さまたちの御爲にはなりますまいぞや」

ポーロは頭をかき乍ら、

「エー御説御尤もながら御夫婦は持病が起り、脚氣が起つて、足に頭痛がすると仰有り、チヨツとも動けませぬ。又奥さまの方は産後の血の道とか、尾の道とかが目を出して、ウンウンキヤツキヤツ唸つてばかり、身動きもならぬ御不自由さ、どうぞあなたの方から進んで御面會を願ひたう存じます」

照國別「そんなら仕方がない、案内を致せ」

ポーロ「サア斯うお出でなさいませ」

と言ひ乍ら先に立つ。一行四人は後に従ひ、あたりに心を配りつつ、奥へ奥へと

進み行く。忽ちカラクリ仕掛の板の間はクレンと引繰返り、四人はドツと一度に暗き陥穽に落ち込んで了つた。ポ一口はしすましたりと、返し戸に錠を卸し、重き石を二つ三つのせて、ホツと一息胸撫でおろし、

「オイ皆の奴、モウ安心だ。氣をおちつけよ。彼奴は大足別様の戀慕してムつた菖蒲といふナイスだ。そして一人は兄の照國別といふ三五教の有名な豪傑宣傳使だ。彼奴の言靈にかかつたが最後、手足も何もビリビリとしびれて了ふ無雙の神力がある。併し乍らかうやつて奈落の底へおとして置けば、最早此岩窟内は無事安穩だ。モ一つ祝に二次會を開かうぢやないか」

とニコニコとして喚き立てる。レール、シヤム、ハールは嬉々として集まり來り、レール「流石はポ一口さま、留守師團長丈の資格は十分に具備してゐる。ヤア天晴れ天晴れかくなる上は何をか恐れむ、飲んで飲んで、飲み倒し、蛇の子になるか、虎になる所まで、お神酒をあがらうかい」

と、又もや酒徳利を穴倉より運び出し、一生懸命に歌を唄つて、悪事災難を逃れたる祝宴を張り出した。

一旦驚きの餘り、さめかけてみた酒は再まはり出した。其上に又もやガブガブとやつたものだから堪らない。何奴も此奴もグタグタになつて無我夢中に下らぬ事を喋舌り出した。

レール「コレコレポー口さま、随分ポー口い事が出来たぢやないか、酒は鱈腹呑めるなり、爺い婆アの仇を討ちに來たと思つた息子娘は奈落の底へ落し込んだなり、最早天が下に恐るべき者は一人もなくなつて了つた。サアこれから爺い婆アをここへ連れ出して來てお酌をさそうかい。オイ皆の奴、婆アでも女だぞ、男ばかりの此岩窟、滅多に不足はあるまいがな、アーン」

シヤム「何ぼ女だつて、婆アでは【はづ】まぬぢやないか。俺は今來た菖蒲とか【さつき】とかいふナイスを引張り出して、酌をさしたら如何だらうかと思つてるのだ」

レール「馬鹿を言ふな、あんな奴を引張り出して來ようものなら、丸で爆裂彈を投げたやうなものだ。恐ろしい代物だぞ。オイ、ヤツコス、何をグツグツしてるのだ。爺い婆アをここへ引張つて來ぬかい」

ヤツコス□喧やかまし言いふない、あんな目め汁しる水みづ〔ばな〕を垂たれてる汚きたい爺ぢ婆ばをこんな所ところへ連つれて來きちや、酒さけの御お座ざがさめて了しまうぞ。それよりも俺おれがひと一つ品しなよう踊をどつて見みせてやるからそれで辛しん抱ぱうせい□

と、早はやくも手て拭ぬぐを姐ねえさんかぶりにして、一寸ちよつと裾すそをからげ、手てや尻しりをふりピシヤピシヤと時とき々とき手てを叩たたき、

□私わたしが在ざい所しよはコーカス山ざんの

麓ふもとの麓ふもとのその麓ふもと

ヤツトコセー ドツコイシヨ

榎かしや谷ひこの彦ひこや榎かしや谷ひめ姫ひめ

ウラルの神かみの御お取とり次つぎ

こんな牢らう屋やへ突つ込こまれ

ヨーイトサー ヨーイトサー

朝あさから晩ばんまで娘むすめをくれいと責せめられる



どうして娘むすめがやられようか

鬼雲彦おにくもひこの眷族けんぞくに

ドッコイシヨー　ドッコイシヨー』

レール『オイ貴様きさま、人の代理だいいりをするのか、しやうもない、モツと氣きの利きいた事ことを唄うたはぬかい』

ヤツコス『老人夫婦らうじんふうふの守護神しゅごじんが憑うつつつて唄うたつてゐるのだ。サアこれから、又また一つ憑うつつられてやらうかな。今度は大足別おほだるわけぢや、ウツフ、フ、フ、

鬼雲彦おにくもひこの大將たいしやうが　イホの都みやこを追おひまくられて

ヤツトコサー　ヤツトコサー　メソポタミヤの顯恩郷けんおんきやうに

ヤツとお尻しりをすゑた時とき　ヤートサー　ヤートサー

三五教あななひけつの宣傳使せんでんし　肝太玉きもふとだまの神司かむつかさ

家來けらいをつれてやつて來きて　大おほきな目玉めだまをむきよつた

ドッコイシヨー ドッコイシヨー 鬼雲彦の大將は

大蛇の姿を現はして 一目散に自轉倒の

大江の山へ「とつ」走り 又もやここを追ひまくられて

命カラガラ フサの國 逃げ歸りたる弱蟲が

時世時節の力にて 再び大黒主となり

羽ぶりを利かしてゐた所へ 尾をふり頭を下げ乍ら

追従タラダラお髯の塵を 拂つてのけた利巧者

ヨーイトサー ヨーイトサー それが誰やと尋ねたら

青春山の岩窟に 時めき玉ふ御大將

大足別の醜神だ オツトドッコイ コラしまうた

大足別の神司 大樽あけて爛をして

何奴も此奴も呑むがよい 呑めよ呑め呑め山も田も

家倉屋敷に至るまで 呑んで竝べたフラスコの

徳利トンのトントコトン 面白うなつておいでたな

俺は酒は呑まないが けたいな匂ひで酔うて来た

レール ポーロの兩人が 尋ねてうせた神司

照國別といふ奴に 肝を潰して陷穽

卑怯未練と知り乍ら 甘くやつたる御手柄

天地の神も御照覽 梵天王の自在天

大國彦の神様も さぞやさぞさぞ喜んで

泣いてムるに違ない 泣いたり笑うたり怒つたり

お前から一體酒食うて 何が不足で怒るのか

泣いて明石の濱千鳥 泣いた序に可哀相な

さぞ今頃は菖蒲子が 奈落の底でベソベソと

泣いてムるに違ない それを思へば俺だとして

チツとは泣かずにや居られない ウントコドツコイ ドツコイシヨ

呑めよ呑め呑め騒げよ騒げ 一寸先は眞の暗

後から月が出るけれど 其月こそは運の【つき】

うる【つき】間誤【つき】ウソ【つき】の ヤクザばかりが寄り合うて

バラモン教を開くとは 呆れて物が言はれない

ウントコドツコイ ドツコイシヨ一 照國別や菖蒲子を

甘くおとして喜んで 酒にくらひ酔て居る内に

剛力無雙の宣傳使 又もや現はれ来たならば

何奴も此奴もうるたへて 一泡吹くに違ない

あゝ面白い面白い 俺は高見で見物だ

大足別の腰拔が さぞ今頃は馬に乗り

デカタン高原トボトボと 數多の軍勢を引つれて

冥途の旅とは知らずして 歩いて居るか情ない

とは云ふものの俺達は チツとも苦しい程に

其れの乾兒と選まれた レール ポーロやシヤム ハール

其外百のガラクタが やりをる事が面にくい

ホんに呆れた奴ばかり 神の布教を楯となし

其内實は泥坊を 本職とする奴ばかり

此岩窟は神様の 聖場どころか狼や

獅子熊大蛇の跳梁場 早く尊い神が来て

此奴ら一同悉く 平げくれればよいものに

あゝ叶はむからたまらない かんかんチキチン カンチキチン

ドッコイドッコイドッコイシヨ ホンに困った奴ばかり

顔見てさへも腹が立つ

レール「コラコラ怪しからぬ事を吐く奴だ。貴様は三五教の間者だらう、コーカス山のヤツコスの子孫だなんて吐してけつかつたが、貴様はウラル教をすてて、とうとう三五教に沈没してケツカルのに違ない。サア有體に白状せい、蛙は口からだ、大黒主様や大足別の大將の悪口ばかり吐きやがったぢやないか」

ヤツコス「馬鹿だなア、俺の素性を今迄知らなかつたのか。俺は三五教の岩彦といふ宣傳使だ。神様の内命に依つて貴様等の行動を調査してゐるのを知らぬのか



にも苦くるくて仕しか方がない。ゲー、ガラガラ　ガラガラ、ウツプー」

レール「エ、何ど奴いつも此こ奴いつも、酔よどればかりぢやなア。さうぢやから酒さけを身み知らずしに食くらふなというて聞きかしてあるのだ」

シヤム「オイ、レール、偉えら相さうに言いふない、お前まへだつて、脛すね腰こしが立たたぬとこまで酔ようてゐるぢやないか」

レール「俺おれは俺おれで特別とくべつだ。俺おれの眞ま似ねをすると云いふ事ことがあるものかい。アーン、コレお化ばけのヤツコスさま、そんな出で刃ばのやうな危あぶいものをふりまはさずずに早はや

く陷おとし弃あなの戸とをあけ、早はやく四よ人にんの宣せん傳でん使しを助たすけぬかい。そして俺おれ達たちの代だい表へう者しゃとなつて、御ご無ぶ禮れいをお詫わびしてくれないか。ナア、イワイワ岩いは彦ひこの宣せん傳でん使し、お前まへも中なか々なか

ぬかりのない男おとこだ。俺おれもカンチンした、流さ石すは三あ五な教ひの宣せん傳でん使しだワイ。アーン」  
ヤツコス「オ、貴き様さまのいふ通とほり、早はやく宣せん傳でん使し様さまをお助たすけ致いたさねばならぬ。シツカ

リ顔かほを見みなかつたが、何なんでも梅うめ彦ひこによく似にて居をつたやうだ。ドレこれから四よ人にんを救すくひあげて、貴き様さま等ら一いち同どうを其その後あとへほり込こんでやらうか。此こ奴いつア面おも白しろい」

と立たち上あらうとするのを、レールは矢や庭ににヤツコスの足あしにくらひつき、

「俺はレール酔うたのだから、寝鳥の首を締めるやうな事をやられちや浮む瀨がないワ。マアマア一つ鍋を食た仲だから、其誼みで俺丈は免除してくれ。其代りにポーロ、シヤム、ハール、エルマ、エム等は一寸も遠慮いらぬから、ドシドシと放り込んでくれ。モウスうなると吾身が大事ぢや、人が死なうが倒れやうが、吾さへ良けらよい時節だ。コレ丈道理を解けて頼むのにお前は聞いてくれぬのか。アーン」

斯かる所へキルクは慌しくやつて来た。

キルク「オイオイポーロ、三五教の宣傳使がタール、ハム、イール、ヨセフを供としてやつて来ました。如何致しませうかな」

ポーロ「ナニ、又宣傳使がやつて来た？　そしてハムの兄哥が居るといふのか、ソラ洒落てる、流石はハムだ。甘く引張り込んで来やがったな」

キルク「イエイエ滅相もない。ハム、タール、イール、ヨセフはスツカリ三五教の味方をして、ここへやつて来よつたのだ」

ポーロ「ハハハ彼奴ア鬼熊別さまの子分だけけれど、同じ教だと思つて、俺達に手



柄をさそうと連れて来たのだらう。本當に氣の利いた奴だ」

ヤツコス「ナニ、三五教の宣傳使が来たか、其奴ア面白い、何奴も此奴も一人も残らず酔ひつづれて居やがる、決して老人夫婦に對し後顧の憂ひがないから、俺が一つ出迎へに行て來う」

と、岩戸の入口に走り出で、

「これはこれは三五教の宣傳使様、お名は存じませぬが、マア奥へお入り下さい。照國別一行が今陥穽へおとされて困つてゐる所です。サア早く飛込んで岩窟征伐をして下さい。吾々もお手傳ひを致しませう」

國公「ハテ、合點のいかぬ事を云ふぢやないか、お前はバラモン教の眷族だらう」  
ヤツコス「實の所は三五教の宣傳使岩彦命だ。大神様の内命に依つて、此岩窟へ信者と化けこみ、今迄時を待つてゐたのだ。お前もまだ新米と見えるが、ナーニ案じる事はない。トツトと這入つてくれ、随分面白い事が始まつてゐるから」  
と鷹揚に言ひ放ち、ニコニコとして奥に入る。國公は合點行かず、四人を従へ奥深く進み入り、酔ひどれの姿を見て、顔をしかめ、

「ア、いやな匂がするぢやないか、何だムサ苦しい、そこら中に店出しをしよつて、オイ何か芳香水がないか、イヤ防臭液でもいい、チトふりかけてくれ」  
岩彦「それは免も角、照國別外三人を救ひ上げねばならぬ。そんな末梢的問題はどうでもいい、中々戸が重たくて俺一人では如何ともする事が出来ない。ヤイ、一同の連中さま、俺に力を貸してくれ、ここだ此丸い穴へ一人づつ指を突込んでグイと引上げてくれ」

國公は「ヨシ来た」と言ひながら六人力を併せて、非常に重たい板の戸を引きあけた。中には四人の男女が一生懸命に天津祝詞を奏上してゐた。國公は穴を覗いて、

「ヤア照國別の宣傳使様、危い所でありました。黄金姫様、清照姫様の命令に依つて、あなた方をお助けに参りました」  
照國別「ヤアそれは御苦勞だつた、曲津神奴、とうとうこんな所へおとしよつて流石の俺も如何なる事かと、聊か心配してゐた。持つべき者は家來なりけりだ。早く繩梯子でもおろしてくれないか」

岩彦は何處よりか繩梯子を持ち來り、バラリとかけ下ろした。照國別を初め、莒蒲、照公、梅公は猿の如く繩梯子を傳うてかけ上り、國公の前に首を一寸下げ、  
「ヤア有難う」

と挨拶する。岩彦は照國別の背を二つ三つポンポンと叩き、

「ヤア梅彦、久し振だつたねい、こんな所で會はうとは夢にも思はなかつたよ」

照國別「ヨーお前は岩彦だつたか、何と不思議な所で會うたものだ。併し老人夫婦はどうしてゐるか、聞かしてくれ」

岩彦「心配すな、俺がいつもかくれ忍んで十分の御馳走を與へ、大切に守つてゐ

たから、お二人共至極健全だ。聞けばお前の兩親だつたさうだねい」

照國別「兩親はどこにゐられるか、案内してくれないか」

岩彦「ヨシ俺に従いて來い、陷穽はモウこれ丈だ」

と言ひつつ、牢屋の前に導いた。見れば牢獄の戸はパツと開いてある。照國別が

ここへ來た時にシヤムの奴、驚いて戸を開けておいたからである。されど老人夫婦は假令此牢獄を出た所で、ヤツパリ岩窟の中だ、どんな目に會はされるか知れ

婦は假令此牢獄を出た所で、ヤツパリ岩窟の中だ、どんな目に會はされるか知れ

婦は假令此牢獄を出た所で、ヤツパリ岩窟の中だ、どんな目に會はされるか知れ

ないと、小隅に夫婦は抱合つて、震うてゐた。

照國別は聲をくもらせ、

「モシお父さま、お母アさま、私は梅彦で御座います、妹の菖蒲もここに參つて居ります。どうぞ御安心下さいませ」

此聲を聞くより老人夫婦は牢獄を飛び出で、榎谷彦は菖蒲に榎谷姫は照國別に抱つき、嬉し涙にかきくれ、暫しは無言の幕をつづけて、熱き涙を瀧の如くに流すのみなり。

これよりポーロ、レールを初め一同の罪を赦し、照國別は兩親を初め、妹菖蒲を國公に守らせ、タール、イール、ハム、ヨセフも前後を守つて、アーメニヤの故郷へ歸らしめ、自分は大神の使命を果すべく、照公、梅公及岩彦を伴ひ、岩窟を後にフサの國をさして、宣傳歌を歌ひつつ、勇み進んで出でて行く。惟神靈幸倍坐せ。

(大正一一・一〇・二八 舊九・九 松村眞澄録)

第五篇 馬蹄の反影

第一七章 テームス峠（一〇八二）

黄金姫、清照姫の母娘は巡禮姿に身をやつし、金剛杖にて地を叩きつつ、霧こむ野邊を西南指して宣傳歌を歌ひながら浮木ヶ原をさして進み行く。道につき當つた可なり高き山がある。此山を何うしても越えねば道がない。日は已に山の端に没して四面暗黒に包まれた。此山の名はテームス山といふ。登りが三里下りが三里、可なり大きな峠でフサの國より月の國へ渉る境域である。母娘二人は山麓の路傍の岩の上に腰打掛け息を休めてゐた。そこへ二人の馬方驛馬を引つれ、ハイと言ひ乍ら、現はれ來り、

「モシモシ旅のお方、此テームス山はアフガニスタンで有名な峻坂でムいます。女の足では到底跋涉する事は出來ますまい。私はこれから此峠を涉りて月の國へ

歸る者、どうぞ此馬に乗つて下さい。歸りがけだから何時もとは半分の賃金に致しておきます」

黄金姫「折角なれど吾々は達者な足を持つてゐるから馬の世話になるのは止めておきませう」

馬方「エ、馬鹿にすない。足があるなんて、分り切つた事をいやがつて、足のない奴が旅する筈があるかい。いやなら厭でいいワ。乗らぬと吐しやがるが、此方の方から乗せてやらぬワイ」

黄金姫「オホ、これ馬方さま、お前さまは本當の馬方ぢやあるまいがな。お前のひいてゐる馬はそこらに居つた野馬を臨時引つかんで來た證據には轡も無し、馬の爪が大變に伸びてゐる、そしてお前の言葉は馬方言葉ぢやない。バラモン教の宣傳使の供でもしてゐた代物だろ。そんな事をして吾々母娘を馬に乗せ、急坂になつた所で、馬の足を叩き、馬を轉倒させて、吾々母娘をしようといふ惡い見だろ、お前の顔にチヤンと書いてある。そんなウソツパチを喰ふやうな婆アぢやありませんぞ。又河鹿峠のやうに谷底へつまんで放つて上げようか、お前

は五人の中の一人、運よく助かつて逃げた男だらう、どこともなしに面に見覚えがあるから騙したつて駄目だよ」

馬方「イヤもうそこ迄看破されては仕方ありません。實の所はあの時五人の中に加はつてみたレーブといふ、餘りよくない代物です。お前さまが大變な神力を現はして自分の同僚を三人迄谷底へ投込んだ時の恐ろしさ。何とかしてお前さま母娘を亡き者に致さねば、吾々の思惑は何時になつても立たない。又可哀さうに俺達の友達二人まで、冥途の旅をしたのだから、友の仇敵を討つてやらねばならぬ、何れ此峠を越すに違ないと思つて、野馬を引捉へ、道に會つた一人の友達と、一目散にここ迄走つて来て、待つてみました。併しながらお前さまが私の計略を看破した上は、手も足も出すことは出来ない。そんなら馬に乗るのは止めて貰ひませう。油断をせない旅人を乗せて行つたところで、思惑は立ちませぬからな」

と怖さうに逃げ腰になつて喋つて居る。

黄金姫「コレ、レーブとやら、お前は鬼熊別さまの部下ではないか。但は臨時雇で働いてゐるのか」

レーブ、ハイ、三年ばかり前から結構なお手當を頂戴して、鬼熊別様の奥様の蜈蚣姫や小絲姫さまの所在が分らないので、鬼熊別様も今は立派な身の上にお成り遊ばし、大黒主様と肩を並べられ、世間の信用は大黒主様よりもズツと宜しい。それ故鬼熊別様に従ふ者が日に月に増えて來まして、私も御恩顧を蒙つてゐる者、奥様や娘子の所在を尋ねむ爲に、ハムを初め吾々四人が一隊となつて、其所在を尋ねてゐました。併し乍らいくら尋ねても此廣い世の中自轉倒島へはそれぞれ手分けをして捜しに行つて居りますが、今にお行方は分りませぬ。噂に聞けば三五教に入信られたとの事、ウブスナ山の齋苑館には三五教の宣傳使が集まつてゐられるといふ話なので、河鹿峠を越えて參る途中、あなた様に出會し、假令蜈蚣姫でなくても小絲姫でなくても、丁度都合のよい婆アさまと娘、有無をいはせず伴れ歸り、鬼熊別様にお目につけたならば、コリヤ人違だ、併し乍らそれも無理はない、人相書位では分るものではないから、併しよくマアここ迄骨を折つたと、お賞めの言を頂かねば、三年も手當を貰うて居つた印がないと思ひ、一寸失禮を省みず、一狂言をやつて見ました。右様の次第でムいますから、決して泥棒で



も何でもムいませぬ。只お手當に對する義務上、あなた様を犠牲にしようとする  
イ考へを起したのでムいます。併し乍ら私はホンの端くれ役人、これにはハムと  
いふ發頭人がムいます。到底あなた母娘に睨まれては堪りませぬから、どうぞ三  
五教ならば神直日大直日に見直し聞直し、これも神の御都合だと宣り直して助け  
て下さいませ。心の底から改心して此通り手を合してお詫致します。コリヤ、テ  
ク、貴様もお詫の加勢をしてくれぬか。御立腹がひどいと見えて、容易にお氣色  
が直らぬぢやないか」

黄金姫 「お前のいふ事は寸分間違はないか」

レーブ 「へーへー、どうして嘘を申しませう」

清照姫 「コレ、レーブとやら、鬼熊別様は本當に御壯健でめらせられますかなア。  
綺麗な奥様を迎へてられる様な事はないかな」

レーブ 「どうしてどうして、品行方正な慈悲深いそれはそれは、ハルナの都でも  
名の高い、聖人君子と、バラモン國一體に仰がれてゐるお方でムいます」

清照姫 「大黒主様は壯健でめらせられますか」

レーブ「へーへー、**壯健も壯健**、先の奥様が古くなつたというて、小つぽけな家を建てて隠居をさせ、其後へ天人のやうな若い女房を据ゑ、澤山な妾を圍つて、朝から晩まで酒池肉林の亂癡氣騒ぎ、誰も彼も眉を顰めて居りますけれど、何を云うても澤山の軍隊を抱へてゐる英雄豪傑、そして梵天王の御子孫といふので、何事をなさつても御意見申上げる者も無し、鬼熊別様に比ぶれば、其信用の點に於ても、品行の點に於ても天地黑白の相違でムいます。大黒主様は餘り鬼熊別様の御信用が高うなつたので、少しく猜疑心が起り、何かにつけて御主人様のなさる事を、ゴテゴテとケチをつけ、無理難題を吹かけ、種々雑多の壓迫を加へられますが、御忍耐の強い私の御主人は、大黒主様が何と仰有つても、平氣な顔で唯々諾々として従うていらつしやいます。家來の私でさへも氣の毒でなりませぬ」

と差俯むいて涙をハラハラと流す、其涙に眞實が現はれてゐた。

黄金姫「それを聞いて私も安心した。實は鬼熊別様の女房蜈蚣姫は私だよ」

レーブは此言に驚いて大地に平伏し、

「コレハコレハ奥様で御座いましたか。存ぜぬこととて重々の御無禮、何卒お赦

し下くださいませ。そんなら此この娘むすめ様は小こ絲いと姫ひめ様でございますか」

と又またサメザメと嬉うれし泣なきに泣なく。  
清照姫きよてるひめ「私は鬼熊おにくま別わけ様の娘むすめ小こ絲いと姫ひめだ。十五じふごの時ときに心こころの曇くもりから家いへを飛と出びだし、兩親りやうしんに御心配ごしんぱいをかけた者ものだ。お前まへは私わたしの來歴らいれきを聞きいて居ゐるだらうな」

レーブ「ハイ詳くはしい事ことは存ぞんじませぬが、チヨイチヨイ、同僚間どうれうかんの話頭わとうに上のぼりますので、ウスウス承うけたまはつて居をりました。それを聞ききます上うへは奥様おくさまお娘子むすめに違ちがはひませぬ。どうぞ御安心ごあんしんの上此馬うへこのうまに乗のつて、私わたしにハルナの都みやこまで送おくらせて下くださいませ。

せ。さうしますれば御主人ごしゆじん様に對たいしても忠義ちうぎが立たつといふもの、お願ねがひでございます黄金姫わうごんひめ「ア、何なんと神様かみさまは水みづも洩もらさぬ深いお仕組しぐみ、到底たうてい凡人ただびとの窺うかがひ知しる所ところでない。併しかし乍ながら吾夫鬼熊わがをつとおにくま別わけ様は其様そのやうな立派りつぱな御方おかたになつてゐられるか、ホンに嬉うれしいことだ。それ丈ただ御忍耐ごにんたいの深ふかい神司かむづかさとお成なり遊あそばした以上いじやうは、キツと三五教あななひけうの教をしへをお

説とき申まをしたならば、三五教あななひけうになつて下くださるだらう。ア、有あり難がたい有あり難がたい……。コレ清照姫きよてるひめ、モウ大丈夫だいぢやうぶだ御安心ごあんしんなさい」

清照姫きよてるひめ「お母かアさま、本當ほんたうに嬉うれしうございますなア」

レーブ「モシモシ奥様、私の前だから、そんなことを仰有つても宜しいが、モウこれきり三五教の事は仰有らぬが宜しい、鬼熊別様の御迷惑になります。それだけでなく奥様や娘様が、三五教の宣傳使に成つてゐられるといふ噂が、大黒主様の耳に入つてからといふものは、大變な、旦那様に對し、壓迫が加はつて來てゐます。旦那様は聖人君子、兵馬の權は少しもお握り遊ばさず、大黒主に睨まれたが最後御身の破滅、それ故一切を神様に任して御隱忍遊ばしてゐる其矢先、旦那様が三五教のお話をお聞きになつたといふことが大黒主に聞かれたが最後、亡ばされて了ひます。どうぞ今日限り言はない様にして下さる方が、旦那様初め御兩人様のお爲でゝいませう」

黄金姫は心の裡に………「ナ、二、大黒主何者ぞ、何程兵馬の權を握るとはいへ、仁慈無限の三五の言靈の伊吹に依つて言向和すは朝飯前だ。併し乍らこんな奴にそんな事を云つて氣を揉ますも可哀相だ………と胸を定めて、  
「お前のいふ通り、旦那様の御難儀になることだから、モウ三五教のことは云ひますまい………「ナア清照姫、お前もこれきり言はない様にして下さいや」

レーブ「ア、それを聞いて此奴も安心致しました。併し乍らここに一つの大心配がムいます。都の入口に大黒主の軍隊が警護し、一々人物検めを致し、信仰の試験をして居りますから、其時にどうぞ三五教の教じみたことは一つも言はないやうにして下さらぬと、九分九厘で失敗してはなりませんから……」

黄金姫「あゝヨシヨシ、安心しておくれ、私も元はバラモン教の宣傳使だから、そこは如才なうやつてのけるから……」

レーブ「誠に濟まないことでムいますが、旦那様にお會ひなさる迄、蜈蚣姫であつたとか、小絲姫であつたとか云ふやうなことを仰有つてはなりませんぞや。旦那様は旦那様で、あなた方を戀慕うて私かに呼び寄せたいと思召し、吾々を四方の國にお遣はしになり、御行方を探させてゐられますなり、又一方の大黒主の方では……鬼熊別様の奥様娘子が三五教の宣傳使になつてゐるさうだから、何時かは歸つて来るだらう、其時に鬼熊別に鬼熊別が三五教に歸順しようものなら、バラモン教は根底から覆つて了ふ。鬼熊別に親子の對面致させては大變だ、それ以前に取つて捉まへて命を取り、鬼熊別様にソツと内證で居らうといふ大將のズルイお考へ、

かういふ具合で、大黒主様と鬼熊別様とは始終暗闘が續けられて居りますから、中々都の關門をくぐることは容易なことでは△いませぬ。甚だ申にくいこと乍ら、あなた様母娘を科人として縛り上げ、馬の背に括りつけて關門をくぐりお館まで送るより手段はないので△います」

黄金姫はニタリと笑ひ、心の中にて………ナニそれ程驚くことがあるものか、吾々にはキツと神様が守護して△る、そんなことは心配すな………と口まで出さうとしたが、俄に呑み込み、ワザと心配さうに、

「何から何まで氣をつけて呉れるお前の親切、黄金姫も有難う思ふぞや」

「レーブ、ハイ、勿體ない其お言葉、左様ならば今夜はここで寝むことに致しませう。實は此チームス峠は劍呑で△います。大黒主の一派の奴が關所を構へて往來の人を調べて居りますから、夜分は尚更劍呑なれば、夜の明けるのを待ち、姿を變へて此峠を越えることと致しませう」

清照姫「お母アさま、晝よりもそんな危険な處なら、夜分の方が面白ぢやありませんか。大黒主の部下が假令何萬押寄せ來る共、言靈の神力や、生れつきの吾

武勇ぶゆうにて、一人ひとりも残のこらず谷底たにそこへ投げやり、懲こらしめてやつたら、眠氣ねむけさましになつて面白おもしろいぢやありませんか。そんなことを聞くと、如何どうしてこんな所ところに、夜明よあかしが出来できませう。どうも肉にくが躍をどつて腕うでが鳴り堪たへられなくなつて來きました」

黄金姫わうごんひめ「コレコレ清照姫きよてるひめ、大事だいじの前のまへ小事せうじだ。小童武者こわつばむしやに相手あひてになり、ハルナの都みやこへ入城にふじやうの妨害ぼうがいになつては、それこそ大變たいへんだから、レーブの云いふ通り、都みやこへ着つく迄までは柔順おとなしうして行きませう。まして無抵抗主義むていかうしゆぎの三五教あななひけうの宣傳使せんでんしがそんな事ことをしてはなりませぬぞや、賢かしこいやうでもまだ年としが若いから、……ア、困こまりますワイ、かうなると老人としよりも矢張やっぱり必要ひつえうだなア。オホ、、、、、」

清照姫きよてるひめ「何事なにことも神様かみさまとお母かア様さまにお任せ致いたしませう」

黄金姫わうごんひめ「ア、それが良いよ。それが良いよ。神様かみさまも嘘さそお前のまへ其お言そのことばを御満足ごまんぞくに思召おほしめすであらう。そんならレーブ、今夜こんやはここで夜よを明あかすことにしよう」

レーブ「ハイ、さうなされませ。私もこれわたしで安心あんしんを致いたしました」

と主従しゆじゆつ四人よにんは岩いはの上うへに蓑みのを布しき、一夜いちやを明あかすこととなつた。四邊あたりに聞きゆる狼おほかみの唸うなり聲こゑ、凧こがらしの聲こゑと共に物凄ものすごく聞きえ來きたる。

第一八章 關所守（一〇八三）

テームス峠の山上にはバラモン教の關所が設けられ四五人の人が往來の人の信仰調べをやつて居る。と云ふのは表面の理由で其實は大黒主の命によつて蜈蚣姫、黄龍姫の所在を搜索し、見付け次第フン縛つて大黒主の館へソツと連れ歸れよとの命令を下して日夜見張りをさして居たのである。此關所は春公、清公、道公、紅葉、雪公と云ふ五人であつた。五人は朝から晩まで、日によると一人も道通りが無い此關所で大きな口をあげ、兩手を逆八の字に天井へグツと伸ばし「ア、ア、ア」と缺伸の共進會を仕事にして居た。仕方がなしにそこら中の果物を「むし」つて來て果物の酒を造り朝から晩まで飲んで飲んで飲み暮し「ズブ」六になつてゐる。こんな關所が假令千人あつたとて屁の突張りにもならぬのは、もとよりである。



春公はソロソロ酔がまはり出し、

「オイ、雪公、貴様は冷い白い名だが、矢張り酒を喰うと體が熱くなり顔まで赤くなるのが、俺や不思議で堪らぬワイ。それだから、化物の多い世の中と云ふのだよ。ゲーガラガラガラ」

雪公「何が化物だい。世の中は凡てこんなものだよ。善惡一如、正邪不二、表裏

一體だ。「一羽の鳥も鶏と言ひ、葵の花も赤に咲く、雪と云ふ字を墨で書く」と

云ふ歌を貴様は知ってるか。貴様の名は春ぢやないか、春公の癖に此秋になつて

行くのに鼻を高くし鼻唄を唄ひ、「はな」はなしう朝から晩まで浮かれきつて居

るのが一體全體譯が分らぬ。貴様こそネットプライスの正札の化物だ。否馬鹿者

だよ。あんまり他人の事を誹ると自分の事におちて來るのを知らぬか。丁度空を

向いて天に唾を吐いた様なものだよ。アーア、酔うた酔うた、ヨタンボばかりの

中に混入してゐると俺迄ヨタンボ病が傳染して、嫌でもない酒を飲まされて喉の

蟲がグイグイ喜びよつて、腹が立つて仕方がないワ。本當にこんな關守を大黒主

の大將だつて飼うておくのは大抵ぢやない。俺だつたら斯んな者は遠の昔に免職

するけどな、流石大黒主だけあつて大舞臺だワイ」  
春公「何、大黒主の神様だつて、こんな現状を見付けたら一遍に免職さすのは請合だ。何分遠い所だから分らないので俺達も、かうして毎日鞆丸の皺のばしを安閑とやつて居られるのだ。(都々逸)「他處で妻もちや遠山林、誰がかかるやら盗むやら」とか何とか云つて遠距離に居所を構へて居りさへすれば、少々の脱線も矛盾も無事通過するものだ。それだから俺はお膝元のハルナの大都會に居るよりも、かう云ふ山奥の關守となつて田園生活オツト簡易生活をやつて自然を樂しむのだ。人間は自然の風光に接せなくちや嘘だよ。紅塵萬丈雜鬧を極めた大都市に煙突の煙を吸入して虚空如來の様に熏つてブラブラしてゐるよりも何程愉快だから知れやしない。三百年の壽命が斯う云ふ所に居ると、嘘八百年も延びるやうだ。うまいうまいうまいのは此酒だ。「酒屋へ三里豆腐屋へ一里」と十八世紀の人間は吐きよるが、至治至樂の神代生活は自ら田を耕して喰ひ、自ら井を穿つて飲み、そこらあたり枝もたわわに實つてゐる果物を手づから【むし】り、手づから酒を造つて賞翫する程結構なものはない。仁ぢやとか義ぢやとか、禮ぢやとか、そん

な詐偽的言辭を竝べて暗黒世界に住むよりも山青く水清く、空高き此山頂に四方  
を見晴らし、王者氣どりになつて簡易生活を續けて居る位安樂なものはない。何  
せよ靈主體従だとか、慈悲ぢやとか、情とか、道徳とか、下らぬ屁理屈を轉つて  
居るよりも、善惡を超越し、道理を通過して、惟神的風光を樂しみ、安逸に一生  
を送る位、利口なものはないワイ。何といつても一寸先や暗ぢや、此瞬間が吾々  
の自由意志を遂行する黄金時代だ。(唄)「飲めよ喰へよ一寸先や暗よ、酒を飲  
むなら土瓶で沸かせ」土瓶で沸かした酒を飲んで薬罐頭を沸らすのもいいコント  
ラストだ。俺やもうハルナの都のハムにしてやらうと云つても、斯んな自由生活  
を覺えた以上は煩雜な都會へ行つて追従タラダラ虚偽ばかりの生活をするよりも  
俺は此關守ばかりは何時になつても思ひきる事は出来ないワ。

「山に伐る木は澤山あれど

思ひきる氣はないわいな」

とけつかるワイ。アハ、ハ、ハ、

紅葉「オイ春公、毎日日日職務を忘れて酒ばかり喰ひ酔うて居ると冥加が危いぞ。

バラモン教の大黒主は神様だと云つても、人間のサツクを被つてゐるから誤魔化

しはチトはきくが、梵天王大自在天バラモン大神、大國彦命様の御目を晦ます事

は出来ぬぞよ。いい加減に心得ぬと、習ひ性となり、放埒不羈の人間になつて世

の中の爪弾きものにしられてしまふが、それでも構はぬか。困つた奴だな」

春公「放埒不羈の極點に達した春公さまは、實際の事云へば世間から爪弾きされ

てハルナの都に居る所がないので、大黒主様が持て餘し、適材適所といつて、あ

んな「ヤンチャ」はTEAMス峠の關守にするのが匹適だと、あつぱれの御眼力で

御任命なさつたのは、貴様等小人輩の了解すべき限りではないワ、紅葉は紅葉ら

しうして地に這うて沈黙せぬかい。今は何時だと思つてゐる、秋の末で紅葉の葉

の風に叩かれ、地に落ちるシーズンだ。こんな時に浮き出さずにジツとして酒で

も喰つて、秋の時雨の様な涙の雨でも降らしてシーズンで居る方が餘程まだよ」

紅葉「貴様にそんな忠告を受けなくとも、俺は故郷の女房の事を思ひ出してシ」

ズンで居るのだ。(都々逸)「花と月とに間違ふやうな女房もつ身の氣はもみぢ」と云つて貴様のやうな唐變木とはチツと選を異にして居るのだ。一ぺんも女に接した事のない酒喰ひの貴様に、浮世の味が分るものかい、浮いては沈み沈んでは浮み、浮沈み七度の世の中だ。お前等のやうな連中さまは酒より外に慰安してくれるものが無いのだからな」

春公「時に大黒主の神様に對し俺達もチツとは義務と云ふ事を盡さねばならぬが、こんな人通りの無い關守をさされては丸で島流しに遭うたやうなものだから、ツイ燒糞になつて酒をあふるやうになるのだが、鬼熊別の女房蜈蚣姫小絲姫の兩人は何時になつたら此處を、通るだらうかな。ナア雪公、貴様一つ天眼通で考へて

見てくれないか」

雪公「俺は雪の様に、神の様に身魂の清い執着心のない、白紙主義の男だから、腹の中迄水晶だ。それが違ふと思ふなら人込みの中でも、ステーションでも構はぬ、一つ貴様の短刀で俺の血を調べて見い……どこを切つても出る血は紅い、俺の心もその通り……だよ」

春公「コリヤ貴様はいつとも身魂の自慢ばかりしやがつて、肝腎の天眼通は如何するつもりだい。早く天眼通で調べてくれないか。貴様のやうな腰拔でも、こへ連れて来たのは望遠鏡の代用にするつもりだから、早く親子の所在を透視せぬかい。貴様は都を出る時に屹度、チームス峠を近い内に蜈蚣姫と小絲姫が通るに違ひないと大黒主様に申上げよつたものだから、こんな處に關所を拵へて毎日日待たされて居るのぢやないか」

雪公「あの時は天眼通の持合せが大分にあつたが、ここへ來てから貴様等の惡身魂が感染して、サツパリ天眼通が利かぬやうになつて了つたのよ。俺の考へでは此廣い世の中、峠も澤山あるし、二人の母娘が此峠を一代の中に通るとも通らぬとも、見當がつかぬ様になつたワイ」

春公「貴様はさうすると大黒主様を誑つたのだなア。本當に太い奴だ。早く本當の事を吐かぬか」

雪公「ヨシ、こかぬ事はない、太い奴だな」  
と眞黒の尻をまくり上げ春公の前に左巻を捻り出した。

春公「エー糞奴め、糞の間にあはぬ代物だな」

雪公「ひどい奴だ。こけと吐したぢやないか。これでも俺は一生懸命だぞ」

春公「エー仕方ない、穀潰しの製糞器だな」

とぼやいてゐる。そこへ黄金姫、清照姫は驛馬に跨り、二人の男は馬の口をとり、

「ハイハイハイ」と勇ましく登つて来た。

春公と雪公は目を怒らし、

春公「オイ、一寸待つた。其馬をここへ止めエ」

レーブ「ヨシ、止めなら止めましょう。然し乍ら吠面かわかぬやうにせえよ。此

方は貴様等の朝晩探ねて居る鬼熊別の奥様蜈蚣姫様と一人娘の小糸姫様だ。よく

拜んでおけ、目が潰れるぞよ。光芒陸離たる懐剣を呑んでムる八岐の大蛇のやう

な御方だから生命が惜くなければ調べたがよからう」

春公「これやレーブ、そんな嘘を吐しても承知せないぞ。人を盲にするにも程が

ある。そいつア化物ぢやないか。目の玉が五つも六つもあり口が又四つも五つも

ある化物を馬に乗せよつて、蜈蚣姫も小糸姫もあつたものかい。早く通れ、貴様

が出て来ると此關小屋までが頻りに廻轉を始め出した。此坂道迄が上になり、下になり地異天變の大騒ぎだ。早うここを通過せぬかい。氣味が悪いワイ。俺の探して居るのは、そんな化物の婆アや娘ぢやない。眞正銘の蜈蚣姫、小絲姫だ」

レーブ「化物だからここに下してやらうと云ふのだ。随分神變不思議の藝當をやりよるぞ。まあ一つ首筋でも掴んで此谷底へでも「プリン プリン ドスン、キヤーツ」とやつて貰へよ。イヒ、ゝゝゝ」

春公「コラ、レーブ、可笑しさうに何だ。妙な笑ひ聲を出しよつて、俺の頼みぢやからトツトと此處を通過してくれ、俺は暫く目を塞いでゐるから……」

レーブ「さう吐しや仕方がない、俺も同じ信者の厚誼で貴様の要求を無下に拒絶する譯にも行かないから、特別を以て貴様の嘆願を許容してやる。モシモシ蜈蚣姫様、小絲姫様、關守があやうにいつて嘆願しますから、貴女も手荒いことをせずに許してやつて下さい。小絲姫様の武勇を發揮されやうものなら此奴等五人の笠の臺は飛んで了ふのみならず、四肢五體メチャメチャになりますから。人を助けるのは宣傳使の御役、今日ばかりは見逃し、聞逃しを彼等五人に代つて、レー



ブがお願い致します

黄金姫「許し難き關守なれどもお前の願ひによつて苛める事だけは止めてやらう。其代りにレーブ、お前も一杯關守の酒を頂戴して元氣をつけて行つたらよからうぞ」

レーブ「何と氣の利いたお客さまだこと。オイ春公、賄賂だ。見逃し賃に其徳利を一本貸せ、グツグツ吐すと此馬は一寸も動かないぞ」

春公「徳利一本で宜しいか。二人の馬方ならば二つ要りませう」

レーブ「何とまあ、氣の利いたもの同志の寄合だ。お客さまもお客さまなら關守も關守だな。そんなら氣の毒なれど二本頂戴して行かう。道々「トツクリ」と飲

んでお供をしようかい」

と春公の突き出す二本の徳利を受取り「ハイハイハイハイ」

レーブ「エーこん畜生、屁ばかり垂れよつて、臭いワイ。オイ皆の關守、これでヤツト安心しただらう。何事も羽織の紐だ、皆胸にある。以心傳心教外別傳、云

はぬは云ふにいやまさる。俺の雅量も分つただらうな」

春公「オイ、レーブ、春公さまの雅量も買つてくれるだらうな」

レーブ「恐怖心に驅られ仕様ことなしの雅量だ。チツとお粗末ぢやけど、こんな處で荒仕事するのも面倒だから、粗製濫造品の雅量を酒二升の熨斗をつけて買つ

てやらう。ハイハイハイ」

と馬をいましめ乍ら坂道を下り行く。

春公はヤツと胸を撫で下ろし、

「アア、ドテライ奴が、やつて来よつて、ビツクリ蟲が飛出し、肝玉が洋行する處だつた。鞆玉の奴、俺にこたへもなしに何處かへ消滅して了ひよつたな」

雪公「俺も鞆丸の所在が分らなくなつて了つた。一方の鞆丸は婆なり、一方は娘だ。何處へ取り逃がしたか残念な事をしたワイ。折角チームス峠でピツタリ出會

ひ乍ら、日頃の元氣は何處へやら鞆丸の奴三十六計の奥の手を出して、何處かへ姿をかくすものだから、此雪公さまも手の出しやうが無く、殆ど【ゆき】詰りだ。

オイ紅葉、貴様の鞆丸は大丈夫かな」

紅葉「大丈夫だ。よつぽど俺とは利口なと見えるワイ。俺の金助は矢張り君子だ

なア。危あやふきに近ちかよらずと云いつて逸いちはや早く飛ひかう行せん船せんへ乗のつて天てん國ごくへ避ひ難なんしよつたらしいワイ。アハ、ハ、ハ、

雪公ゆきこう「あれこそ、本ほん當たうの蜈蚣むかで姫ひめ、小こ絲いと姫ひめに違ちがひないのう。然しかし乍ながらどこともなしに威あ嚴げんが備そなはり面おもてを向むける事ことも出で來きないやうな神しん力りきが輝かがいて居あるので、一ひと目め見みるなりギヨツとしたよ。到たう底てい俺おれ等たちの手てにあふ代しろ物ものぢやないワ。然しかし乍ながら俺おれの天てん眼がん通つうはヤツパリの中てきちうしただらう」

春公はるこう「コラコラ、これ限きり何なにも云いうてはならないぞ。肝かん腎じんの目もく的てき物ぶつを見みす見みす取とり逃にがしたのだから、こんな事ことが見み付つかつたら忽たちまち罷ひの字じと免めんの字じだ。只ただ今いま限かぎり沈ちん黙もくを嚴げん命めいする」

雪公ゆきこう「アハ、ハ、ハ、日ひ頃ころの業ごふ託たくに似にず、何ど奴いつも此こ奴いつも猫ねこに出で會あうた鼠ねずみの樣やうなスタイルで其その態ざまつたら見みられたものぢやないわ。大おほ黒くろ主ぬし樣さまもこんな厄やく介かいな代しろ物ものを抱かかへて居あちや本ほん當たうにお氣きの毒どくだ。前ぜん途とが思おもひやられるワイ。ウフ、ハ、ハ、

今いま迄まで空そらを包つつんで居あいた淡たん雲つんはカラリと晴はれて小こ春はるの太たい陽やうは手て嚴きびしく酒さけに醉ようた五ご人にんの頭あたまを金かな槌づちで叩たたく樣やうにガングンと照てらさせ給たまうた。五ご人にんは頭あたまを抱かかへ、ウンウン

と呻うめき乍ながら其場そのばに蹲しゃがんで了しまった。

（大正一一・一〇・二九 舊九・一〇 北村隆光録）

第一章 玉山嵐（一〇八四）

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

秋野あきのを彩いろどる黄金姫わうこんひめの

神かみの司つかさを初はじめとし

月日つきひも四方よもに清照姫きよてるひめの

貴うづの命みことと只ただ二人ふたり

雲くもつく山やまを駒こまに乗り

漸やっやく頂上ちやうじやうにいざり着つき

二人ふたりの馬子まごに送おくられて

胸突坂むなつきざかを下くだりつつ

夜よを日ひについでフサの國くに

ライオン河がはに着つきにける。

レーブ「モシ奥様、ここが有名な波斯のライオン河でムいます。橋梁は無し、如何しても馬で越さねばなりません。私は馬丁の事ですから、向ふへ泳ぎ渡りを致します。どうぞ此馬に乗つて向ふ岸へお渡り下さい。水馬に乗るのはお心得でせうが、馬の腹帯を緩め、手綱を一方の手にグツと握り、一方の手を放して、馬も人も水に浮き綱と鬣とを一緒に握つて渡らねば、河の真ん中で溺没する虞があります、其積で渡つて下さい」

黄金姫「私もエデンの河で水馬を稽古した覺がある、私は大丈夫だが、清照姫はまだ水馬の経験がないから案じられたものだ。何とか良い工夫はあるまいかな」  
清照姫「決して決して御心配下さるな、私も地恩城に於て時々エーリス河に馬を馳せ、水馬の遊びをやつた経験があります」

黄金姫「ア、それなら安心だ、サア用意に取かからう」

レーブ「其儘にしてみして下さい、腹帯を私が緩めます」

と河渡りの準備を整へ、レーブは兩馬の尻を鞭にて力限りにぶちすゑた。驛馬は躍り上つて、さしもの激流にザンブと計り飛込み、首丈を現はして難なく横巾一

里許りの大河を向ふへ渡つて了つた。二人の馬子は馬の後に従つて漸く向岸に渡りつき、各自に着衣を絞り、馬を休養させてみた。

其處へ數十人の部下を引つれてやつて来たのは大黒主の股肱と頼む釘彦、久米彦の兩人である。采配を打振り打振り、荒馬に跨つてライオン河の岸を目がけて一目散にかけ來り、その勢に乗じて、ザバザバと數十騎の騎馬隊は黄金姫一行の姿に目もかけず、向岸へ渡つて了つた。レーブは之を眺めて胸なでおろし、「ア、大變な事になる所だつたが、神様のおかげで貴女を搜索してゐる釘彦の隊は向ふへ渡りました。併し乍ら彼奴は先鋒隊に違ひありません。まだまだ油斷はなりません。浮木の森の失敗を回復せむと、大軍を引つれてやつて來たのでせう、言はば今渡つた奴は斥候兼先鋒隊のやうな役まはりです。これから此處に馬を棄てて乞食の姿に化けて無事に難關を通過し、タルの港まで参りませう」

清照姫「レーブ、さう心配するには及ばぬ。吾々には尊き神の御守りがある。無  
限絶對無始無終の神力を具備し玉ふ國治立命の厚き御守りあれば如何なる敵も決  
して恐るるには及びますまい。臆病風に襲はれ、水禽の羽音に驚くやうな愚を學

んでは、宣傳使としての貫目はゼロです。ナアお母アさま、汚らはしい乞食の風なんかして行くよりも、正々堂々と三五教の宣傳歌を歌ひ、四邊の木魂を響かせ乍ら進まうぢやありませんか」

黄金姫「お前の言ふ通り、心が弱くては猛獸の猛び狂ふ荒野ケ原を横斷する事は出来ない。レーブ、お前はモウこれから歸つてくれ、イヤ自由行動を取つたがよかる、萬一途中に於て、數萬の敵に出會した時は足手纏になつて、却て味方の不利だから……」

レーブ「モシ奥様、それは餘り慘酷ぢやありませんか、私をここまでお供さしておき乍ら、見限り遊ばしたのぢや御座いませぬか。何と仰有つても足の續く丈はお供を致します」

黄金姫「凡て戦といふものは大多數の味方を以て敵に向ふか、さなくば只一人敵に向つて突き入る方が大變な利益だ。獅子奮迅の勇氣を揮ふには一人に限る、手當り次第、斬つた奴は皆敵だ。餘り慌てて味方を斬りはせぬかといふやうな氣遣ひがあつては、到底充分の活動は出来ない、こここの道理を聞分けて、どうぞ別れ

て下さい。ハルナの都でお目にかからうから……」

レーブ「あなたは一人の方が良いと仰有つたが清照姫様は如何なさるのですか」

黄金姫「清照姫は女だから、何程戦の中でも目につき易い、メツタに同士討をす

る氣遣ひはないが、お前等二人は男だから、モシ間違つてお前を斃してもしやう

ものなら大變だ。喧嘩は一人が最も利益だ。鬼熊別の女房蜈蚣姫や、娘の小絲姫

はバラモン教の寄手に對し、馬丁に加勢をさしたといはれては、末代まで武勇の

汚れになる。どうぞ頼みぢやから別れて下さい」

レーブ「さやうならば是非に及びませぬ、お別れ致しますせう。併し主従の縁は切

らぬやうに願ひます」

黄金姫「互に了解した上の別れだから安心して下さい、決してお前は捨てませぬ

から……」

レーブ「ハイ有難う、左様なれば、ここでお別れ致します。随分道々氣をつけて

お出でなさいませ。お姫様左様なれば、奥様のお身の上をどうぞ御注意下さいま

すやうに」



清照姫「ハア宜しい、氣遣ひしてくれな、私が附いて居れば大丈夫だ、否々神様が  
がついて御座るから、大磐石だよ。サアお母アさま参りませう」  
と先に立つて進み行く。後にレーブは二人の姿のかくるまで見送つてゐた。一  
人の馬子は物をも言はず、何に感じてか、傍の森林に手早く姿をかくした。レー  
ブは雙手を組んで、獨言を言つてゐる。

「ア、又私は一人になつて了つた。よくよく連に縁の無い男だなア、併し乍らど  
うも奥様や姫様の事が氣に掛つて仕方がないワ。ハテ如何したらよからうかなア」  
と雙手を組み大地に胡坐をかいて、俯むいたまま首を左右に振つてゐる。

かくする所へ以前向ふへ渡つた騎馬隊の内二三人の男、一鞭あてて再び河に飛  
込み此方を指して渡り来る。レーブは……「ハテ不思議だ、無事に此處を渡りよ  
つたと思つたら、釘彦の奴、奥様や嬢様の姿を見つけ、召捕らむと引返して來よ  
つたのだらう。逃げた所で仕方がない、此方は徒歩だ、向ふは馬上、到底追つ  
かれずには居られない。それよりも自分がここに頑張つて、彼等の行進を妨げ、  
お二人様が一足でも敵に遠ざかり遊ばすやうに、暇取らせるのが俺の務だ。こん

な事があらうとて、奥様は別れてくれと仰有つたのだなア、なんと偉いものだなア。矢張凡人とはどことはなしに變つてゐるワイ………」

と感心し乍ら一人呟いてゐる。そこへ三人の騎馬武者、蹄の音をカツカツと響かせ乍ら進み来り、レーブの姿を見て、

「オイ、其方が今ここで話して居つた女は何者であつたか、逐一陳述致せ」

レーブは何とか言つて暇を取らせようと思ひ、ワザと空呆けて、

「ハイ、何でも人間の様でムいました」

武士「馬鹿、そんな事を尋ねてゐるのぢやない、何といふ女だかそれを聞かせといふのだ」

レーブは暫く思案をして漸くに顔をあげ、ポカンとした阿呆面をさらして、

「ハイ、婆アといふ女と娘といふ女と二人通りました」

武士「馬鹿な奴だなア、姓名は何と申すか」

レーブ「ハイ、姓名ですか、姓名は生命と申します。命あつての物種、お前さまも一つここで一服しなさい、長い月日に短い命だ、生命が肝腎だよ。清明無垢の

尊たふとき神かみのお道みちに仕つかへ玉たまふバラモン教けうの神司かむつかさぢやありませんか

武士ぶし「エ、辛氣しんきくさ臭くさい、貴様きさまは天下一品てんかいつびんの馬鹿者ばかもんだな」

レーブ「ハイ、馬うまの上うへに鹿しかが乗のつて居をります、それは鹿馬者かばものと申まをします。鹿しかの上うへに馬うまが乗のつた奴やつが馬鹿者ばかもんです」

武士ぶし「エ、グツグツしてゐると、時ときが遅おくれては一大事いちだいじだ」

と駒こまに鞭むちうち驅かけ出ださうとするを、レーブは先頭せんとうに立たつた馬うまの轡くつわをグツと握にぎり、

「一寸待ちよつとつて下ください、こんな細ほそい道みち、さうあわてると危あぶなうムいますで、何なんなら

馬うまを此處ここに乘のり棄すててお上のぼりなさつたらどうですか、此この山やまは中々なかなかキツイ山やまで馬うま

が迂すべりこけた途端とたんに、あなたも一緒いっしょに谷底たにそこへでも落おちようものなら、それこそ大

變へんです。最前さいぜんの婆ばアといふ女をんなも、ここに馬うまを乘のり棄すてて上のぼつた位くらいですから……」

武士ぶし「何なんと言いつても人間にんげんが歩あるくより馬うまの方が早はやい、グツグツしてると、女をんなを見失みうしな

つちや大變たいへんだ。ヤアお二方ふたかた、私わたしに構かまはず、さきへ馬うまで行いつて下ください、二人ふたりの姿すがたを

見失みうしなはぬ内うちに……」

レーブ「ハ、ハ、ハ、先さきへ行ゆかうと言いつたつて、こんな羊腸やうちやうの小路こみち、而しかも胸突坂むなつきざかと

來てゐるのだから、先の馬が止つた以上には乗越す譯には行きますまい。此馬は  
レーブさまが轡を握つた以上は、一時計りは微軀とも動かさぬのだ。其間に逃げ  
て下さると良いのだけれどなア」

と小聲に呟く。

武士「エ、仕方のない奴だ、各方、ここに馬をつないで一走り、追っかけませう  
か」

レーブ「ア、さうなされませ、その方が餘程安全で宜しい。併しあんな婆アや  
娘を追っかけて如何なさる御考へですか、大方あなたはあの婆アや娘を蜈蚣姫、  
小絲姫様だと思つて、追っかけてお出でなさるでせう。それならばお止めになさ  
つた方がよかる、實は私も鬼熊別様の家來で、母子の顔を見覚えてゐるのを幸ひ、  
旦那様から女房や娘を捜して來たならば、褒美は望み次第と仰有つたので、ここ  
迄捜しに參りました。所がよう似た婆、娘だと思ひ、出世をする時節が來たのだ  
と、雀躍りし乍ら、河を横切り渡つて來て見れば、豈計らむや、妹計らむや、一  
目見てもゾツとするやうな、人品骨柄の卑しい菊石だらけの蝨の這うた糞婆に乞

食娘、イヤもう私もガツカリして了ひました。こんな約らぬ事はムいませぬ。あの母子が果して蜈蚣姫、小糸姫さまならば、私は手柄になるのだから、あなた方のお力を借つて一緒に捉へたいのだが、餘りの事に呆れて、婆アの頭を三つ四つからはし、乞食娘の尻を擲りつけて、オイオイメソと吠面かわかせおき、ここに呆然として失望落膽の淵に沈んでる所でムいます」

武士「お前は鬼熊別様の部下の者だなア、矢張鬼熊別様も女房子の行方を尋ねてゐられるのかなア」

レーブ「そらさうでせうかい、天にも地にも一人よりない女房や娘が居らなくては、何程御出世をなさつても世の中が淋しい、妻子に憧憬れ遊ばすのは尤もでせう」

武士「如何にもさうだ、お前の言ふ通ならば、彼等母子は鬼熊別様の女房子ではあるまい、エーエ、要らぬ苦勞をして河を渡つたものだ、ヤアお邪魔をした。お二方、コレから元へ引返しませう」

と馬背に鞭打ち、勢に乗じて、ライオン河を驀地に三騎首を竝べて渡り行く。

後見送つてレーブは大口をあけ、

「アツハ、ハ、イヒ、ハ、ウフ、ハ、何とマア、神様の御仕組は大したものだナ。結構な手柄をさして下さつた。何事も伶俐巧出しては失敗るぞよ、阿呆になつてゐて下されよといふ、三五教の神諭が今更の如く思ひ出されて有難いワイ。世の中は阿呆になつてゐるに限る、大賢は愚なるが如し、愚者は賢人の如しとは此處のことだ。俺も天下第一品の極端な阿呆になつて、眞の智慧を働かすことが出来た。ヤア辱ない此役目が濟んだ以上は、これより後追つかけて、奥様や嬢様について行つても、何とも仰有るまい、ヤア大分に時も経つた、モウ餘程行かれただらう。

サア急がう」

と獨言いひ乍ら一目散に峻坂をかけ登り、峠に佇み、ハハハハと息を休め、

レーブ「あれ丈の敵を甘く撒散らし、拔群の功名手柄を現はして此山頂に登りつめ、四方の景色を見下ろす時の心持は又格別だ。サアもうこれから下り坂、走るまいと思つても走れるワイ、併し乍ら餘り屈曲があるから勢に任して谷底へでも

飛とび込こんぢや堪たまらない。一ひとつ足あし拍び子やうしを取とつておりてやらうかな  
と帯おびを締しめ直なほし鉢はち巻まきをグツと固かため、兩りやう手ての拳こぶしをグツと握にぎり爪つまさき先さきまで力ちからを入いれ、ボ  
ツボツと下くだり出だした。レーブは道みち々みち歌うたふ。

ウントコドツコイ玉たま山やまは 小ちひさい峠たうげといひ乍ながら

意い外ぐわいにキツイ坂さか路みちだ 男をとこでさへも此この通とほり

歩あゆみに困こまる坂さか路みちを さぞや奥おくさまお嬢ぢやうさま

困こん難なん遊あそばしましたらう お道みちの爲ためとは云いひ乍ながら

鬼おに熊くま別わけの奥おく様さまと ならせ玉たまひし身みを以もつて

荒あ野らのを渡わたり川かはを越こえ いろいろ雑ざつ多たと御ご艱かん難なん

御ご苦く勞らうなさるも神かみの爲ため 世よ人びとの爲ためと聞きくからは

感かん謝しゃの涙なみだが湧わいて來くる 鬼おに熊くま別わけの神かみ様さまに

大だい事じに大だい事じにされた俺おれ 御ご恩おん返がへしの萬まん分ぶ一いち

何い時つしか報むくはななるまいと 思おもひつめたる眞ま心ごころが

いよいよ現はれ出づる時

あゝ惟神々々

神の守りの深くして

お二方をば初めとし

レープの奴も諸共に

何卒無事に月の國

ハルナの都へ易々と

「ウントコドツコイきつい坂」

勢餘つて谷川へ

スツテンコロリと落ちかけた

歸らせ玉へバラモンの

梵天帝釋自在天

大國彦の御前に

愼み敬ひ願ぎ奉る

ライオン河を横わたり

奥様嬢様お二人に

暇を貰つた怪訝顔

面ふくらしした時もあれ

大黒主に仕へてる

釘彦久米彦兩人が

手下の奴ばら只三人

驛馬に鞭ち荒河を

渡り來れる恐ろしさ

此奴あテツキりお二人の

姿をみとめて捉へむと

やつてうせたに違ない

一時なりと暇取らせ

お二人様を安全に





あゝ面白い面白い 一伍一仕の有様を

お二人様にこまごまと 報告申し上げたなら

キツと喜びなさるだろ これが第一楽しみだ

あゝ惟神々々 御霊幸はひましませよ

と歌ひつつ、ドンドンドンと地響うたせ、さしもの峻坂を矢を射る如く下つて行く。道端の岩に母子二人が腰打かけ、息を休めてゐるのも気がつかず、大聲に嘸鳴り乍ら下り行くのを、黄金姫は、

「オーイオーイ レーブ暫く待て」

と大音聲に呼び止めた。此聲を聞くよりレーブは驚いて止まらうとすれども、急坂を下り切つた速力の情力は容易に止まらず、十間許りズルズルと石道に體を止めようとして倒れ、轉げ落ち「アイタタ」と顔をしかめ、腰のあたりを撫で乍ら、  
「工子工子と二人の前に引返し來り、  
「奥様嬢様、有難うございました」

黄金姫「ア、御苦勞であつたなア、私もお前がキツと追返しただろと思つて、ここに悠くりとお前の來るのを待つてゐたのだ。一人の馬方は甘く【まい】ただらうなア」

レーブ「ハイ自分の方から勝手に森林の中へ沈没して了ひました。三人の騎馬の士が奥様嬢様を捉へむと、再び河を渡つてやつて來ましたが、俄に私は馬鹿となつて甘く追つ返してやりました」

黄金姫「ア、さうだろ、お前の身魂を見込んであゝ言つたのだ。本當の事を云つてやりたかつたが、怪しい奴がついてゐたので、あんなスゲない事を言つたのだから、氣を悪うせないで置いて下さい」

レーブ「どうしてどうして御勿體ない、氣を悪う致しませうかい、サア是から参りませう」

と話す折しも、吹來る風につれて聞え來る人馬の物音、金鼓の響、矢叫びの聲、物凄くも此方に向つて進み來る。黄金姫は立上り、

「サアこれからが本當の神軍と魔軍との戦争だ。清照姫用意をなされ。レーブ、

覺悟はよいか………<sup>かくご</sup> 卍

(大正一一・一〇・二九 舊九・一〇 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・一〇 王仁校正)

附録 大祓祝詞解<sup>おほはらひのりとかい</sup>

(一)

大祓祝詞は中臣の祓とも稱へ、毎年六月と十二月の晦日を以て大祓執行に際し、<sup>おほはらひのりと なかとみ はらひ とな まいねんろくぐわつ じふにぐわつ みそか もつ おほはらひしつかう さい</sup>  
中臣が奏上する祭文で延喜式に載録されてある。<sup>なかとみ そつじやう さいぶん えんぎしき さいろく</sup>

從來此祝詞の解説は無數に出て居るが、全部文章辭義の解釋のみに拘泥し、其<sup>じうらいこのりとかい せつ むすう で あ ぜんぶぶんしやうじぎ かいしやく こつてい ほんぶん なか</sup>  
中に籠れる深奥の眞意義には殆ど一端にさへ觸れて居ない。甚だしきは本文の中<sup>なか こも しんあう しんいぎ ほとん いったん ふ あり かなは ほんぶん なか</sup>  
から「己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、<sup>おの はをか つみ おの こをか つみ はは こをか つみ はは こをか つみ はは こをか つみ</sup>

畜犯せる罪<sup>つみ</sup>の件<sup>くだり</sup>を削除<sup>さくじよ</sup>するなどの愚劣<sup>ぐれつ</sup>を演<sup>えん</sup>じて居<sup>ゐ</sup>る。自己<sup>じこ</sup>の淺薄<sup>せんぱく</sup>卑近<sup>ひきん</sup>なる頭腦<sup>づなう</sup>を標準<sup>へつじゆん</sup>としての輕學<sup>けいきよもつどう</sup>妄動<sup>もうどう</sup>であるから、神界<sup>しんかい</sup>でも笑<sup>わら</sup>つて默許<sup>もくきよ</sup>に附<sup>ふ</sup>せられて居<sup>ゐ</sup>るのであらうが、實<sup>じつ</sup>は言語<sup>ごんご</sup>道斷<sup>どうだん</sup>の所爲<sup>しよゐ</sup>と云<sup>い</sup>はねばならぬ。大祓祝詞<sup>おほはらひのりと</sup>の眞意<sup>しんいぎ</sup>義<sup>ぎ</sup>は古事記<sup>こじき</sup>と同様に、大本言靈學<sup>おほもとげんれいがく</sup>の鍵<sup>かぎ</sup>で開<sup>ひら</sup>かねば開<sup>ひら</sup>き得<sup>え</sup>られない。さもなければ古事記<sup>こじき</sup>が一の幼稚<sup>えうち</sup>なる神話<sup>しんわ</sup>としか見<sup>み</sup>えぬと同様に、大祓祝詞<sup>おほはらひのりと</sup>も下<sup>くだ</sup>らぬ罪惡<sup>ざいあく</sup>の列擧<sup>れつきよ</sup>、形容詞澤山<sup>けいようしたくさん</sup>の長文句位<sup>ながもんくうゐ</sup>にしか見<sup>み</sup>えない。所<sup>ところ</sup>が一旦<sup>いつたん</sup>言靈<sup>ことたま</sup>の活用<sup>くわつよう</sup>を以<sup>もつ</sup>て其秘奧<sup>そのひあく</sup>を開<sup>ひら</sup>いて見<sup>み</sup>ると、偉大<sup>ゐだい</sup>と云<sup>い</sup>はうか、深遠<sup>しんゑん</sup>といはうか、ただただ驚嘆<sup>きやうたん</sup>の外<sup>ほか</sup>はないのである。我國體<sup>わがこくたい</sup>の精華<sup>せいくわ</sup>が之<sup>これ</sup>によりて發揮<sup>はつき</sup>せらるるは勿論<sup>もちろん</sup>のこと、天地<sup>てんち</sup>の經綸<sup>けいりん</sup>、宇宙<sup>うちう</sup>の神祕<sup>しんぴ</sup>は精<sup>くは</sup>しきが上<sup>うへ</sup>にも精<sup>くは</sup>しく説<sup>と</sup>かれ、明<sup>あきり</sup>かなる上<sup>うへ</sup>にも明<sup>あきり</sup>かに教<sup>をし</sup>へられて居<sup>ゐ</sup>る。之<sup>これ</sup>を要<sup>えう</sup>するに皇道<sup>かうだう</sup>の眞髓<sup>しんずゐ</sup>は大祓祝詞<sup>おほはらひのりと</sup>一篇<sup>いつぺん</sup>の裡<sup>うち</sup>に結晶<sup>けつしやう</sup>して居<sup>ゐ</sup>るので、長短粗密<sup>ちやうたんそみつ</sup>の差異<sup>さいい</sup>こそあれ、古事記<sup>こじき</sup>、及び大本神諭<sup>おほもとしんゆ</sup>と其内容<sup>そのないよう</sup>は全然符節<sup>ぜんぜんふせつ</sup>を合<sup>が</sup>つするものである。言靈<sup>ことたま</sup>の活用<sup>くわつよう</sup>が殆<sup>ほとん</sup>ど無盡藏<sup>むじんざう</sup>である如<sup>ごと</sup>く、大祓祝詞<sup>おほはらひのりと</sup>の解釋法<sup>かいしやくはふ</sup>も無盡藏<sup>むじんざう</sup>に近<sup>ちか</sup>く、主要<sup>しゆえう</sup>なる解釋法<sup>かいしやくはふ</sup>丈<sup>だけ</sup>でも十二通り<sup>じふにとほ</sup>あるが、成<sup>な</sup>るべく平易簡單<sup>へいいかんたん</sup>に、現時<sup>げんじ</sup>に適切<sup>てきせつ</sup>と感<sup>かん</sup>ぜらるる解釋<sup>かいしやく</sup>の一箇<sup>ひとつ</sup>をこれから試<sup>こころ</sup>みようと思<sup>おも</sup>ふ。時運<sup>じうん</sup>は益々<sup>ますます</sup>進展<sup>しんてん</sup>し、人<sup>ひと</sup>としての資格<sup>しかく</sup>の

有無を問はるべき大審判の日は目前に迫つて居るから、心ある讀者諸子は、これを讀んで、眞の理解と覺醒の途に就いて戴きたい。

(二)

「高天原に神つまります、皇親神漏岐、神漏美の命もちて、八百萬の神等を神集へに集へ賜ひ神議りに議り玉ひて、我皇孫命は豐葦原の水穗の國を、安國と平けく所知食と事依し奉りき」

【高天原に】 「タカアマハラ」と讀むべし、從來「タカマガハラ」又は「タカマノハラ」と讀めるは誤りである。古事記卷頭の註に「訓高下【天】云阿麻」と明白に指示されて居り乍ら從來何れの學者も之を無視して居たのは、殆ど不思議な程である。一音づつの意義を調べれば、【タ】は對照力也、進む左也、火也、東北より鳴る聲也、父也。又【カ】は輝く也、退く右也、水也、西南より鳴る聲也、母也。父を「タタ」といひ、母を「カカ」と唱ふるのもこれ

から出るのである。又【ア】は現はれ出る言霊、【マ】は球の言霊、【ハ】は開く言霊、【ラ】は螺旋の言霊。即ち「タカアマハラ」の全意義は「全大宇宙」の事である。尤も場合によりては全大宇宙の大中心地帯をも高天原と云ふ。所謂宇宙に向つて號令する神界の中府所在地の意義で「地の高天原」と稱するなどがそれである。この義を擴張して小高天原は澤山ある譯である。一家の小高天原は神床であり、一身の小高天原は、臍下丹田であらねばならぬ。ここでは後の意義ではなく、全大宇宙其物の意義である。之を従来は、地名であるかの如く想像して、地理的穿鑿を試みて居たのである。

【神つまります】 【かみ】は日月、陰陽、水火、靈體等の義也。陰陽、水火の二元相合して神となる。皇典に所謂産靈とは此正反對の二元の結合を指す。日月地星辰、神人其他宇宙萬有一切の發生顯現は悉くこの神秘なる産靈の結果でないものはない。又【つまり】とは充實の義で、鎮坐の義ではない。【ます】はましますと同じ。

【皇親】 【皇】（スメラ）は澄すの義、全世界、全宇宙を清澄することを

指す。【親】（ムツ）は「ムスビ【ツ】ラナル」の義で、即ち連綿として繼承さ  
るべき萬世一系の御先祖の事である。

【神漏岐】、【神漏美】 神漏岐は靈系の祖神にして天に屬し、神漏美は體  
系の祖神にして地に屬す。即ち天地、陰陽二系の神々の義である。

【命もちて】 命（ミコト）は神言也、神命也。即ち水火の結合より成る所  
の五十音を指す。元來聲音は「心の柄」の義にて、心の活用の生ずる限り、之を  
運用する聲音が無ければならぬ。心（即ち靈魂）の活用を分類すれば、奇魂、荒  
魂、和魂、幸魂の四魂と之を統括する所の全靈に分ち得る。所謂一靈四魂である  
が、此根源の一靈四魂を代表する聲音はアオウエイの五大父音である。【宇宙根  
本の造化作用は要するに至祖神の一靈四魂の運用の結果であるから】、【至祖神  
の御活動につれて必然的にアオウエイの五大父音が先づ全大宇宙間に發生し】、  
【そして其聲音は今日といへども依然として虚空に充ち満ちて居るのだが、餘り  
に大なる聲音なので】、【餘りに微細なる聲音と同様に】、【普通人間の肉耳に  
は感じないまでである】。併し餘り大ならざる中間音は間斷なく吾人の耳朶に觸



れ、天音地籟一として五大父音に歸着せぬは無い。鎮魂して吾人の靈耳を開けば、  
 聽こゆる範圍は更に更に擴大する。切前にも述ぶるが如く、聲音は心の柄、心の  
 運用機關であるから天神の一靈四魂の活用が複雑に赴けば赴く丈、聲音の數も  
 複雑に赴き停止する所はない。其中に在りて宇宙間に發生した清音のみを拾ひ集  
 むれば四十五音（父母音を合せて）濁音、半濁音を合すれば「七十五音」である。  
 これは聲音研究者の熟知する所である。拗音、促音、鼻音等を合併すれば更に多  
 數に上るが、要するに皆七十五音の變形で、あらゆる音聲、あらゆる言語は根本  
 の七十五聲音の運用と結合との結果に外ならぬ。「されば宇宙の森羅萬象一切は  
 是等無量無邊の音聲即ち言靈の活用の結果と見て差支ない」。これは人間の上に  
 照して見ても其通りである事がよく分る。人間の心の活用のある限り、之を表現  
 する言靈がある。「進め」と思ふ瞬間には其言靈は吾人の身體の中府から湧き、  
 「退け」と思ふ瞬間にも、「寢よう」と思ふ瞬間にも、「行らう」と思ふ瞬間に  
 も、其他如何なる場合にも、常に其言靈は吾人の中心から湧出する。即ち人間の  
 一舉一動悉く言靈の力で左右されるといっても宜しい。従つて言靈の活用の清純

で、豊富な人程其の使命天職も高潔偉大でなければならぬ。

【八百萬の神等】 萬百のやは人、ホは選良の義、萬は澤山、多數の義である。

【神集へに云々】

神の集會で神廷會議を催すことである。

【我皇御孫之命】

五十音の中で【ア】は天系に屬し、【ワ】は地系に屬す。

故に至上に冠する時に【我】は【ワガ】と言はずして【アガ】といふ也。【皇】

(スメ)は澄し治め、一切を見通す事、【御】(ミ)は充つる、圓満具足の義、

【孫】(マ)はマコトの子、直系を受けたる至貴の玉體。【命】は體異體別の義、

即ち獨立せる人格の義にして、前に出でたる命(神言)から發足せる第二義である。

全體は單に「御子」といふ事である。元來靈も體も其根本に溯れば、皆祖神

の賜、天地の賜である。故に皇典では常に敬稱を附するを以て禮となし、人間に

自他の區別は設けられてないのである。

【豐葦原の水穗國】

全世界即ち五大洲の事である。之を極東の或國の事と

せるが從來の學者の謬見であつた。日本を指す時には、豐葦原の中津國、又は根

別國などと立派に古事記にも區別して書いてある。

【所知食】

は衣食住の業を安全に示し教ふる事を云ふ。地球は祖神の御體

であるから、人間としては土地の領有權は絶対に無い。例へば人體の表面に寄生する極微生物に人體占領の權能がないのと同様である。人間は神様から土地を預り、神様に代りて之を公平無私に使用する迄である。【うしはぐ】（領有）ものは天地の神で主治者は飽迄「知るしめす」であらねばならぬ。國土の占領地所の獨占等は、根本から天則違反行爲である。神政成就の曉には獨占は無くなつて了ふ。

（大意）全大宇宙間には陰陽二系の御神靈が實相充塞しそれは即ち一切萬有の父であり又母である。陰陽二神の神祕的産靈の結果は先づ一切の原動力とも云ふべき言靈の發生となつた。所謂八百萬の天津神の御出現であり、御完成である。天界主宰の大神は云ふまでもなく天照皇大神様であらせらるるが、其次ぎに起る問題には地の世界の統治權の確定である。是に於て神廷會議の開催となり其結果は天照大神様の御靈統を受けさせられた御方が全世界の救治に當らるる事に確定し、

治國平天下の大道を執行監督さるべき天の使命を帯びさせらるる事になつたのである。無論人間の肉體は世に生死往來するを免れないが、其靈魂は昔も今も變ることなく千萬世に亘りて無限の壽を保ちて活動さるのである。

(三)

かく依さし奉りし國中に荒振神等をば、神問はしに問はし玉ひ、神掃ひに掃ひ給ひて、語問ひし磐根樹根立草の片葉をも語止めて、天之磐座放ち、天之八重雲を伊頭の千別に千別て、天降し依さし奉りき。

【荒振神】 天界の御命令にまつるはぬ神、反抗神の意である。

【神問はしに云々】 神の御會議。罪あるものは神に向ひて百萬遍祝詞を奏上すればとて、叩頭を續くればとてそれで何の效能があるのではない。況んや身欲信心に至つては、言語道斷である。神様に御厄介を懸けるばかり、碌な仕事もせぬ癖に、いざ大審判の開始されむとする今日、綾部を避難地でもあるが如くに

かんが 考ふるやうな穿き違ひの偽信仰は、それ自身に於て大罪惡である。神は先づ其様な手合から問はせらるるに相違ない。

【神掃ひに云々】 掃ひ清むること、神諭の所謂大掃除大洗濯である。

【語問し】 諸々の罪の糾弾である。

【磐根樹立】 草の枕詞、即ち磐の根に立てる樹木の、その又根に立てる草

の義。

【草の片葉】 草は青人草、人のこと、又片葉は下賤の人草の意である。

【語止めて】 議論なしに改悟せしむるの意である。

【天之磐座放ち】 磐座は高御座也、【いは】も【くら】も共に巖石の義。

放ちは離ち也。古事記には、「離天之石位」とあり。

【八重雲】 彌が上にも重なりたる雲。

【伊頭の千別に云々】 伊頭は稜威也。即ち鋭き勢を以て道を別けに別けの

義。

【天降し依さし奉りき】 『天降し……の件を依さし奉りき』の義にて中間

に神秘あり。【天降し】は天孫をして降臨せしむる事、換言すれば天祖の御分靈を地に降し、八百萬の國津神達の主宰として神胤が御發生ある事である。

(大意) 既に地の神界の統治者は確定したが、何しろ宇宙の間は尙未製品時代に屬するので、自由行動を執り、割據爭奪を事とする兇徒界が多い。これは最も露骨に大本開祖の御神諭に示されて居る所で、決して過去の事のみではない。小規模の救世主降臨は過去にあつたが、大規模の眞の救世主降臨は現在である。『七王も八王も王が世界にあれば、此世に口舌が絶えぬから、神の王で治める經綸が致してあるぞよ』とあるなどは即ち之を喝破されたものである。其結果是等惡鬼邪神の大審判、大掃除、大洗濯が開始され所謂世の大立替の大渦中に突入する。さうなると批評も議論も疑義も反抗も全部中止となり稜威赫々として宇内を統治し玉ふ神の御子の世となるのである。

(四)

如此依さし奉りし四方の國中と大日本日高見之國を安國と定め奉りて、下津磐根に宮柱太敷立、高天原に千木多加知りて、皇御孫命の美頭の御舍仕へ奉りて、天の御蔭日の御蔭と隠り坐して、安國と平けく所知食む國中に成出でむ天の益人等が過ち犯しけむ雑々の罪事は。

【四方の國中】 宇宙の大中心。

【大日本日高見之國】 四方眞秀、天津日の隈なく照り亘る國土を稱へてい

ふ。但宇宙の大修祓が濟んでから初めて理想的になるのである。

【下津磐根】 地質が一大磐石の地で即ち神明の降臨ある靈域を指す。

福知山、舞鶴は外圍ひ、十里四方は宮の内とあるも亦下津磐根である。

【宮柱太敷立】 宮居の柱を立派に建てる事。

【千木多加知】 屋根の千木を虚空（高天原）に高く敷きの義。千木は垂木

也。【タリ】を約めて【チ】といふ。

【美頭】 麗しき瑞々しき意。

【仕へ奉り】 御造營の義。

【天の御蔭云々】

天津神の御蔭、日の大神様の御蔭と自分の徳を隠したま

ふ義。神政成就、神人合一の時代に於ては人は悉く神の容器である。世界統一を

實行すとして、其功績は之は天地の御恩に歸し奉るが道の眞隨で、忠孝仁義の大道

は根源をここから發する。坐ながらにして其御威徳は宇内に光被し、世は自然と

平けく安らげく治まるのである。

【天の益人】

天は敬稱である。益人は世界の全人類を指す。【マスラヲ】

といふ時は男子のみを指す。【マ】は完全、【ス】は統治の義。又【ヒ】は靈、

【ト】は留まる義。

【罪事】

【ツミ】は積み也、又包み也。金錢、財寶、糧食等を山積私有す

るは個人本位、利己本位の行爲で、天則に背反して居る。又物品を包み隠したり、

邪心を包藏したり、利用厚生の道の開發を怠つたりする事も墮落腐敗の源泉であ

る。かく罪の語源から調べてかかれれば罪の一語に含まるる範圍のいかに廣いかが

分る。法律臭い思想ではとても其眞意義は解し難い。

(大意) 天祖の御依託によりて救世主が御降臨遊ばさるるに就きては、宇宙の中



心、世界の中心たる國土を以て宇内經綸、世界統一の中府と定め給ひ、天地創造の際から特別製に造り上げてある神定の靈域に、崇嚴無比の神殿を御造營遊ばされ、惟神の大道によりて天下を知らしめされる事になる。神諭の所謂「神國の行ひを世界へ手本に出して萬古未代動かぬ神の世で三千世界の陸地の上を守護」さるるのである。それに就きては直接天津神の手足となり、股肱となりて活動せねばならぬ責任が重い。いかなる事を爲ねばならぬか、又如何なる事を爲てはならぬか、明確なる觀念を所有せねばならぬ。次節に列擧せらるる雑々の罪事といふのは悉く人として日夕服膺せねばならぬ重要事項のみである。

(五)

天津罪とは、畔放ち溝埋め、樋放ち頻蒔き串差し、生剥逆剥尿戸許々太久の罪を、天津罪と詔別けて、國津罪とは、生膚斷、死膚斷、白人胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆虫の災、

高津神の災、高津鳥の災、畜殪し蠱物せる罪、許々太久の罪出む。

【天津罪】

天然自然に賊與せられたる水力、火力、電磁力、地物、礦物、

山物、動植物等の「利用開發を怠る罪」をいふ。前にも言へる如く、所謂積んで置く罪、包んで置く罪也。寶の持腐れをやる罪也。從來は文明だの進歩だのと云つた所が、全然穿き違の文明進歩で一ツ調子が狂へば忽ち饑餓に苦しむやうなやり方、現在世界各國の四苦八苦の有様を見て、人間が如何に天津罪を犯して居るかが解る。神諭に「結構な田地に木苗を植たり、色々の花の苗を作りたり、大切な土地を要らぬ事に使ふたり致し人民の肝腎の生命の親の米、豆、粟を何とも思はず、米や豆や麥は何程でも外國から買へると申して居るが、何時までもさう行かぬ事があるから猫の居る場にも五穀を植付けねばならぬやうになりて來るぞよ。皆物質本位の教であるから、神の國には神國の世の行方に致さして、モ一ぼつぼつと木苗も掘り起させるぞよ」とあるなどは實に痛切骨に徹する御訓戒である。現在の神國人とても歐米人と同じく決して天津罪人の數には漏れぬ人間ばかりである。採鑛事業などになると今の人間は餘程進歩して居る所存で居るが、試

掘と分析位で地底に埋没せる金銀寶玉等が出るものではない。之に比べると、幾分靈覺を加味した佐藤信淵の金氣觀測法などの方が何れ丈か進歩して居る。神靈の御命令と御指示がなくんば、金銀其他は決して出ない。大本神諭に「五六七大神の御出ましにお成なさるにつき、國常立尊が現はれるなり、國常立尊が現はれると、乙姫殿は次ぎに結構な大望な御用が出来て乙姫殿の御寶を上げて新規の金銀を綾部の大本に……。二度目の立替を致して、何も新規に成るのであるから、乙姫殿の御財寶を綾部の大本へ持運びて、新規の金銀を吹く準備を致さな成らぬから云々」とあるなどは時節到來と共に實現して、物質萬能機械一點張りの連中を瞠苦たらしむ事柄なのである。又現在人士は電力、火力、水力、其他の利用にかけて餘程發達進歩を遂げた心算で居るが、一步高所から達觀すると、利用どころか悪用ばかり間接又は直接に人類の破滅、天然の破壊に使用されぬものが幾何かある。是等の點にかけて現在の人士は、所謂知識階級、學者階級ほど血迷ひ切つて居る、天津罪の犯罪者である。

【畔放ち】

天然力、自然力の開發利用の事。

【畔】

(ア)

は當字にて【ア

メ」を約めたもの也。田の畔を開つなどは單に表面の字義に囚はれたる卑近の解釋である。

【溝埋め】水力の利用を指す。【埋め】には【補足】の義と【生育】の義とを包む。湯に水を【うめる】、根を土中に【うめる】、種子を地に【うめる】、孔を【うめる】、鶏が卵を【うむ】など参考すべし。

【樋放ち】樋は火也。電気、磁氣、蒸氣、光力等天然の火力の開発利用を指す。

【頻時き】山の奥までも耕作し不毛の地所などを作らぬ事。頻（シキ）は、敷地の【シキ】也、地所也。時きは捲き也、捲き收める也、席卷也、遊ばせて置かぬ也、遊獵地や、クリケツト、グラウンドなどに廣大なる地所を遊ばせて、貴族風を吹かせて、傲然たりし某國の現狀は果して如何。彼等が世界の土地を横領せる事の大なりし丈、彼等が頻時の天則を無視せる罪惡も蓋し世界隨一であらう。併し其覺醒の時もモ一接近した、これではならぬと衷心から覺る時はモ一目前にある。イヤ半分はモ一其時期が到着して居る。併しこれは程度の差違丈で、其罪

は各國とも皆犯して居る。

【串差し】 【カクシサガシ】の約にて、前人未發の祕奥を發見する事。

【生剥ぎ】 一般の生物の天職を開發利用する事。生物といふ生物は悉く相

當の本務のあるもので、輕重大小の差異こそあれそれぞれ役割がある。鼠でも天井に棲みて人間に害を與ふる恙蟲などを殺すので、絶對的有害無效の動物ではない。剥ぎは開く義、發揮せしむる義也。蠶を「はぐ」などの語を參考すべし。

【逆剥】 逆（サカ）は、榮えのサカ也。酒なども此榮えの意義から發生した語である。剥（ハギ）は生剥の剥と同じく開發の義。即ち全體の義は「榮え開く」事で、廢物をも利用し荒蕪の地を開墾し、豐滿美麗の樂天地を現出せしむる事を指す。

【尿戸】 宇宙一切を整頓し、開發する義。【ク】は組織經綸、【ソ】は揃

へる事、整頓する事、【へ】は開發する事。

【許々太久】 其他種々雜多の義。

【天津罪と詔別て】 以上列擧せる天然力、自然物の利用開發を怠る事を、

天津罪と教へ給ふ義也。

【國津罪】 天賦の國の徳、人の徳を傷つくる罪を指す。

【生膚斷】 天賦の徳性を保ち居る活物の皮膚を切ること也。必要も無きに

動物を害傷し、竹木を濫伐する事等は矢張罪惡である。靈氣充滿せる肉體に外科

手術を施さずとも、立派に治癒する天賦の性能を有して居る。人工的に切斷した

り切開したりするのは天則違反で、徒に人體毀損の罪を積ぬる譯になる。

【死膚斷】 刃物を以て生物一切を殺す罪。

【白人胡久美】 白晝姦淫の事。白日床組といふ醜穢文字を避け、態と當字

を用ひたのである。淫欲は獸肉嗜好人種に隨伴せる特徴で、支那、歐米の人士は

概して此方面の弊害が多い。日本人も明治に入つてから大分其影響を受けて居る

が、元來は此點に於ては世界中で最も淡泊な人種である。淫欲の結果は肺病とな

り、又癩病となる故に白人胡久美を第二義に解釋すれば【白人】は肺病患者、又

は白癩疾者を指し、【胡久美】は黒癩疾者を指す。

【己が母犯せる罪】 母の一字は、父、祖先、祖神等をも包含し、極めて廣

義を有するのである。大體に於て親といふ如し。犯すとは其本来の權能を無視する義也。換言すれば親、祖先、祖神に對して不孝の罪を重ぬる事である。

【己が子犯せる罪】 自己の子孫の權能を無視し、非道の虐待酷使を敢てする事。元來自分の子も、實は神からの預かり物で、人間が勝手に之を取扱ふ事は出来ない。それに矢鱈に親風を吹かせ、娘や倅などを自己の食ひ物にして顧みぬなどは甚だしき罪惡といふべきである。

【母と子と犯せる罪】、【子と母と云々】 上の二句「己が母犯せる罪、己が子犯せる罪」を更に疊句として繰返せる迄で別に意義はない。

【畜犯せる罪】 獸類の天賦の徳性を無視し、酷待したり、殺生したりする事。

【昆蟲の災】 天則違反の罪をいふ。蝮、ムカデなどに刺されるのは皆偶然にあらず、犯せる罪があるにより天罰として刺されるのである。故にかかる場合には直に反省し、悔悟し、謹慎して、神様にお詫を申し上ぐべきである。

【高津神の災】 天災、地變、氣候、風力等の不順は皆これ高津神の業にし

て罪過の甚い所に起るのである。災は「業はひ」也、所爲也。鬼神から主觀的に觀れば一の所爲であるが、人間から客觀的に觀れば災難である。今度の國祖の大立替に、雨の神、風の神、岩の神、荒の神、地震の神、其他八百萬の眷屬を使はるるのも祝詞の所謂高津神の災である。皆世界の守護神、人民の墮落が招ける神罰である。

【高津鳥の災】 鳥が穀物を荒す事などを指すので矢張り神罰である。

【畜殖し】 他家の牛馬鶏豚等を斃死せしむる事。一種のマジナヒ也。

【蟲物】 呪咀也、マジナヒ物也。丑の時参りだの、生木に釘を打つたのは

皆罪惡である。

(大意) 人間は神の容器として宇内經綸の天職がある。殊に日本人の使命は重大を極め世界の安否、時運の興廢、悉く其責任は日本人に係るのである。神諭に「日本は神の初發に修理へた國、元の祖國であるから、世界中を守護する役目であるぞよ。日本神國の人民なら、チトは神の心も推量致して、身魂を磨いて世界の御用に立ちて下されよ」とある通り、天賦の靈魂を磨き、天下獨特の靈智靈覺



によりて、天然造化力の利用開発に努めると同時に、他方に於ては天賦の國の徳、人の徳を發揮することに努め、そして立派な模範を世界中に示さねばならぬのである。然るに實際は大に之に反し、徒に物質文明の糟粕を嘗め、罪の上に罪を重ねて現在見るが如き世界の大擾亂となつて來た。無論日本人は此責任を免るる事は出來ない。併しこれは天地創造の際からの約束で、進化の道程として、蓋し免れ難き事柄には相違ない。されば此祝詞の中に「許々太久の罪出む」とあり、又國祖の神諭にも「斯うなるのは世の元から分つて居る」と仰せられて居る。要するに過去の事は今更悔むには及ばぬ。吾々は現在及び將來に向つて、いかなる態度を執り、いかなる處置を講ずれば宜いかを考究すべきである。次節に其要道を示されて居る。

(六)

如此出でば、天津宮言以て、天津金木を本打切末打斷て、千座の置座に置足はし

て、天津菅曾を本刈絶末刈切て、八針に取裂きて天津祝詞の太祝詞言を宣れ、如  
此宣らば、天津神は天の磐戸を推披來て、天の八重雲を伊頭の千別に千別て所聞  
召む。國津神は高山の末短山の末に登り坐て、高山の伊保理短山の伊保理を搔分  
けて所聞召む。

【天津宮言】

宮言は「ミヤビノコトバ」の義也。正しき言靈也。宇宙の經

綸は言靈の力によりて行はるる事は、前にも述べた。我天孫民族は世界の經綸を  
行ひ、天下を太平に治むべき、重大なる使命を帯びて居る。然るに現在には肝腎の  
日本人が、靈主體從の天則を誤り天津罪、國津罪、數々の罪を重ねて、其結果世  
界の大擾亂を來して居る。之を修被し、整理するの途は、言靈を正し、大宇宙と  
同化するが根本である。換言すれば、肚の内部から芥塵を一掃し、心身共に淨化  
して、常に善言美詞のみを發するやうにせねばならぬ。「惡聲を放ち蔭口をきき  
又は追從輕薄を並べるやうな人間はそれ丈で其人格の下劣邪惡な事が分る」。  
【世界の經綸どころか人として次ぎの新理想時代に生存すべき資格の有無さへ疑  
問である】。日夕祝詞を奏上しても、斯んな肝要至極の點が、さつぱり實行が出

來ぬでは仕方がない。お互に反省の上にも反省を加へねばならぬ事と思ふ。

【天津金木】

則神算木也。周易の算木に相當するものであるが、より以上

に神聖で正確である。本来は長さ二尺の四寸角の檜材なのであるが、運用の便宜上、長さ二寸の四分角に縮製さる。其數三十二本を竝べて、十六結を作製し、其象を觀て、天地の經綸、人道政事一切の得失興廢等を察するのである。それは宇内統治の主が大事に際して運用すべきもので、普通人民が矢鱈に吉凶禍福などを卜するに使用すべきものではない。無意無心の器物を用ゐて神勅を受くるのであるから、ややもすれば肉體心の加味し勝ちな普通の神憑りよりも、一倍正確な事は云ふ迄もない。

【本打切末打斷】

神算木を直方形に作製する仕方を述べたまでである。

【千座の置座云々】

無數の神算木臺に後からズンズン置き竝べる事。

【天津菅曾】

周易の筮竹に相當するが其數は七十五本である。これは七十

五聲を代表するのである。長さは一尺乃至一尺二寸、菅曾は俗稱「ミソハギ」と稱する灌木、莖細長にして三四尺に達す。之を本と末とを切り揃へて使用する也。

【八針に取裂て】

天津菅曾の運用法は先づ總數七十五本を二分し、それから八本づつ取り減らし其殘數によりて神算木を配列するのである。

【天津祝詞の太祝詞】

即ち御襖袂の祝詞の事で、正式に奏上する場合には爰で天津祝詞を奏上するのである。大體に於て述べると、あの祝詞は天地間一切の大修祓を、天神地祇に向つて命ぜらるる重大な祝詞である。太（フト）は美稱で、繰返して、天津祝詞を稱へた迄である。

【宣れ】

【天の磐戸】

神に向つて願事を奏上するの義也。天津神のまします宮門から御出動の義にて、人格的に寫し出せるのである。

【伊頭の千別き云々】

前に出たから略す。地の神界に屬する神々、及び靈魂の神を以て成立し、各自の靈

的階級に應じて大小高下、それぞれの分擔權限を有す。

【高山の末云々】

末は頂上の義。伊保理の伊保も、いぶかしの【いぶ】も、

【伊保理】

隱棲也、隠れたる也。伊保理の伊保も、いぶかしの【いぶ】も、

煙などの【いぶる】も、皆通音で同意義である。

(大意) 天津罪、國津罪の續發は悲しむべき不祥事ではあるが、出來た上は致方がない。よく治亂興廢、得失存亡の理を明かにし、そして整理修祓の法を講ぜねばならぬ。世界主宰の大君としては、天津金木を運用して宇内の現勢を察知し、そして正しき言靈を活用して天津祝詞を天津神と國津神とに宣り傳へて、其活動を促すべきである。これが根本の祭事であると同時に、又根本の政事であつて、祭と政とは決して別途に出るものではない。さうすると、天津神も國津神もよく之に應じて威力を發揮せられる。神諭の所謂「罪穢の甚い所には、それぞれの懲罰がある」又は「地震、雷、火の雨降らして體主靈従をつぶす」といふやうな神力の發動ともなるのである。

(七)

如此所聞食ては、罪といふ罪は不在と、科戸の風の天の八重雲を吹放つ事の如く、

朝あしたの御霧みきり夕ゆふの御霧みきりを、朝風あさかぜ夕風ゆふかぜの吹掃ふきはらふ事ことの如ごとく、大津邊おほつべに居をる大船おほふねを、舳解放へとき放はなち  
とともときはな  
艦解ととも放はなちて大海原おほわたのほらに押放おしはなつ事ことの如ごとく、彼方をちかたの繁木しげきが本もとを、焼鎌やきかまの敏鎌とかま以もて打掃うちはらふ  
事ことの如ごとく、遺のこる罪つみは不在あらずと、被賜はらひたまひ清め玉きよたまふ事ことを。

【かく所食きこしめしては】 【きこしめす】の意義いぎは、單たんに耳みみに聽きくといふよりも遙はるか  
に廣ひろく深ふかい。【きく】は利きく也なり。腕うでが利きく、鼻はなが【きく】、眼めが【きく】、酒さけを  
【きく】、(酒さけの品位ひんゐを飲のみ分わけること)などの【きく】にて一般いっぱんに活くわつ用ようを發揮はつき  
し、威力ありよくを利用りようする義ぎである。天津神あまつかみ、國津神くにつかみ達たちが整理しうばつ修被めいの命めいに應おうじて活くわつ動どうを  
開始かいしする事ことを指さしていふ。

【罪つみといふ罪つみは不在あらずと】 罪つみといふ限かぎりの罪つみは一つも殘のこさずの意い。

【科戸しなどの風かぜの云々うんぬん】 以下いか四聯句しれんくは修被しうばつの形容けいようで、要えうするに「遺のこる罪つみは不在あらずと  
被賜はらひたまひ清め賜たまふ」事ことを麗うらはしき文字もじで比喩ひゆてき的に描ゑがいたものである。科戸しなどは風かぜの枕まくら  
詞ことば、古事記こじきに此神このかみの名なは志那都しなと比古ひこと出でて居ゐる。【シ】は暴風ばうふう(アラシ)の【シ】  
と同おなじく風かぜの事ことである。【ナ】は【ノ】に同おなじく、【ト】は【處ところ】の義ぎ。

【朝あしたの御霧みきり云々うんぬん】 御霧みきりは深ふかき霧きりの義ぎ。

【朝風夕風云々】  
朝風は前の「朝の御霧」に掛り、夕風は「夕の御霧」に掛る。

【大津邊に居る云々】  
地球に於て、肉體を具備されたる神の御出生ありし

は、琵琶湖の竹生島からは、多紀理毘賣命、市寸島比賣命、狹依毘賣命の三姫神、

又蒲生からは天之菩卑能命、天津彦根命、天之忍穗耳命、活津日子根命、熊野久

須毘命の五彦神が御出生に成つた。これが世界に於ける人類の始祖である。かく

琵琶湖は神代史と密接の關係あるが故に、沿岸附近の地名が大祓祝詞中に數箇所

出て居る。大津の地名も斯くして讀み込まれたものである。

【舳解放云々】  
泊居る時に舳艦を繋いで置くが、それを解き放つ意。

【大海原】  
海洋也。

【繁木が下】  
繁茂せる木の下。

【焼鎌の敏鎌】  
焼鎌とは、鎌で焼きて造る故にいふ。敏鎌は利き鎌の義。

【遺る罪は不在と】  
前に「罪といふ罪は不在」とあるのに、更に重ねてか

く述ぶるは、徹底的に大修祓を行ふ事を力強く言ひなしたのであらう。

(大意) 八百萬の天津神と國津神との御活動開始となると、罪といふ罪、穢といふ穢は一つも残らず根本から一掃されて仕舞ふ。大は宇宙の修祓、國土の修祓から、小は一身一家の修祓に至るまで、神力の御發動が無ければ、到底出来るものではない。殊に現代の如く墮落し切つた世の中が、何うしても姑息的人爲的の處分位で埒が附くものでない。清潔法執行の聲は高くても、益々疾病は流行蔓延し、社會改良の工夫は種々に凝らされても、動搖不穩の空氣はいよいよ瀰蔓するではないか。良之金神國常立尊が御出勤に相成り、世の立替立直しを斷行さるるのも誠に萬止むを得ざる話である。されば大祓祝詞は、無論何れの時代を通じても必要で、神人一致、罪と穢の累積を祓清むる様に努力せねばならぬのだが、殊に現在に於ては、それが痛切に必要である。自己の身體からも、家庭からも、國土からも、更に進んで全地球、全宇宙から一時も迅速に邪氣妖氣を掃蕩してうれしうれしの神代に爲ねば、神に對して實に相濟まぬ儀ではないか。

大修祓に際して、神の御活動は大別して四方面に分れる。所謂祓戸四柱の神々の御働きである。【祓戸の神といふ修祓専門の神様が別に存在するのではない】、



【正神界の神々が修祓を行ふ時には】、【此四方面に分れて御活動ある事を指すのである】。以下末段迄は各方面の御分擔を明記してある。

(八)

高山の末短山の末より、作久那太理に落、多岐つ速川の瀬に坐す瀬織津比賣と云ふ神、大海原に持出なむ、如此持出往ば、荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會に坐す速秋津比賣といふ神、持可々吞てむ。如此可々吞ては、氣吹戸に坐す氣吹戸主といふ神、根の國底の國に氣吹放ちてむ。如此氣吹放ちては、根の國底の國に坐す速佐須良比賣といふ神、持佐須良比失ひてむ。如此失ひては、現身の身にも心にも罪と云ふ罪は不在と、祓給へ、清め給へと申す事を所聞食と恐み恐みも白す。

【高山の末云々】

高き山の頂、低き山の頂からの義。

【作久那太理に】

【佐久】は谷也、峽也。【那太理】は【なだれ落つる】

義、山から水が急轉直下し來る事の形容。

【落多岐つ】 逆巻き、湧き上りつつ落つる事。瀧（タキ）、沸（タギル）

等皆同一語源から出づ。

【速川】 急流也。

【瀨織津比賣云々】 古事記の伊邪那岐命御禊の段に、於是詔之上瀨者瀨

速。下瀨者瀨弱而。初於中瀨降迦豆伎而。滌時。所成坐神名八十禍津日神、次大

禍津日神。此二神者所到其穢繁國之時因污垢而。所成之神者也」と出て居るが、

瀨織津の織は借字にて「瀨下津」の義、即ち於中瀨降迦豆伎たまふとある意の御

名である。此神は即ち禍津日神である。世人は大概禍津日神と禍津神とを混同し

て居るが、實は大變な間違である。禍津神は邪神であるが、禍津日神は正神界の

刑罰係である。現界で言へば判檢事、警察官、又は軍人などの部類に屬す。罪穢

が発生した場合には、常に此修祓係、刑罰係たる禍津日神の活動を必要とする。

修祓には大中小の區別がある。大は天上地上の潔齋、中は人道政事の潔齋、小は

一身一家の潔齋である。若し地球に瀨織津比賣の働きが無くんば、萬の汚穢は地

上に堆積して新陳代謝の働きが閉塞する。所が地の水分が間断なく蒸發して、それが雲となり、雨となり、其結果谷々の小川の水が流れ出て未は一つに成りて大海原に持出して呉れるから、天然自然に地の清潔が保たれるのである。現在は地の表面が極度に腐敗し切り、汚染し切り、邪靈小人時を得顔に跋扈して居る。神諭に「今の世界は服装ばかり立派に飾りて上から見れば結構な人民で、神も叶はぬやうに見えるなれど誠の神の眼から見れば、全部四つ足の守護に成りて居るから、頭に角が生えたり、尻に尾が出来たり、無暗に鼻計り高い化物の霸張る、闇雲の世に成りて居るぞよ」餘り穢うて眼を開けて見られぬぞよ」能うも爰まで汚したものでや。足片足踏み込む所もない」等と戒められて居る通りである。此際是非とも必要なるは、世界の洗濯、大清潔法の施行であらねばならぬ。爰に於てか先づ瀬織津姫の大活動と成りて現はれる。七十五日も降りつづく大猛雨なぞは此神の分擔に屬する。到底お手柔な事では現世界の汚穢の洗濯は出来さうも無いやうだ。神諭にも「罪穢の甚大い所には何があるやら知れぬぞよ」と繰返し繰返し警告されて居る。世界の表面を見れば、そろそろ瀬織津比賣の御活動

は始まりつつあるやうだ。足下に始まらなくては氣が附かぬやうでは困つたものだ。

【荒鹽の鹽の八百道の云々】

全體は荒き潮の彌が上に數多寄り合ふ所の義。

八は彌の意、【八百道】は多くの潮道の事、八鹽道は上の鹽の八百道を受け重ねていへる丈である。八百會は澤山の鹽道の集まり合ふ所。

【速秋津比賣】

古事記に「水戸神、名速秋津日子神。次妹秋津比賣命」と

あるが如く河海の要所を受持ちて働く神也。

【持可々呑てむ】

聲立ててガブガブ呑むの義也。汚れたる世界の表面を洗

滌する爲には既に瀨織津比賣の働きが起りて大雨などが降りしきるが、河海の水とみなと本據を有する秋津比賣が、次に相呼應して活動を開始する。大洪水、

大海嘯、大怒濤、此神にガブ呑みされては田園も山野も、町村も耐つたものでは

ない。所謂桑田變じて碧海と成るのである。

【氣吹戸】

近江の伊吹山は氣象學上極めて重要な場所である。伊吹は「息

を吹く所」の義で、地球上に伊吹戸は無數あるが、伊吹戸中の伊吹戸とも云ふべ

きは近江の伊吹山である。最近伊吹山に氣象觀測所が公設されたのは、新聞紙の傳ふる所であるが、大本では十年も二十年も以前から豫知の事實である。

【氣吹戸主】 大雨、洪水、海嘯等の活動に續いては、氣象上の大活動が伴うて妖氣邪氣の掃蕩を行はねばならぬ。元寇の役に吹き起つた神風の如きも、無論この伊吹戸主の神の御活動の一端である。

【根の國底の國】 地球表面に於ては北極である。神諭に「今迄は世の元の神を、北へ北へ押籠めて置いて、北を悪いと世界の人民が申て居りたが、北は根の根、元の國であるから、北が一番善く成るぞよ……」。人民は北が光ると申して不思議がりて、いろいろと學や智慧で考へて居りたが、誠の神が一處に集りて、神力の光を現はして居る事を知らなんだぞよ」とあるが、眞に人間の智慧や學問では解釋の出来ない神祕は北に隠されて居る。北光、磁力は申すに及ばず、氣流や、氣象なども北極とは密接の關係がある。即ち地球の罪穢邪氣は、悉く一旦北極に吹き放たれ、爰で遠大なる神力により處分されるのである。序に一言して置くが、罪を犯した者が根の國、底の國に落ちるのは、詰まり神罰で、これも一つ

の修被法執行の意義である。別に根の國底の國といふ地獄めきたる國土が存在するのではない。何處に居ても神罰執行中は其處が根の國底の國である。

【速佐須良比賣】 【佐須良】は摩擦（サスル）也、揉むこと也、空にありては雷、地にありては地震、皆これ佐須良比賣の活動である。要するに全世界の大修被法は、大雨で流し、洪水海嘯等で掃ひ、大風で吹き飛ばし、最後に地震雷で揺つて揺つて揺り滅すのである。それが即ち神諭の世界の大洗濯、大掃除、第二次の大立替である。『天の大神様がいよいよ諸國の神に、命令を降しなされたら、良金神國常立尊が總大將となりて雨の神、風の神、岩の神、荒の神、地震の神、八百萬の眷族を使ふと一旦は激しい』とあるのは、被戸四柱の神々の活動を指すのである。詳しく言へば雨、荒、風、地震の神々がそれぞれ瀬織津比賣、秋津比賣、氣吹戸主、佐須良比賣の神々の働きをされるので、岩の神が統治の位置に立つのである。學問の末に囚はれた現代人士は、是等の自然力を科學の領分内に入れて解釋しようとして試みて居るがそれは駄目だ。實は皆一定の規律と方針の下に行はるる所の神力の大發動である。その事は、今年よりは來年、來年よりは來々

年といふ具合に、段々世界の人士が承服する事に成るであらう。

### 【所聞食と】

八百萬の神達に宣り上ぐる言葉である。神々に向つて活動開

始、威力發揮を祈願する言葉である。即ち天地の神々様も、此宣詞をしつかり腹

に入れ、四方面に分れて、大修祓の爲に活力を發揮し玉へと云ふ事である。我惟

神の大道がいかに拜み信心、縋り信心と天地の相違あるかは、此邊の呼吸を觀て

も分るであらう。末段祓戸四柱神の解釋説明を下すに當り、自分は全體の統一を

慮り、又大本神諭との一致を失はぬやう、主として地球全體世界全體經綸の見地

から筆を下した。併しこれは、より大きくも、又より小さくも解釋が出来る事は

前にも述べた通りである。宇宙の神人、萬有一切の事は皆同一理法に支配せられ、

宇宙に眞なる事は地球にも眞、地球に眞なる事は一身一家にも又眞である。参考

の爲めに爰に簡単に他の一二の解釋法を附記して置かう。個人潔齋の上から述べ

ると瀨織津比賣の働きは行水、沐浴等の事、秋津比賣は合嗽の事、伊吹戸主は深

呼吸などの事、佐須良比賣は冷水摩擦、按摩等の事である。人身生理の上から述

べると、瀨織津比賣は口中にて食物咀嚼の機能、秋津比賣は食道から胃腸に食物

を運ぶ機能、氣吹戸主は咀嚼して出た乳汁を肺臓に持ち出す機能、佐須良比賣は肺臓にて空氣に觸れ、それから心臓に歸り、そして全身へ脈管で分布せらるる機能を指すのである。かくの如く大被祝詞は大小に拘はらず、ありとあらゆる有機組織全部に必要な新陳代謝の自然法を述べたものである。

(大意) さて地球の表面の清潔法施行のためには、先づ大小の河川を司どる瀨織津姫が御出勤になり、いよいよとなれば、大雨を降らして苛くも汚れたものは家庫たると、人畜たるの區別なく大海へ一掃して了ふ。之に應じて速秋津姫の活動が起り、必要あれば逆に陸地までも押し寄せ、あらゆる物を鵜呑みにする。邪氣妖氣掃除の目的には氣吹戸主神が控へて居り、最後の大仕上げには佐須良比賣が待ち構へて、揉みに揉み碎き、搖りに搖り潰す。これでは如何に山積せる罪穢も此の世から一掃されて品切れになる。従来は大被の祝詞は世に存在しても其意義すら分らず、従つて其實行が少しも出来て居なかつた。其大實行着手が國祖國常立尊の御出勤である。神國人の責務は重いが上にも重い。天地の神々の御奮發と御加勢とを以て首尾克く此大經綸の衝に當り神業に奉仕するといふのが、これが大



祓奏らひそつじやうしや上者じやうしやの覺悟かくごであらねばならぬ。(完)

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

靈界物語 第三九卷 舍身活躍 寅の巻

終り